

来住廃寺

—第19次調査—

1996

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

来住廃寺

—第19次調査—



1996

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭図版Ⅰ 調査地より米住庵寺を望む（西より）

序

松山市の南東部にある米住台地は、現在、平井谷に水源を発する堀越川と小野川に挟まれた地味の肥沃な農耕地となっています。この台地上における近年の継続的な発掘調査により検出された7世紀を中心とする諸遺構は、徐々にその全貌が明らかになりつつあります。

そのなかでも特に、国指定史跡来住庵寺跡の西隣に所在する「回廊状遺構」と呼ばれる遺構は、昭和62年度の北回廊部分を検出して以来、柱列が…辺約108mの方一町四方に並ぶことが確定的となっています。さらにその後の発掘調査により、回廊内部の北側中央部で「正殿的建物」の一部が検出されたことから、この回廊状遺構の性格についての論議が活発化してきました。

さて、本書は、平成4年度に行われた回廊状遺構の南面中央の「門」に相当する位置を含む、回廊状遺構内部の発掘調査報告書です。この位置において、南回廊部分を検出するとともに、その回廊に八脚門が付設されていることが明らかになりました。また回廊内部において、南北10間、東西11間のL字形に折れ曲がる棚列を検出しています。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係者各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関して、より一層のご協力をお願い申し上げます。

さらに本書が、松山市民をはじめ多くの方々に、埋蔵文化財に対する理解向上と調査研究のために、ご活用いただければ幸いです。

平成8年6月20日

財団法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田中誠

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成4年4月～平成5年1月に松山市来住町833・844・845番地内で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、西尾幸則の責任のもと、水本完児、小笠原善治を中心に行つた。遺構の撮影は、西尾幸則、大西朋子が行つた。
3. 遺構は、呼称を略号で記述した。柵列：S A、掘立柱建物址：掘立、土坑：S K、溝：S D、柱穴：S P、性格不明遺構：S Xである。
4. 遺物の実測及び掲載図の製図は、西尾幸則の指示のもと、宮内慎一、水本完児を中心に志賀夏行、岡本邦栄、森田利恵、中村紫、生薦真弓、古角優子他が行つた。なお、石器の実測は加島次郎が行つた。
5. 掲載の遺構図・遺物図は、各スケール下に縮尺を表記した。
6. 本書に使用した方位は、すべて真北である。
7. 写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行つた。
8. 本書の執筆は、宮内慎一、水本完児が行い、西尾幸則、橋本雄一両氏の助言を得た。証書は白石公信の協力を得た。
9. 編集は宮内慎一が担当し、校正においては水本完児の協力を得た。
10. 本報告書にかかる遺物・記録物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管・収蔵している。

本文目次

第I章 はじめに

1. 調査に至る経過.....	1
2. 組織.....	1

第II章 遺跡の概要

1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	3

第III章 調査の概要

1. 調査の経過.....	6
2. 層位.....	6
3. 遺構と遺物.....	19
(1) 古代の遺構と遺物.....	19
(1) 回廊状遺構・門.....	19
(2) 棚列.....	25
(3) 掘立柱建物址.....	26
(4) 性格不明遺構.....	30
(5) 溝.....	38
(6) 土坑.....	38
(7) その他の遺構と遺物.....	39
(2) 古墳時代の遺構と遺物.....	39
(1) 土坑.....	39
(2) 溝.....	42
(3) 弥生時代の遺構と遺物.....	42
(1) 土坑.....	43
(2) その他の遺構と遺物.....	50
(4) 時期不明の遺構と遺物.....	52
4. 結び.....	53
第IV章 調査の成果と課題.....	72

挿 図 目 次

第1図 松山平野の地質図.....	2
第2図 来住・久米地区の主要遺跡分布図 (縮尺 1:50,000)	4
第3図 調査地位置図 (縮尺 1:1,500)	7
第4図 調査地測量図 (縮尺 1:400)	8
第5図 北壁土層図 (縮尺 1:40)	9
第6図 東壁土層図 (縮尺 1:40)	11
第7図 南壁土層図 (縮尺 1:40)	13
第8図 西壁土層図 (縮尺 1:40)	15
第9図 造構配置図 (縮尺 1:200)	17
第10図 門測量図 (縮尺 1:100)	20
第11図 回廊状造構・門出土遺物実測図 (縮尺 1:3、1:4)	20
第12図 回廊状造構測量図 (縮尺 1:80)	21
第13図 棚列SA1測量図 (縮尺 1:100)	23
第14図 棚列SA2測量図 (縮尺 1:100)	25
第15図 挖立1測量図 (縮尺 1:100)	26
第16図 挖立2・掘立3測量図 (縮尺 1:100)	27
第17図 挖立1出土遺物実測図 (縮尺 1:4、1:3)	29
第18図 挖立2出土遺物実測図 (縮尺 1:3)	30
第19図 SX1測量図 (縮尺 1:100)	31
第20図 SX1出土遺物実測図(1) (縮尺 1:3、1:6)	32
第21図 SX1出土遺物実測図(2) (縮尺 1:6)	33
第22図 SX1出土遺物実測図(3) (縮尺 1:6)	34
第23図 SX1出土遺物実測図(4) (縮尺 1:6)	35
第24図 SX1出土遺物実測図(5) (縮尺 1:6)	36
第25図 SX1出土遺物実測図(6) (縮尺 1:3、1:4)	37
第26図 包含層(古代)出土遺物実測図 (縮尺 1:3)	39
第27図 SK19測量図 (縮尺 1:40)	40
第28図 SK19出土遺物実測図 (縮尺 1:3、1:4)	41
第29図 SK22測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1:40、1:3)	42
第30図 SK2測量図 (縮尺 1:40)	43
第31図 SK2出土遺物実測図 (縮尺 1:4)	44
第32図 SK6・SK7・SK8測量図 (縮尺 1:40)	45
第33図 SK6・SK8出土遺物実測図 (縮尺 1:4)	45
第34図 SK10・SK11測量図 (縮尺 1:40)	46
第35図 SK12・14・18測量図 (縮尺 1:40)	47
第36図 SK10~14出土遺物実測図 (縮尺 1:4)	48

第37図	S K18出土遺物実測図	(縮尺 1:4)	49
第38図	ピット出土遺物実測図	(縮尺 1:4)	50
第39図	包含層(弥生時代)出土遺物実測図	(縮尺 1:4)	51
第40図	S K32出土遺物実測図	(縮尺 1:3)	52
第41図	包含層出土遺物実測図	(縮尺 2:3)	53

表 目 次

表1	調査区一覧	6
表2	回廊状造構柱穴(外側)一覧	57
表3	回廊状造構柱穴(内側)一覧	57
表4	回廊状造構柱穴間隔一覧	58
表5	回廊状造構外側柱穴一内側柱穴間隔一覧	58
表6	門柱穴一覧	59
表7	S A 1柱穴一覧	59
表8	S A 1柱穴間隔一覧	60
表9	S A 2柱穴一覧	60
表10	掘立柱建物址一覧	61
表11	土坑一覧	61
表12	溝一覧	63
表13	回廊状造構・門出土遺物観察表(土製品)	63
表14	掘立1出土遺物観察表(土製品)	64
表15	掘立1出土遺物観察表(瓦製品)	64
表16	掘立2出土遺物観察表(土製品)	64
表17	掘立2出土遺物観察表(瓦製品)	64
表18	S X 1出土遺物観察表(瓦製品)	65
表19	S X 1出土遺物観察表(土製品)	65
表20	包含層(古代)出土遺物観察表(土製品)	66
表21	S K19出土遺物観察表(土製品)	66
表22	S K22出土遺物観察表(土製品)	67
表23	S K 2出土遺物観察表(土製品)	67
表24	S K 6・S K 8出土遺物観察表(土製品)	68
表25	S K10~14出土遺物観察表(土製品)	68
表26	S K18出土遺物観察表(土製品)	69
表27	ピット出土遺物観察表(土製品)	69
表28	包含層(弥生)出土遺物観察表(土製品)	70
表29	S K32出土遺物観察表(土製品)	70
表30	包含層出土遺物観察表(石製品)	71

図版目次

卷頭図版 1	調査地より来往寺を望む（西より）
図版 1	1. 調査前全景（南西より） 2. 西壁土層（南東より）
図版 2	1. 造構検出状況①（南東より） 2. 造構検出状況②（東より）
図版 3	1. 造構検出状況③（北東より） 2. 回廊状造構検出状況①（南より）
図版 4	1. 回廊状造構検出状況②（西より） 2. 回廊状造構検出状況③（西より）
図版 5	1. 門検出状況（南より） 2. 棚列 S A 1 検出状況（南より）
図版 6	1. 棚列 S A 2・掘立 3 検出状況（北西より） 2. 掘立 1・掘立 2 検出状況（北東より）
図版 7	1. 掘立 1 (S P 67) 遺物出土状況（西より） 2. 掘立 1 (S P 7) 遺物出土状況（南より）
図版 8	1. 掘立 2 (S P 99) 遺物出土状況（南西より） 2. SX 1 検出状況（北東より）
図版 9	1. SX 1 遺物出土状況①（南西より） 2. SX 1 遺物出土状況②（北より）
図版 10	1. SX 1 遺物出土状況③（東より） 2. SD 1 ~ 4・SK 18・SK 19 検出状況（西より）
図版 11	1. SK 19 遺物出土状況①（南東より） 2. SK 19 遺物出土状況②（南東より）
図版 12	1. SK 2 検出状況（南より） 2. SK 8 検出状況（北より）
図版 13	1. SK 2 遺物出土状況（南より） 2. SK 18 遺物出土状況（南より）
図版 14	1. 回廊状造構出土遺物（1・2・4・5）門出土遺物（3・6・7） 2. 掘立 1 出土遺物①
図版 15	1. 掘立 1 出土遺物②（17・18） 2. 掘立 2 出土遺物（19~21）
図版 16	1. SX 1 出土遺物①
図版 17	1. SX 1 出土遺物②
図版 18	1. SX 1 出土遺物③
図版 19	1. SX 1 出土遺物④
図版 20	1. SX 1 出土遺物⑤
図版 21	1. SX 1 出土遺物⑥（34~39・44） SK 19 出土遺物（58・60・61） SK 22 出土遺物（72）
図版 22	1. SK 2 出土遺物（73~75） SK 6 出土遺物（77・78）
図版 23	1. SK 8 出土遺物（79・81） SK 10 出土遺物（82・83） SK 11 出土遺物（84） SK 13 出土遺物（88） SK 14 出土遺物（89）
図版 24	1. SK 18 出土遺物
図版 25	1. SP 82 出土遺物（98・100） SP 155 出土遺物（101・102） 包含層出土遺物①（108~110・114・117） SK 32 出土遺物（122・123）
図版 26	1. 包含層出土遺物②

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

1990(平成2)年7月、三好鉄己氏より松山市米住町833・844・845番地内における専用住宅建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No127 米住廃寺跡」内にあたり、周知の遺跡として知られている。当地は松山城の南東約4.5km、洪積台地からなる米住舌状台地西端近くに立地する。米住台地一帯は、米住廃寺を含め古代久米郡の政治的中枢地域として注目される地域である。

これまでの調査で、米住廃寺に先行する建物と考えられる回廊状遺構の存在が確認されている。とりわけ同廊状遺構の南面は、昭和53年度の第3次調査において南東部、昭和63年の第7次調査において、南西コーナーが確認されており、当地はそれらの延長線上に位置する。特に、7次調査地の一部が今回の申請地と重複していることや試掘調査の結果などから、遺跡の存在は確実視された。

この結果を受け、申請者と文化教育課の二者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、住宅建設により失われる遺構・遺物に対し、記録保存のため発掘調査を実施することになった。

発掘調査は国指定史跡「米住廃寺」に関する寺域確認及び、回廊状遺構の確認を主目的とし、財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと1992(平成4)年4月7日に開始した。

2. 組織

(1) 調査組織

調査地 松山市米住町833・844・845番地

遺跡名 米住廃寺19次調査地

調査期間 1992(平成4)年4月7日～1993(平成5)年1月31日

調査面積 1,863.95m²

調査協力 三好 鉄己

調査担当 西尾 幸則【現 松山市教育委員会文化教育課 主幹補兼文化第2係長】

水本 完児

小笠原善治

(2) 刊行組織(平成8年6月20日 現在)

松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷

生涯教育部 部長 渡辺 和彦

次長 三好 優彦

文化教育課 課長 松平 泰定

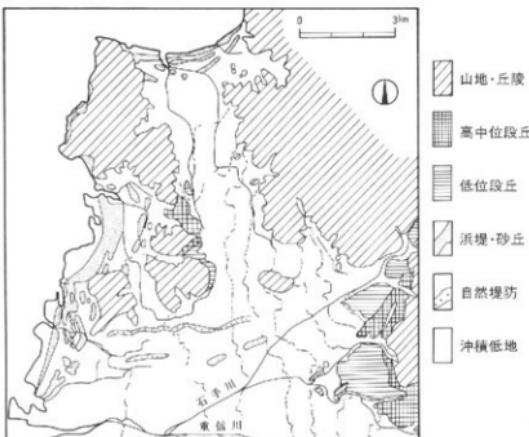
鳴松山市生涯学習振興財団 理事長 田中誠一
 事務局長 池田秀雄
 事務局次長 丹下正勝
 埋蔵文化財センター 所長 河口雄三
 次長 田所延行
 調査係長 田城武志
 調査主任 栗田正芳 (文化教育課職員)

第II章 遺跡の概要

1. 地理的環境 (第1図)

松山平野は伊予灘と燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。この平野は、石手川と重信川という二大河川の解析活動により形成された沖積平野である。2つの河川は高縄山地と石鎚山に水源を発し、解析谷を形成しながら平野部へ流れ出し、扇状地を形成する。本遺跡が所在する松山市来住町周辺には小野川、川付川、前川、内川などの大小河川が流れている。そのうち、小野川は平井谷に水源を発し、平井町付近で扇状地を形成しながら、やがて石手川に合流する。この台地の北辺を平井谷に水源を発する堀越川が流れ、南辺を流れる小野川と合流する。この二河川に挟まれた地域は舌状に形成されていることから、来住舌状台地とも呼ばれている。

地質学的には、段丘堆積物で形成される洪積台地に、小野川から流れ出た扇状地堆積物が覆いかぶさるような格好で、本台地は形成されている。



第1図 松山平野の地質図

2. 歴史的環境（第2図）

松山平野西部を流れる小野川と堀越川に挟まれた洪積台地は来住舌状台地と呼ばれている。この台地上には国指定史跡の米住廃寺跡の他、縄文時代から中世に至る遺跡が近年、多数発見されている。

旧石器時代

当地域における旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器などが数点検出されているが、遺構に伴うものではなく、当時の社会環境などの復元には至っていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は後期から晩期に限られる。後期では久米塚田森元遺跡〔栗田茂敏 1989〕の土坑から後期後葉の土器群が出上しており、この時期の資料としては貴重なものといえる。晩期では台地南西部の南久米片廻り遺跡2次調査〔松村 淳 1991〕において、晩期後葉の土器が検出されている。松山平野北部の大瀬遺跡出土資料に後続する段階のものとして考えられている。

弥生時代

前期：久米高畠遺跡5・9次調査〔宮崎泰好 1989・池田 学 1991〕では前期前半の土器が出上している。後半には検出遺構が増加し、前述の久米高畠遺跡9次調査検出の竪穴式住居址からは前期末の土器が出土しているほか、来住V遺跡〔吉本 拡 1981〕では、環濠状遺構が検出されている。

中期：久米塚田遺跡では竪穴式住居址や土坑・土壙墓など前葉までの資料が検出され、台地西方にまで集落の広がりがうかがわれる。後半になると、古屋敷C遺跡〔梅木謙一 1992〕では、L字状に屈曲する溝が検出され、溝内から中期後半から後期初頭の土器が集中して出土している。また、来住廃寺遺跡15次調査〔西尾幸則 1993〕では完形の土器が多数出土するなど、集落構造解明や土器編年研究において充実をみせている。

後期：来住遺跡〔小笠原好彦 1979〕では、竪穴式住居址や土坑・土壙墓が確認されているほか、福音小学校構内遺跡〔梅木謙一・武正良浩 1995〕においても大規模な集落が確認されている。

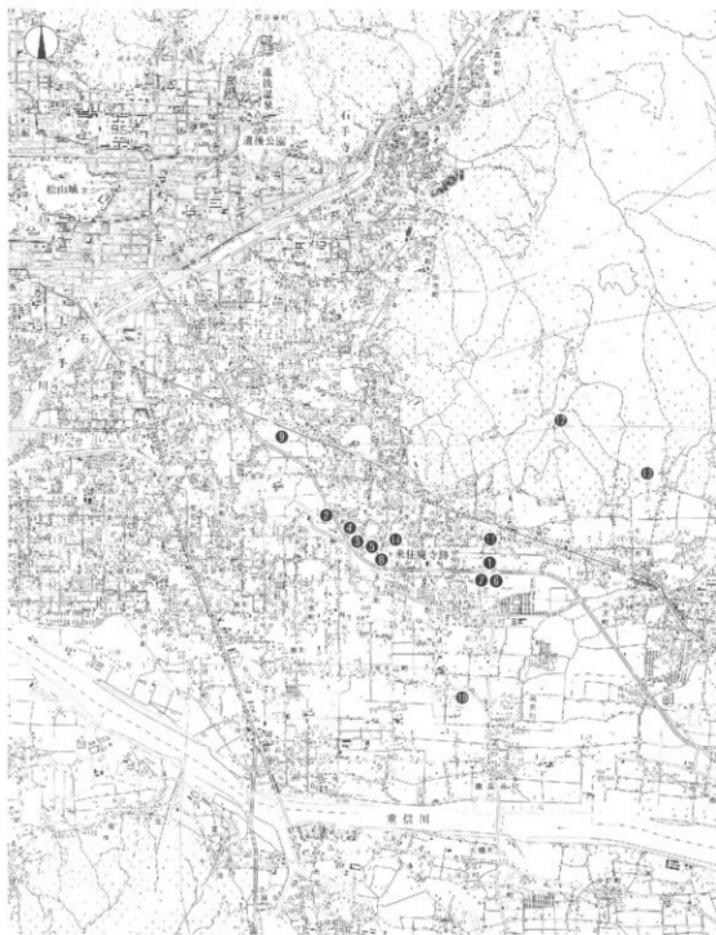
このように、当地域は弥生時代を通して集落が継続的に営まれていたことが推測される。

古墳時代

来住台地周辺には後期古墳が集中して存在する。平野部では二ツ塚古墳や波賀部神社古墳、タンチ山古墳などの大規模な前方後円墳が出現する。丘陵部においては、近年、かいなご古墳や平井谷古墳1号墳〔田城武志 1992〕などの発掘調査が行われ、集落とのつながりを考えるうえで貴重な資料が揃いつつある。

集落：台地の西側で検出事例が多い。久米高畠遺跡5次調査では、中期末の竪穴式住居址が検出されているほか、後期では来住廃寺17次調査において7世紀前半頃の竪穴式住居址を確認している。

道路の概要



- | | | | |
|----------------|--------------|-------------|--------------|
| 1 久米庭田森元遺跡 | 5 久米高畠遺跡(9次) | 9 福音小学校構内遺跡 | 13 平井谷1号墳 |
| 2 南久米片堀り遺跡(2次) | 6 来住V遺跡 | 10 波賀部神社古墳 | 14 来住庵寺(17次) |
| 3 久米高畠遺跡(5次) | 7 古屋敷C遺跡 | 11 タンチ山古墳 | |
| 4 久米高畠遺跡(7次) | 8 来住庵寺(15次) | 12 かいなご古墳 | |

第2図 来住・久米地区の主要遺跡分布図 ($S = 1:50,000$)

古代

久米高畠造跡7次調査〔西尾幸則 1989〕では「久米評」線刻の須恵器が出土し、7世紀中葉まで遡る可能性が高い「久米評」の存在が確実視されている。また、約109~110m四方（方一町）規模の区画溝で開まれた「回廊状造構」が存在する。7世紀後半の齊明天皇の「石湯行宮」に比定する説も有力である〔松原弘宣 1991〕。なお、回廊状造構は白鳳期の寺院である「来住庵寺」に先行するものと考えられている。これらのことから来住庵寺跡を含め来住台地一帯は古代久米郡の中心地であったことがうかがわれる。

中世

麁ノ子遺跡〔宮本一夫 1989〕では、地境の溝などが確認されるなど、近年調査事例が増加しつつある。特に土器研究においては関心が高まっており、来住台地の中世資料は大いに注目されるものとなつた。

【文献】

- 柴田 茂敏 1989 「久米塚田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 松村 勤 1991 「市久米片廻り遺跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 安崎 泰好 1989 「久米高畠造跡5次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 池田 学 1991 「久米高畠造跡9次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 吉本 拓 1981 「来住V遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告II』愛媛県教育委員会・財愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 梅木 謙一 1992 「久米塚田古墳敷C遺跡」『来住・久米地区的遺跡』財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 西尾 幸則 1993 「来住庵寺遺跡第15次調査報告書」松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 小笠原好彦 1979 「来住庵寺」松山市教育委員会
- 梅木 謙一 1995 「福吉小学校構内遺跡－弥生時代編－」財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 武正 良浩 1995 「波賀部神社古墳」「二ヶ塚古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
- 田城 武志 1992 「平井谷1号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報IV』財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 西尾 幸則 1989 「久米高畠造跡7次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- 松原 弘宣 1991 「熱田津と古代伊予國～久米地域を中心に～」松山市考古館第1回講演会「熱田津と来住台地～7世紀における西瀬戸内海地域～」
- 宮本 一夫 1989 「麁ノ子・樽味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査室

第III章 調査の概要

1. 調査の経過（第3図）

1967（昭和42）年、大山正風氏により来住庵寺1次調査が行われて以来、現在までに数多くの寺域調査が実施されている。1次調査では来住庵寺の塔基壇が確認されている。2次調査以降、一辺約108m四方（方一町）規模の区画溝と、回廊状造構を検出している。回廊状造構は昭和52年度、2次調査にて東面回廊を、昭和53年度の3次調査では、東面回廊の延長と南東コーナー部分を検出した。昭和62年度、5次調査では北面回廊及び北西コーナーの一部を検出し、昭和63年度、7次調査では南東コーナー及び南面回廊の一部（本調査と重複）を検出した。

最近では、平成5年度、23次調査にて西面回廊の一部を検出している。この調査では、一部柱穴の建て替えが行われていることが判明している。また、区画溝についても回廊状造構とともに検出されている。

調査は1992（平成4）年4月7日から1993（平成5）年1月31日までの約10ヵ月間を費やした。調査の進行上、調査地内を4つの地区に区分した。調査地の西半部を北から順に1・2・3区、東半部を4区と呼称した（第4図）。そのうち4区については国庫補助対象事業である。各調査区の調査面積や調査期間等は表1に記す。なお、各調査区において検出した造構・遺物等が重複する場合があるため、本稿では各調査結果をまとめて、1遺跡の調査として報告を行う。

表1 調査区一覧

調査区名	1区	2区	3区	4区
事業名	民間	民間	民間	国庫補助
調査面積(m ²)	207.06	245.02	218.12	440.36
調査期間	平成4年4月9日 ～同年9月30日	平成4年4月9日 ～同年9月30日	平成4年4月9日 ～同年9月30日	平成4年8月30日 ～平成5年1月31日

2. 層位（第5～8図、図版1）

調査地は小野川右岸に開かれた来往舌状台地の西端付近、標高39m前後に立地する。調査以前は耕地整備された水田であった。調査対象面積は1,863.95m²であるが、耕上置き場等のため実際の調査面積は1,110m²余りである。

基本層位は第I層表土、第II層茶褐色土、第III層灰褐色土、第IV層暗灰褐色土、第V層黄褐色土である。

第I層 近現代の造成に伴う客土及び、水田耕作土である。地表下15～60cmまで開発が行われている。

第II層 水田耕作に伴う床土である。厚さ5～15cmを測る。

第III層 調査地北西隅、南西部及び南東部に検出された。部分的に検出された土層で厚さは5～10cm程度である。遺物は土師器・須恵器小片が少量出土している。門を構成する柱穴上

層位

面には本層が覆う。

第Ⅳ層 調査地南西部のみに検出された。粘性の強い土壤で厚さ5~10cm程度を測る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器などを包含する。

第Ⅴ層 ややシルト質の土壤である。調査地東北部や中央部付近では第Ⅰ層下に第Ⅴ層が検出された。本層上面は調査における遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると調査区西北部が最も高く南東部に向けてわずかに緩傾斜をなす(比高差約10cm)。



第3図 調査位置図

調査の概要

遺構はすべて第V層上面での検出である(第9図)。回廊状遺構、門、柵列2基、掘立柱建物址3棟、溝7条、土坑45基、性格不明遺構1基、ピット659基(回廊、門、柵列、掘立柱建物柱穴を含む)他である。ただし、検出された遺構はその深さなどから判断すると、本来は第IV層以上の層から掘り込まれた可能性が高い。

遺物は遺構内及び包含層からの出土であり、弥生土器(前期末～後期)、土師器(古墳～中世)、須恵器(古墳～古代)、陶器(近世)、瓦(古代)のほか石庖丁、石鎌・石斧等である。

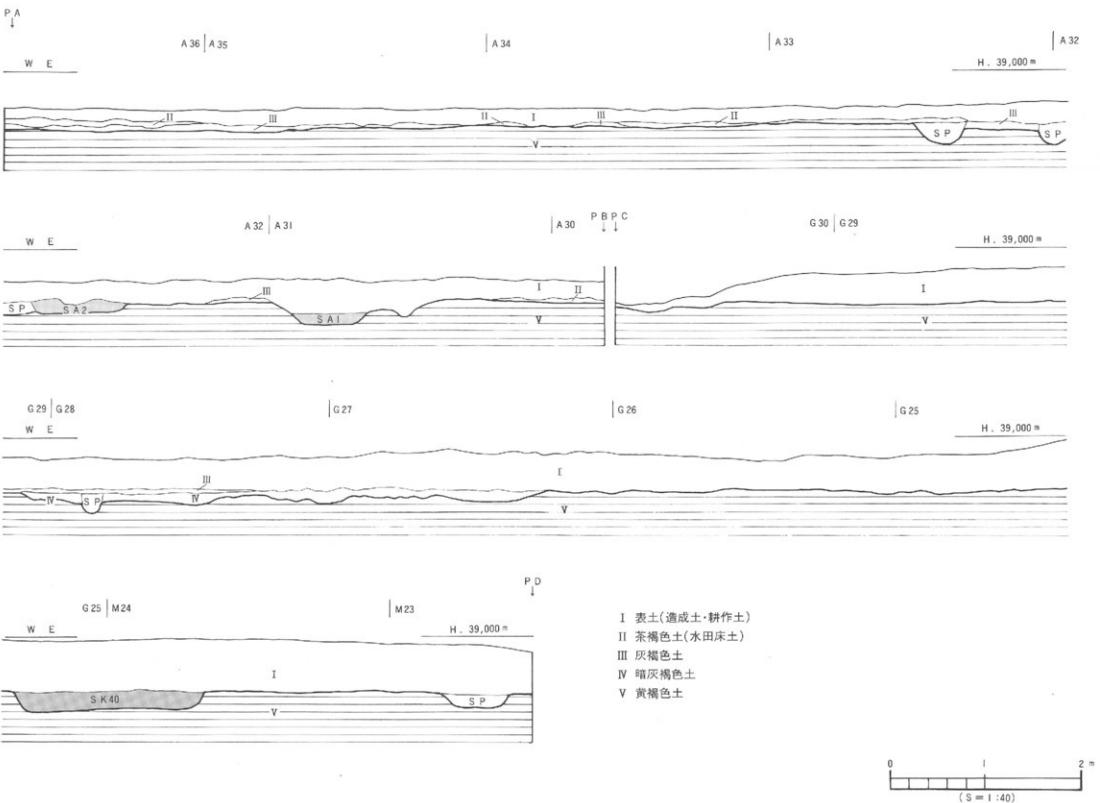
なお、調査に際して回廊状遺構をはじめとする主要な遺構については、基本的に半裁するにとどめ全掘は行っていない。これは調査地内に予定されている住宅建設が、1m以上盛土されたうえで実施されることが調査以前から確認されていたため、遺構の保存という観点よりとられた方法である。ただし、遺物の出土が予想された土坑や溝に関してはほぼ全掘している。

また、調査に先立ち、調査区内を3m四方のグリッドに分けた。これは、国家座標第IV座標系に基づく地区割りに準ずるものである。

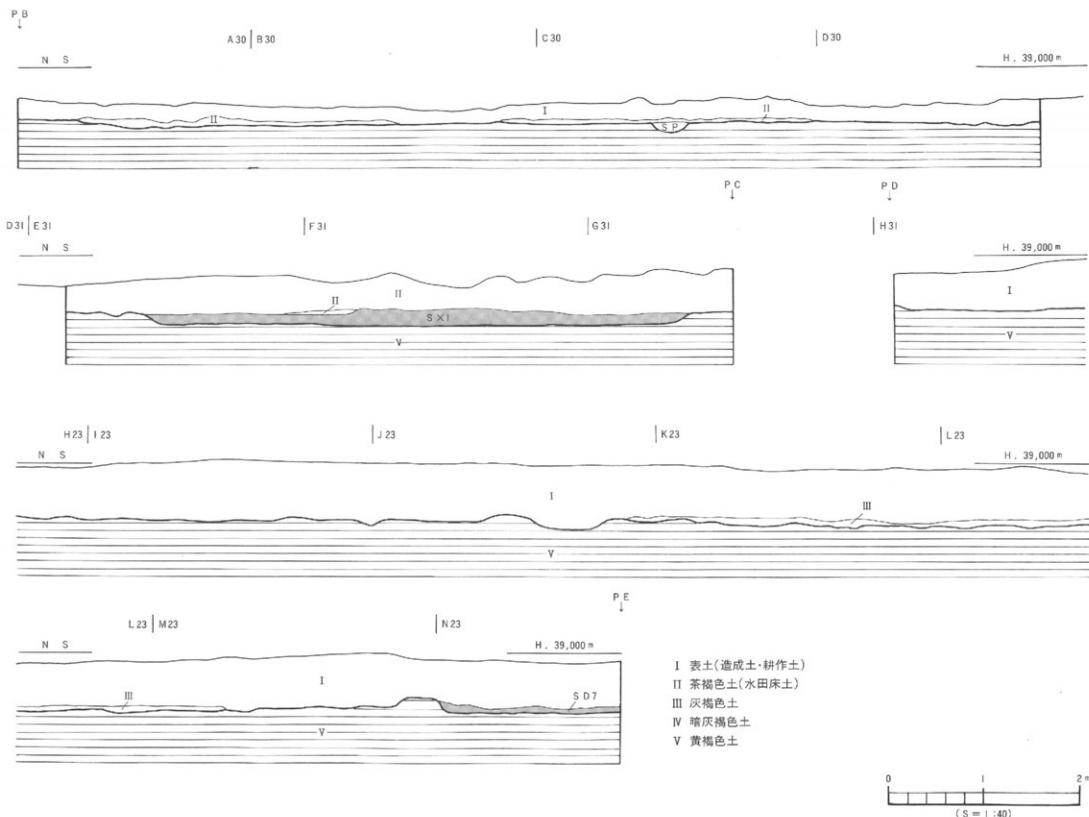
なお、土層図に記載されているポイントPA～PFは第9図にポイント位置を提示している。



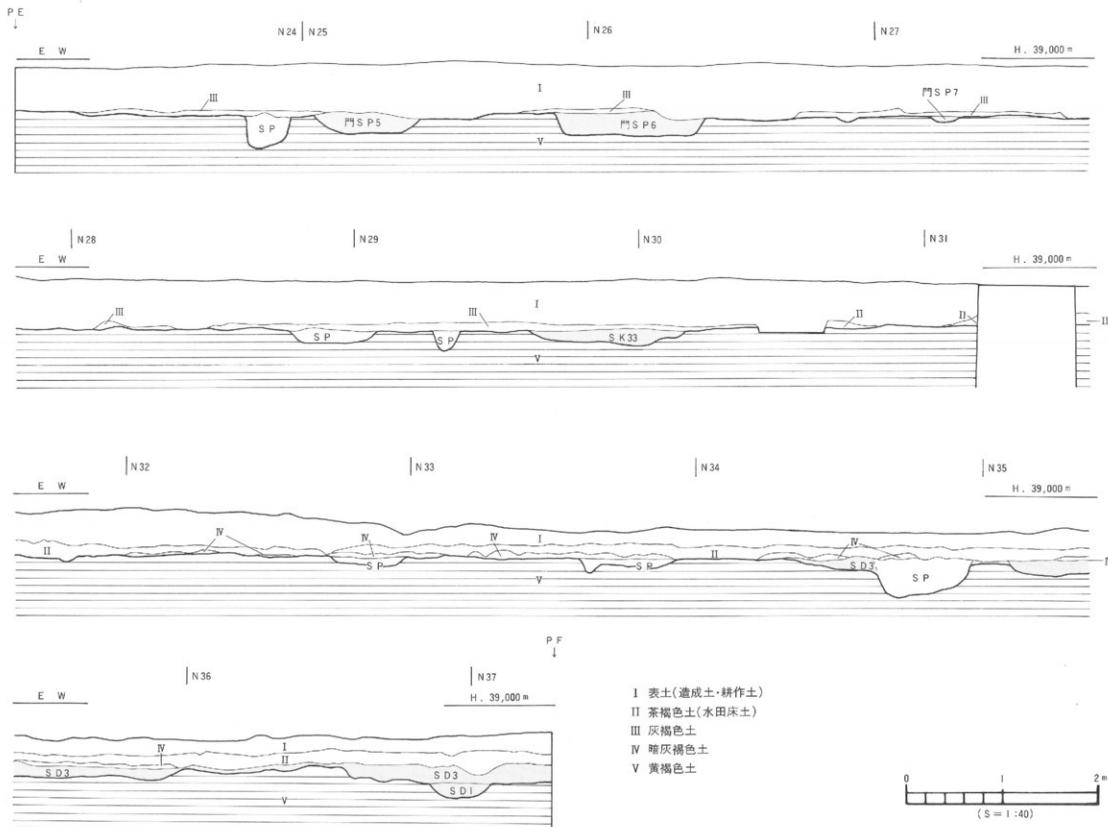
第4図 調査地測量図



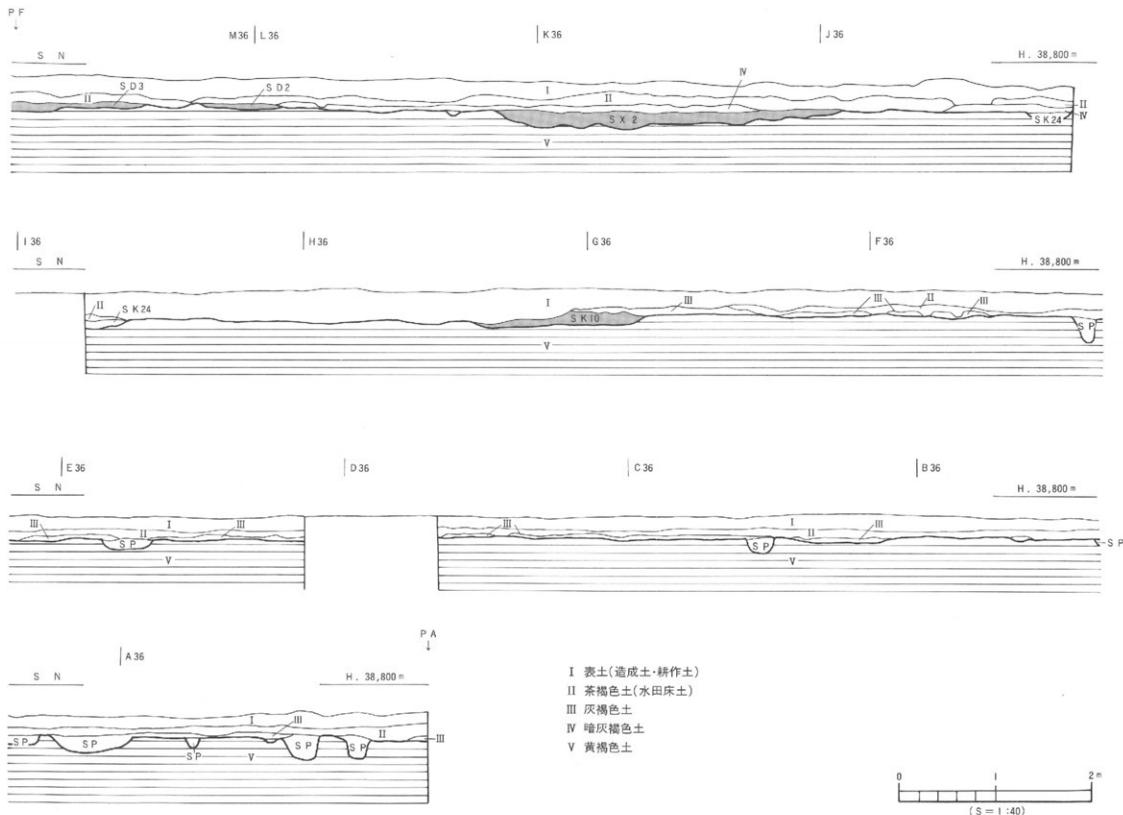
第5図 北壁土層図



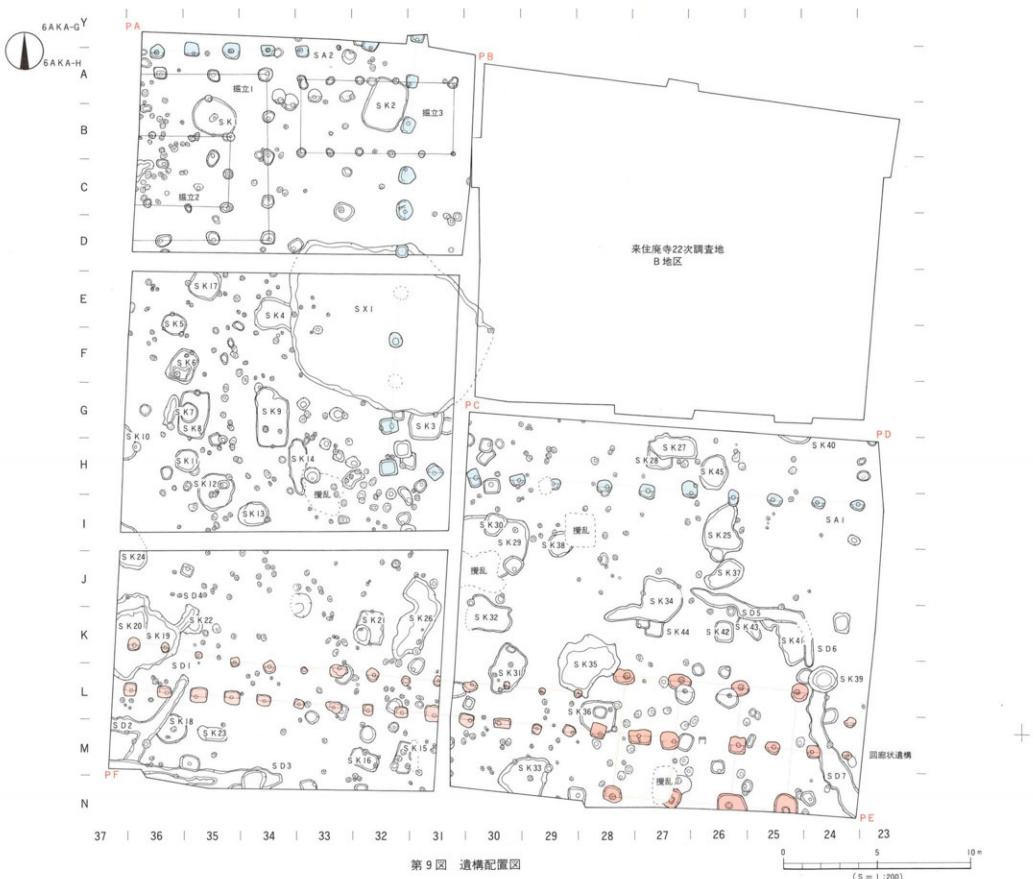
第6図 東壁土層図



第7図 南壁 土盤図



第8図 西盤土層図



3. 遺構と遺物

(1) 古代の遺構と遺物

本調査において検出された古代の遺構は、回廊状遺構、門、櫓列、掘立柱建物址、性格不明遺構他である。すべて第V層上面での検出である。

(1) 回廊状遺構・門

本調査において回廊状遺構（以下、回廊）の南面及びそれに付随する門を検出した。これまでの調査において回廊の南東コーナーは3次調査、南西コーナーは7次調査の際に確認されているが、今回これに続く13間分を検出した。

回廊（第12図、表2～5、図版3・4）

回廊は調査区南側L23～L37区に位置する。門より西側では外側柱列、内側柱列それぞれ13間分（柱穴14基）を検出し、門の東側からも回廊となる柱穴をそれぞれ1基ずつ検出している。

外側柱列は全長23.6m、内側柱列は全長約23.7mを測る。外側柱列については、各柱穴は方形～長方形プランを呈し、長さ0.56～0.96m、幅0.51～0.74m、深さは検出面下14～30cmを測る。柱底は径17～24cm、深さ14～37cmを測る。柱穴埋土は、黒褐色土を基調とし、外側柱列柱穴15基のうち6基（S P 2・3・5・7・10）は柱穴埋上下位にて黄色土が混入する。各柱穴間は最小で1.54m、最大で2.06mを測るが、1.8～1.9m前後のものが、そのうちの7割を占めている。

内側柱列については各柱穴は円形～楕円形プランを呈し、径0.32～1.0m、深さは検出面下13～24cmを測る。柱底は径16～22cm、深さ14～27cmを測る。柱穴埋土は、外側柱列と同様に黒褐色土を基調とし、8基（S P 4・7・8・10～12・14・15）は黄色土が混入する。各柱穴間は最小で1.62m、最大で1.98mを測る。

柱穴の並びについては外側柱列がほぼ一直線上になるのに対し、内側柱列は直線上からはずれるものがいくつかみられる。また外側柱列と内側柱列とを結んだ柱穴間の距離も最小で1.8m、最大で2.46mとなり幅があり一定していない。加えて、外側柱穴から内側柱列の柱穴をみた場合、直交せず内側柱列の柱穴がやや方向を東へ振っているものが多い。回廊の方向は真北より約4°東に振っている。

遺物は内側柱列の柱穴内からは、土師器、須恵器片が出土したが、ほとんどが細片である。外側柱列の柱穴内からは弥生土器・土師器、須恵器片が出土しているが、弥生土器については流れ込みによるものであろう。小片ではあるが数点掲載した（第11図）。

門（第10図、表6、図版5）

調査区南東隅L24～N28区に位置する。建物南側は一部調査区外に統く。3×2間の建物址で規模は桁行長9.12m、梁行長6.4mを測る。各柱穴は、円形もしくは方形プランを呈し、長軸0.62～1.56m、短軸0.60～1.0m、深さは検出面下11～38cmを測る。柱底径は20～42cm、深さ10～37cmを測る。

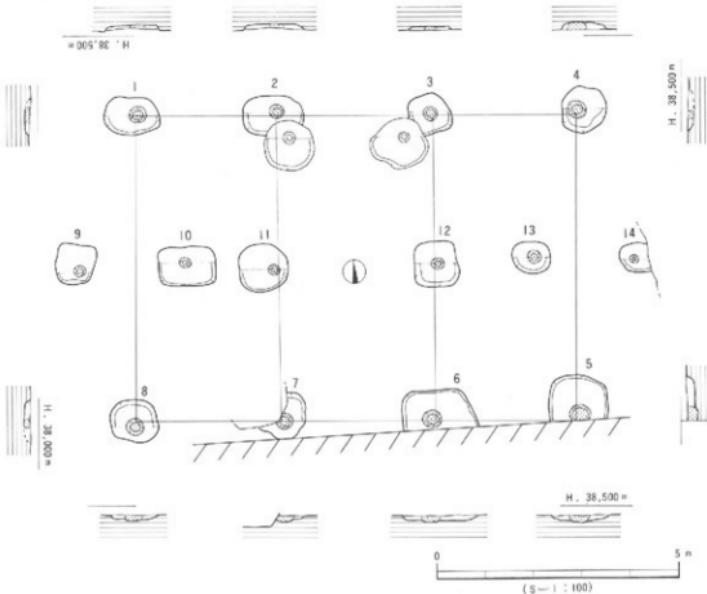
特に、門の中央部柱穴S P 10～13の4基は他の柱穴が深さ11～19cmであるのに対して深さ30～38cmとなり掘り方が深くなっている。

また、門を構成する柱穴は柱掘り方及び柱底共に、回廊を構成する柱穴に比べて一回り大きくなっていることに気づく。柱穴埋土は回廊の埋土とはわずかに異なり、暗褐色土を基調とするが、S P 2・9～11の4基は埋土下位に黄色土が混入するものである。門の方向も回廊と同様、真北より約4°東に振っている。

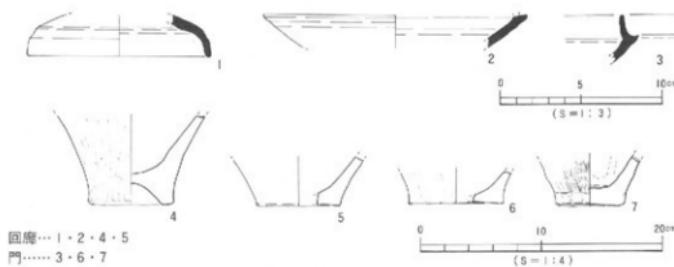
調査の概要

遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。図化しうるものを第11図に掲載した。
出土遺物（第11図、図版14）

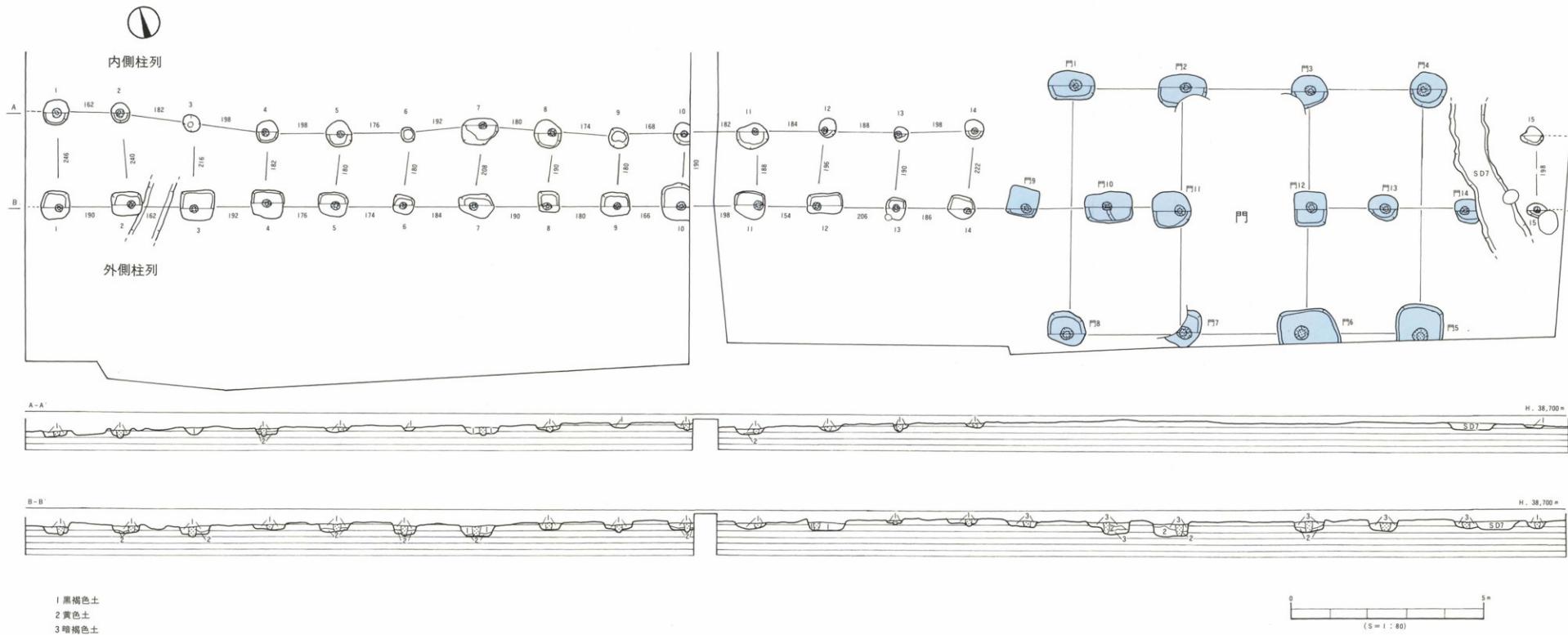
1・2・4・5は回廊出土品である。いずれも外側柱列の柱穴掘り方からの出土である。1・2・4はSP1、5はSP2出土品である。1は須恵器壺蓋である。口縁部小片でわずかに稜をもつ。2は須恵器環身。たちあがりは欠損している。4は弥生土器の蝶形土器の底部片である。上げ底を呈し、外面にヘラミガキ調整を施す。3・6・7は門出土品である。3はSP12出土の須恵器環身小片。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げている。6・7はSP2出土の弥生土器の底部である。



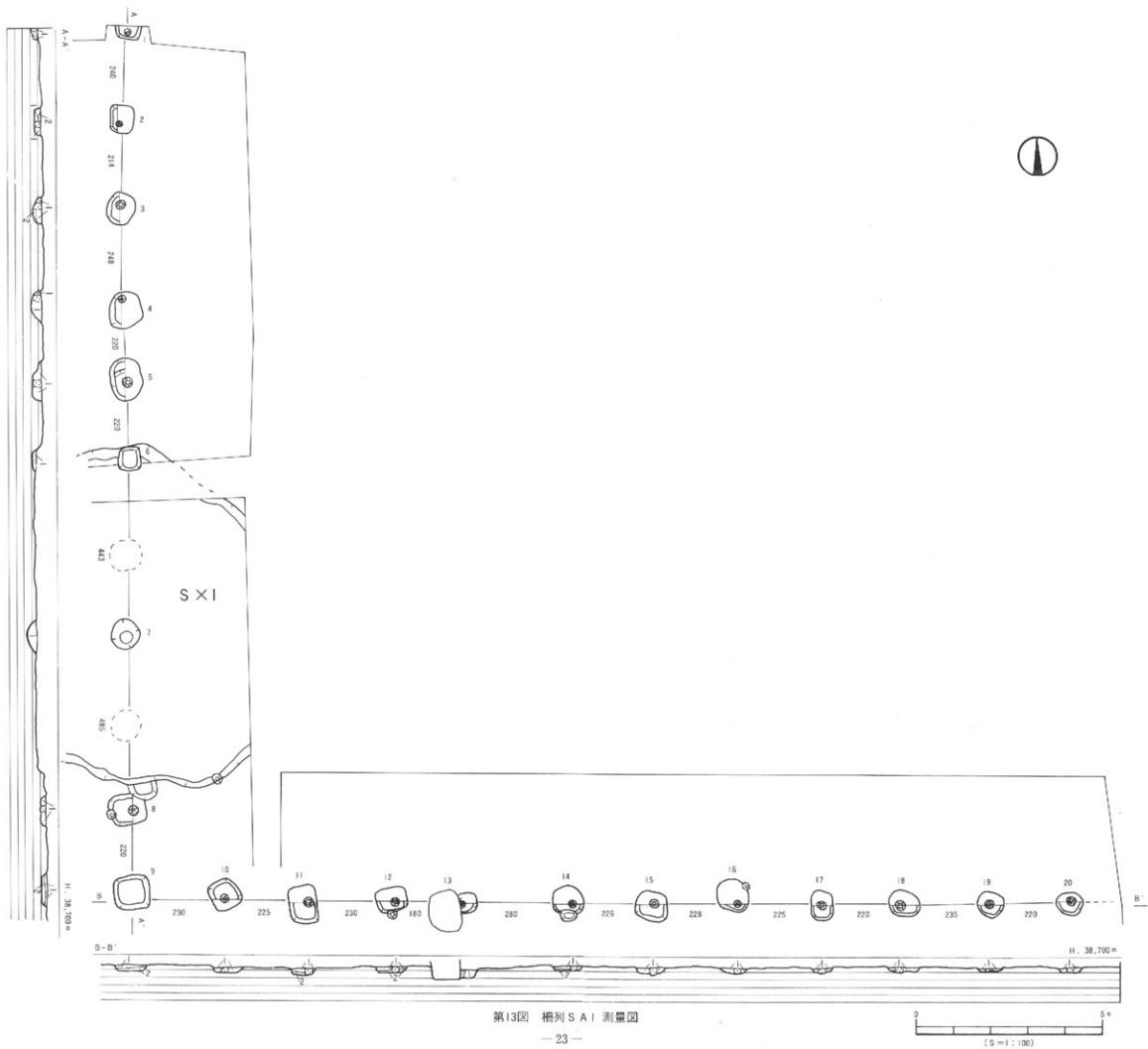
第10図 門測量図



第11図 回廊状遺構・門出土遺物実測図



第12図 回廊状遺構測量図



時期：小片ではあるが、回廊及び門を構成する柱穴内から須恵器環蓋や环身片が出土した。この種の遺物は現在、絶対年代の特定は難しいが⁶、概ね7世紀以降は下らない。回廊及び門はこれまでの調査成果と同様に来住庵寺創建以前の建物と考えられる。

(2) 棚列 (S A)

調査において棚列を2条検出した。いずれも第V層上面での検出である。

S A 1 (第13図、表7・8、図版5)

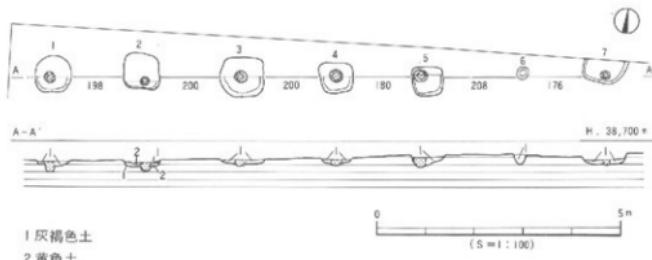
調査区北壁から東壁、6AKA-G Y31区から6AKA-H I23区にかけて検出した。調査区ほぼ中央部H32区で「L」字状に折れ曲がる棚列で、D32~G32区の間で一部、性格不明遺構S X 1と柱穴が重複する。切り合いでS A 1がS X 1に先行する。S X 1壁面及び床面にてS A 1柱穴と思われる2基の柱穴を検出している。北壁から調査区中央部まで南北10間分(推定)、調査区中央部から東壁まで東西11間分を検出した。規模は南北検出長約22.9m、東西検出長約25.0mを測る。

棚列を構成する柱穴は円形もしくは方形状プランを呈し、規模は径0.52~1.11m、深さは検出面下12~30cmを測る。柱底は径18~30cm、深さ12~25cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調とし、黄色土が斑点状及びブロック状に混入するものである。柱穴間は、最小で1.8m、最大で2.8mを測る。南北と東西の柱穴間隔を比較すると、東西は一部の箇所を除き約2.2~2.3mでほぼ等間隔に並んでいるのに對し、南北はやや間隔にはばつきがみられる。S A 1の方向は回廊状遺構とほぼ同じ方位をとり、真北より約4°東に振っている。遺物は柱穴の柱掘り方内より弥生土器・土器器・須恵器片が数点出土しているが岡化しうるものはない。

時期：柱穴内からは時期を特定しうるような遺物の出土は見られなかった。切り合いで性格不明遺構S X 1(来住庵寺創建時)に先行することなどから来住庵寺創建以前の建物であろう。

S A 2 (第14図、表9、図版6)

調査区北部6AKA-G Y32区から6AKA-H A36区に位置する。遺構西側及び北東部は調査区外に続くものと考えられる。東西6間分(柱穴7基)を検出した。遺構の全容はわからないが、本稿では棚列として報告する。規模は検出長約11.4mを測る。各柱穴は円形もしくは方形状プランを呈し、径59~91cm、深さは検出面下12~20cmを測る。柱底径は12~28cm、深さ18~24cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土を基調とするが、一部黄色土が混入する柱穴がある。柱穴間は約1.7~2.0mを測る。S A



第14図 棚列 S A 2 測量図

調査の概要

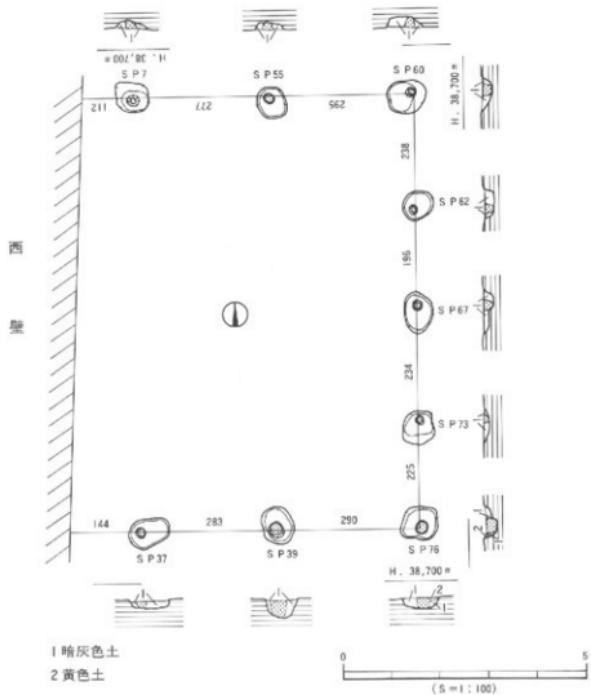
2の方向はほぼ真北に等しい方位をとる。柱穴内からは弥生土器、土師器、須恵器の細片が少量出土しているが、図化しうるものはない。

時期：第I層が柱穴を複数有する掘立柱建物址であることは明確である。柱穴埋土や遺構の方向が回廊やSA1とは異なることから、これらの遺構とは時期を隔てるものと思われる。建物の方向性から考えると掘立柱建物址（来住庵寺存続期）とほぼ同じ方位をとっている。概ね、掘立柱建物存続時期である来住庵寺存続期の遺構の可能性があると考えている。

(3) 掘立柱建物址

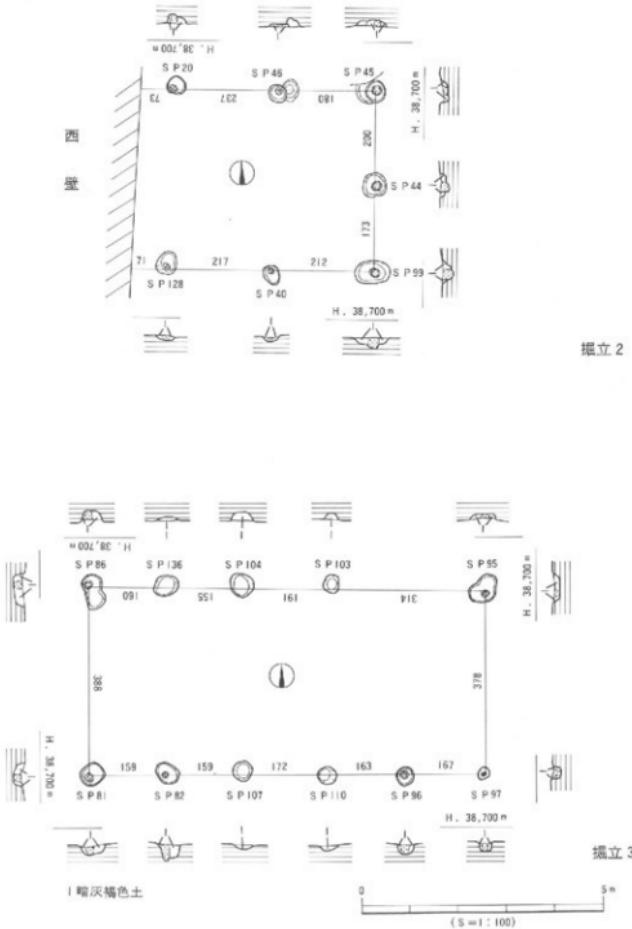
掘立I（第15図、図版6・7）

調査区北西部A34～D36区に位置する。遺物西側は調査区外に統くものと考えられる。4×2間以上の建物址ではば真北に等しい方向をとる。規模は南北8.8m、東西検出長7.3mを測る。柱穴間は東西



第15図 掘立I測量図

造構と造物



第16図 挖立2(上) 挖立3(下) 測量図

調査の概要

2.8m、南北2.2~2.3mを測る。各柱穴は円から方形を呈し、径35~70cm、深さ15~30cmを測る。柱直径は17~24cm、深さ12~39cmを測る。柱穴埋土は暗灰色土である。柱穴内からは弥生土器、土師器、須恵器片のほか柱穴床面付近にて平瓦片が2点出土している。

出土遺物（第17図、図版14・15）

土師器（8~11）

8・9は土師器壺である。8は口縁中位でわずかに段をなし器壁は薄い。9は口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。10~13は土師器皿である。10は口縁端部内面はわずかに肥厚する。11は口縁中位で屈曲するものである。

須恵器（14~16）

14・15は須恵器壺蓋である。14は天井部からなだらかなカーブを描き口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。口縁端面はわずかに面取りされる。16は須恵器環である。円盤高台が付くもので、底部の切り離しは回転ヘラ切り手法による。

瓦（17・18）

17・18はS P67、S P7壁面出土の平瓦片である。桶巻き作りにより製作されており、両者ともに凸面には細網叩きを施している。凹面には布目痕を残す。焼成は17は色調が暗灰色を呈し硬質であるのに対し、18は乳白色を呈し、やや焼きがあまいものである。

時期：柱穴壁面出土の平瓦が時期特定に有効な資料である。その特徴などから来住庵寺存続期の建物址と考えられる。

掘立2（第16図、図版6・8）

調査区北西部B35~C36区に位置する。建物西側は調査区外に続くものと考えられる。建物北東隅は上坑SK1を切っている。2×2間以上の建物址で、ほぼ真北に等しい方位をとる。規模は東西検出長5.8m、南北3.9m、柱穴間は東西2.2m、南北1.9~2.0mを測る。各柱穴は円~楕円形を呈し、規模は径30~60cm、深さ10~30cm、柱直径は13~20cm、深さ9~20cmを測る。柱穴埋土は掘立1と同様の暗灰褐色土である。柱穴内からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦片などが出土している。そのうちS P99内からは須恵器のほか柱窓内に平瓦片が敷かれた状態で出土している。

出土遺物（第18図、図版15）

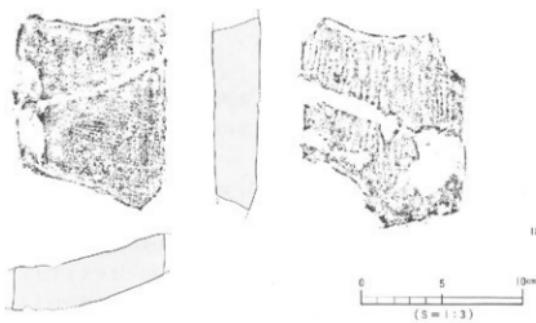
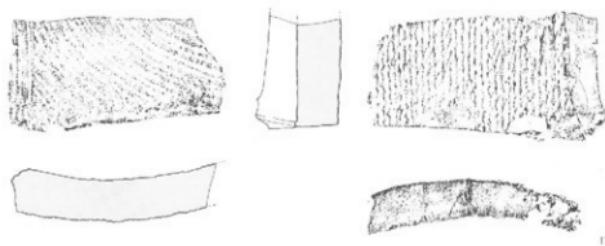
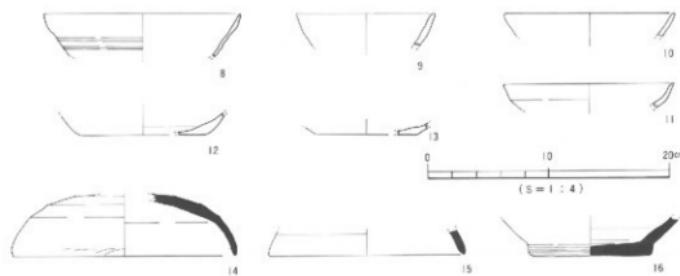
19・20は須恵器の壺である。19は口縁下位で屈曲し、口縁部は直立する。20は高环形土器の壺部。壺中位で屈曲し口縁部はやや外反する。21はS P99柱窓内出土の平瓦片である。凸面には斜格子叩きを施す。凹面には布目痕、糸切り痕を顕著に残す。色調は灰色を呈し、焼成は硬く焼かれている。

時期：S P99柱窓内出土の平瓦が時期特定に有効な資料である。その特徴から来住庵寺存続期の建物址と考えられる。

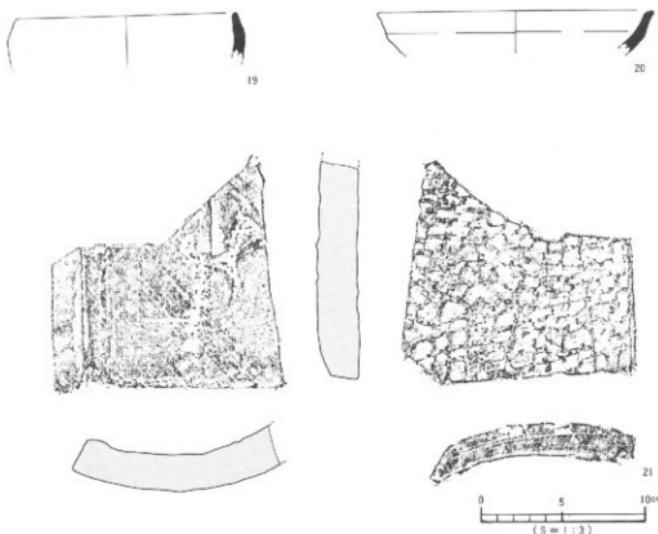
掘立3（第16図、図版6）

調査区北部A31~B33区に位置し、一部建物柱穴が上坑SK2を切っている。建物北東及び北西隅は柱穴が重複するが切り合い関係は判断しかねた。建物はほぼ真北に等しい方位をとる。5×1間の東西棟で、規模は桁行長8.3m、梁行長3.7mを測る。柱穴間は桁間2.0~2.3mを測る。各柱穴は円~楕円形を呈し、規模は径25~45cm、深さ20~30cmを測る。柱直径は10~20cm、深さ9~30cmを測る。柱穴埋土は掘立2と同様の暗灰褐色土である。柱穴内からは弥生土器、土師器小片が少量出土しているが図化しうるものはない。

遺構と遺物



第17図 振立I出土遺物実測図



第18図 挖立2出土遺物実測図

時期：出土遺物が僅少で明確な時期判断はしかねるが、柱穴埋土や方向性などを含めて掘立2と同時期の建物址の可能性が考えられる。

(4) 性格不明造構（S X）

本調査において大型で不定形な土坑状造構を1基検出した。本稿では性格不明造構S X 1として報告する。

S X 1 (第19図、図版8~10)

調査区中央北西寄りD31~G33区に位置する。造構西壁は土坑S K 4を、南壁は土坑S K 3を切っている。造構南東部は調査区外に統く。造構中央部は棚列S A 1と重複するが切り合ひよりS A 1がS X 1に先行する。

平面形は不整の方形を呈し、規模は東西検出長11.0m、南北8.8m、深さは30cm前後を測る。埋土は造構上位に灰黄褐色土が部分的に覆うが、概ね、暗褐色土である。断面形は皿状を呈する。床面は造構中央部及び南西部にて凹凸がみられることなどから複数の造構が重複している可能性もある。

造構北壁及び中央部床面にて、棚列S A 1柱穴を検出した。埋土はS X 1埋土にやや灰色が混入するものである。その他、床面にて大小8基のピットを検出したが、本造構に伴うものかは判断できなかつた。

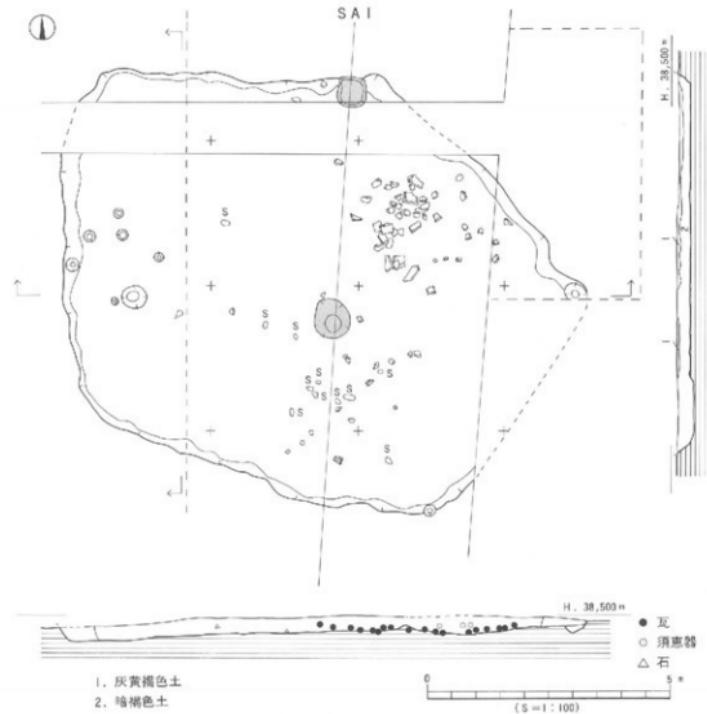
遺物は埋土中及び床面付近から、弥生土器・土師器・須恵器・瓦類などが出土している。とりわけ、瓦類は造構北東部床面付近に集中して出土している。出土状況などから一括投棄されたものと考えら

れる。

出土遺物（第20～25図、図版16～21）

瓦（22～33）

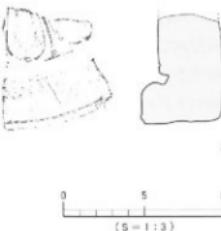
22は軒丸瓦片である。残存状況から推測すると10弁もしくは11弁の単弁（素弁）蓮華文軒丸瓦であろう。瓦当外縁に圓線を1重めぐらす。焼成はやや焼きのやまい淡黄褐色を呈する。23・24は重弧文（3重弧か）軒平瓦である。瓦当の施文はヘラ状工具によるヨコナデを施した簡単なものである。両者ともに粘土板桶巻き作りで製作されている。凹凸面に糸切り痕を残し、凸面側には叩きを施した痕跡はなく横方向にナデイタで平滑にされている。23の凹面内側の左右には分割界線（棒痕跡）が残る。左右ともに瓦当面から約8cmの所で止まっている。瓦の大きさを復元すると、桶巻きの4等分の大きさに相当する。25～28は平瓦である。凸面は25・26が斜格子叩き、27は格子叩きを施す。28は叩き目をナデ消している。凹面側にはいずれも布目痕、糸切り痕を残す。焼成は27は灰色を呈し良好であるが、それ以外は焼きのややまい淡灰～淡黄褐色を呈する。29・30は隅木蓋瓦である。平瓦を転用し



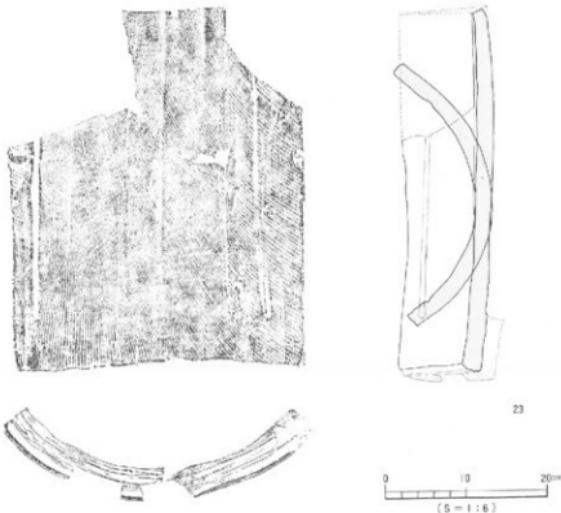
第19図 S × I 測量図

調査の概要

た平蓋式のもので、平瓦の狹端部を両面から打ち缺いて製作されている。釘穴は穿たれていない。凸面側は29が格子叩き、30は斜格子叩きを施す。凹面側には布目痕、糸切り痕を施す。31・32は行基式の丸瓦である。凹面側には強い糸切り痕が存在するが、凸面側には叩きの痕跡は見られない。33は熨斗瓦である。凸面に斜格子叩きを施すもので、桶巻き作りで製作した平瓦を半截したものである。

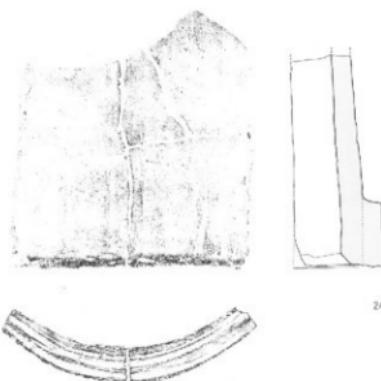


22

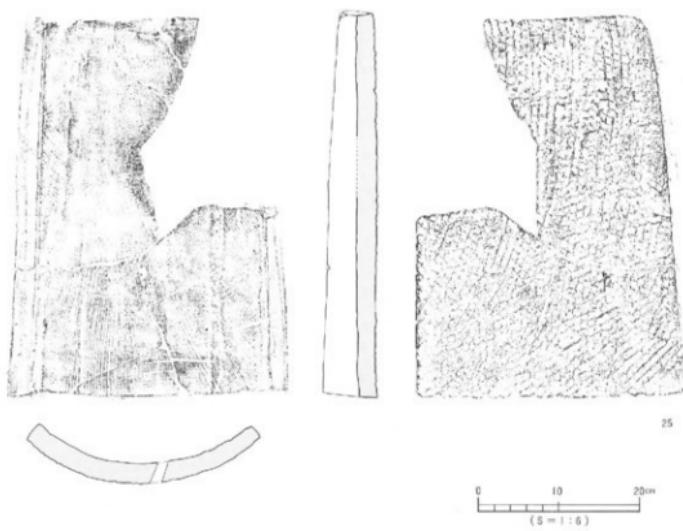


23

第20図 S×I出土遺物実測図（1）



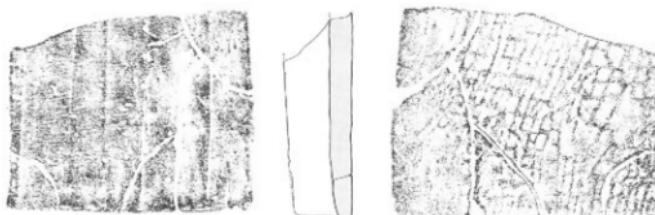
24



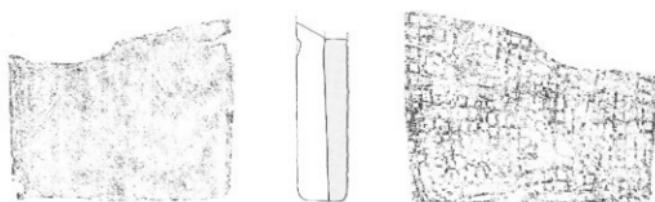
25

第21図 S × I 出土遺物実測図（2）

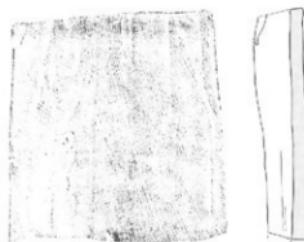
調査の概要



26



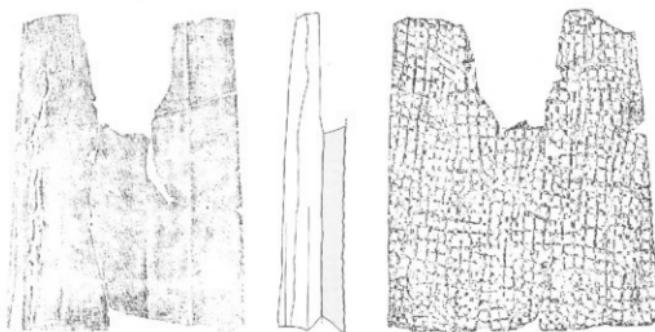
27



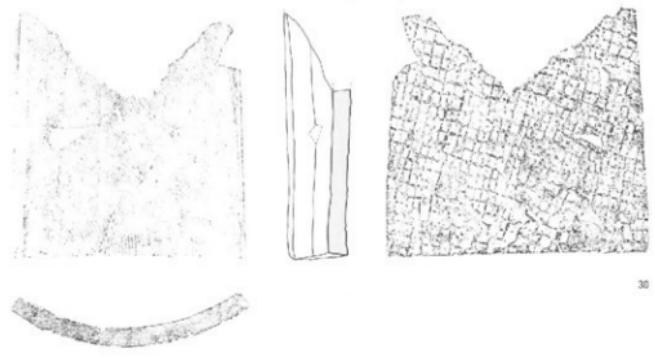
28



第22図 S × I 出土遺物実測図 (3)



29

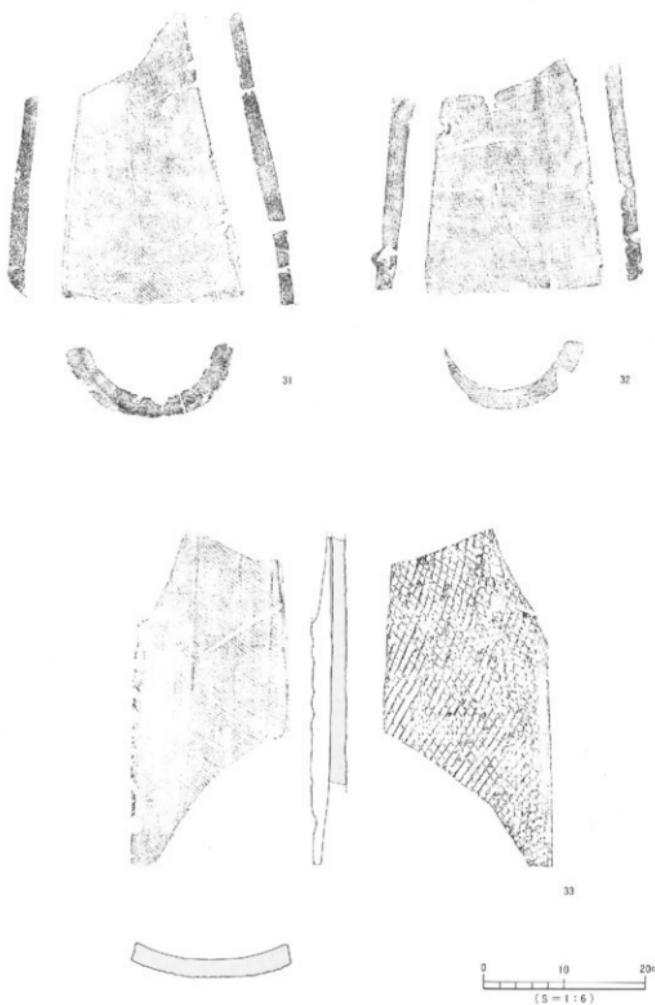


30



第23図 S×I 出土遺物実測図 (4)

調査の概要



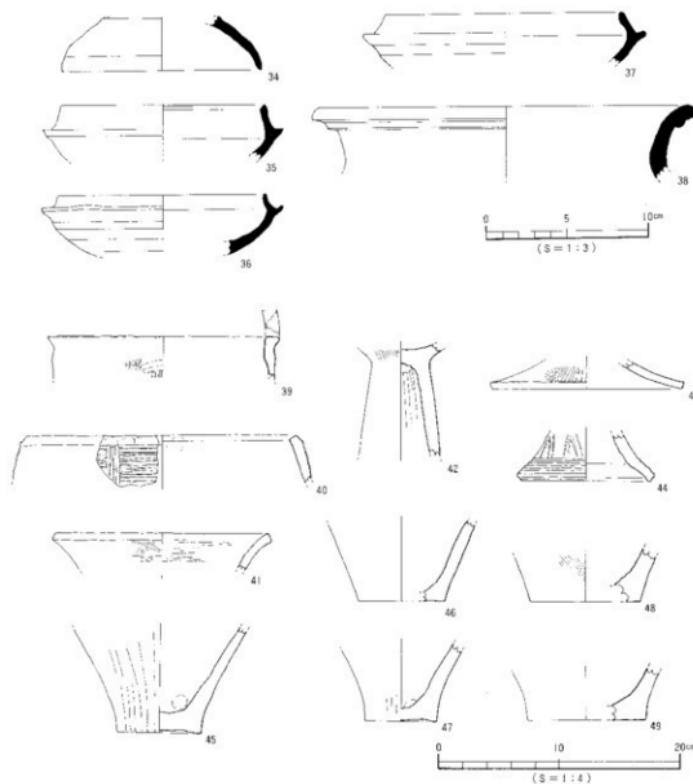
第24図 S × I 出土遺物実測図 (5)

須恵器 (34~38)

34は須恵器坏蓋、35~37は坏身である。34は大井部と口縁部の境は消失する。35はたちあがりが比較的高く端部は内傾する。36・37はたちあがりは低く内傾し、端部は丸く仕上げるものである。38は蓋の口縁部片である。外反する口縁部で口縁下に丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付けする。いずれも小片であり、埋土中位出土品である。

弦生土器 (39~49)

39は変形土器の口頭部片。貼り付けによる口縁部成形で口縁上面に2条1対の山形文を施す。40・41は壺形土器の口縁部片である。40は複合口縁壺で口縁部外面に2本1対の櫛描き沈線文を横方面に



第25図 S×I 出土遺物実測図 (6)

4条、縱方向に2条施す。口縁端面は面取りされる。42~44は高環形土器の脚部片。42は柱部内面にしばり痕を顕著に残す。坏底部は組み合わせ技法によるものである。43・44は脚部片。43の外面には細かなミガキ調整を施す。44は脚部に3条、脚端部面に1条の凹線文を施す。柄部上部には二等辺三角形状の沈線文を2条施す。搬入品であろう。45~48は壺形土器、49は壺形土器の底部である。

いずれもが小片であり埋土上位からの出土であるため、これら弥生土器は流れ込みの可能性が高い。

時期：遺物の出土状況などから、床面付近出土の瓦類が時期特定に有効な資料である。これら瓦類は来住庵寺創建当初に使用されたものと考えられることから、本造構も来住庵寺創建当初、7世紀末頃の造構と考えられる。

(5) 溝

本調査において、回廊を取り囲む区画溝と思われる溝の一部（SD 3）と、古代の造構と切り合う溝3条（SD 1・2・7）が検出された（第9図、図版10）。

溝SD 3は調査区南西隅M34~N36区に検出されたもので、溝端部は消失している。埋土は灰褐色土である。回廊外側柱穴からSD 3までは約4mの幅の空間が存在する。SD 3底面にて溝状になる凹みを検出したが、造構埋土が類似することから、SD 3に関連するものと判断した。位置的に判断すると、回廊の南東及び南西コーナーで確認された区画溝の延長線上にあたることなどから、回廊を取り囲む区画溝であろうと考えられる。溝内からは遺物の出土はない。

溝SD 1は、回廊に切られ、土坑SK18（弥生時代）を切り、SD 2と重複する（切り合い不明）。SD 1南側はSD 3に切られている。断面形はⅢ状を呈し、埋土は暗灰色土である。溝底はわずかに北から南へ緩傾斜をなす（比高差約5cm）。溝内からは弥生上器・土師器小片が数点出土しているが圓化しうるものはない。造構の時期は切り合いより上限を弥生時代前中期～中期初頭、下限を古代と考えられる。

SD 1と同様SD 2についても、埋土が類似することなどから同時期の造構と考えられる。SD 7は北端を土坑SK39に切られ、南側は調査区外に続く。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色土である。溝底は北から南へ緩傾斜をなす（比高差約7cm）。溝内からは土師器片が少量出土している。切り合いより上限を古代、下限は不明である。各溝の規模等は一覧表に記す（表12）。

(6) 土坑

本調査において、古代の造構と切り合う土坑が7基検出された。出土遺物も僅少で明確な時期比定は難しいが、概ね古代以前の造構として報告する。

まず、回廊に切られているものは、土坑SK31・35・36の3基である。造構埋土はいずれも暗褐色土である。柵列SA 1には土坑SK25が切られている。不定形の土坑で造構埋土は暗灰色～暗灰褐色土である。いずれの造構からも遺物の出土はない。

掘立柱建物址では土坑SK 1が掘立2に切られている。円形の土坑で、遺物は弥生上器・土師器小片が数点出土している。造構埋土は暗褐色土である。また、性格不明造構SX 1には、土坑SK 3・4がそれぞれ切られている。方形の土坑で埋土はそれぞれ暗灰褐色土、黒褐色土である。遺物の出土はない。他に直接的ではないが、回廊を切る溝SD 7を切って土坑SK39が検出された。円形の土坑で二段掘り構造になっている。埋土は暗灰褐色土である。遺物の出土はない。下限は定かではないが上限を古代と考える。

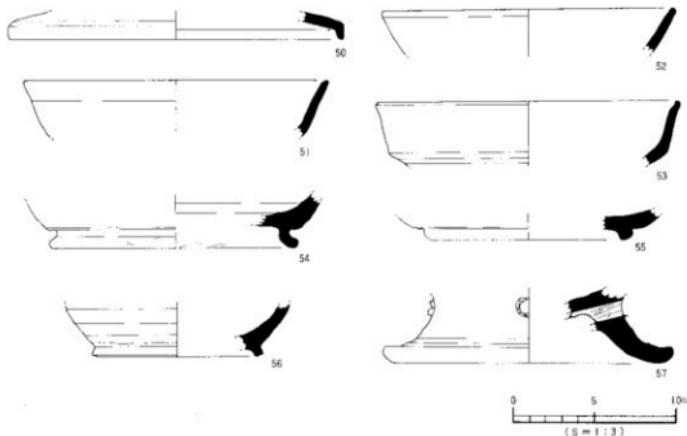
各土坑の規模等は一覧表に記す（表11）。

(7) その他の遺構と遺物

本調査において包含層である第III層、第IV層中から弥生時代、古墳時代、古代に比定される遺物が出土した。ただし、発掘調査時は両土層の区別が判断しがたく、同時に振り下げたため、一括して包含層出土遺物として遺物の取り上げを行った。ここでは、古代に比定される遺物を抽出し、第26図に掲載した。

包含層出土遺物（第26図）

50は須恵器环蓋である。口縁部は下内方へ屈曲し、端部は丸く仕上げる。小片。51～56は須恵器環である。51～53は高台の有無不明である。口縁部はいずれもやや外反し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。53は口縁下位にて稜をなして屈曲する。54～56は高台付の環である。高台は底部端部付近に付き、54は外方に湾曲している。55・56は短い高台が付くものである。57は壺の脚部片と思われる。脚部上位に径0.9cm大の円孔を3ヶ所に穿つ。



第26図 包含層(古代)出土遺物実測図

〔2〕 古墳時代の遺構と遺物

本調査において検出された古墳時代の遺構は上坑2基他である。第V層上面での検出である。

(1) 土 坑

SK19（第27図、図版11）

調査区南西隅J36～L37区に位置する。遺構西半部は調査区外に続く。遺構東北部は溝SD4と重複するが明確な切り合ひ関係は判断できなかった。また、遺構中央部は回廊の内列の柱穴によって切られている。

調査の概要

平面形は不整の方形状プランを呈し、規模は南北1.81m、東西1.74m、深さ15cm前後を測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗灰色土である。床面はわずかに北から南に向けて傾斜をなす。遺構北部床面にて浅い凹みを検出した(S K20)。S K20南半部は消失している。埋土はS K19と同様の暗灰色土であるが、S K19に伴うものは判断しない。S K20内からは遺物の出土はない。

遺物は遺構中央部付近の埋土中及び床面付近にまとまって出土している。埋土上位より弥生土器、土師器のほか、口縁部を欠損した須恵器甌(60)が出土し、床面からは須恵器环身(58)などが出土している。



第27図 SK19測量図

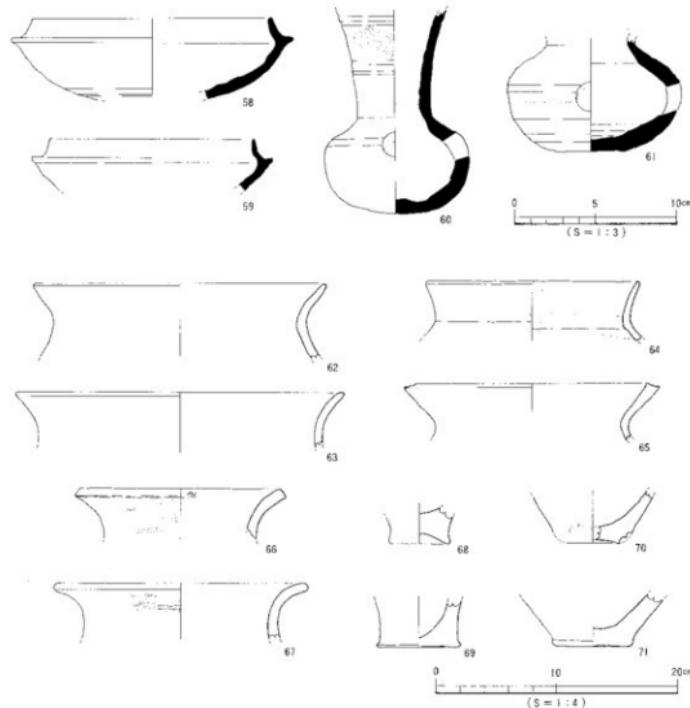
出土遺物（第28図、図版21）

58・59は須恵器环身である。58は床面出土品である。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。60・61は須恵器甌である。60は埋土上位出土品で、口縁部を欠損している。頭部に2条の沈線を上下に施す。62～65は土師器の夔形土器である。62は口縁部はわずかに内湾するものである。65は口縁部を上方につまみ上げ、口縁端面はわずかに凹む。66・67は弥生土器の壺形土器である。口縁端部を「コ」字状に仕上げる。68・69は夔形土器、70・71は壺形土器の底部である。

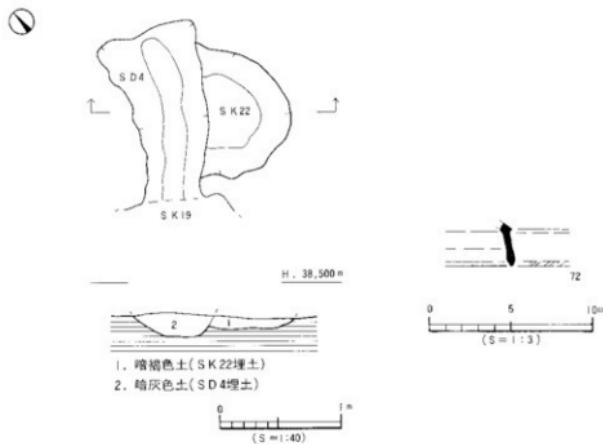
時期：出土した遺物は時期差が見られるが、床面出土の須恵器环身が時期特定に有効な資料である。その特徴より古墳時代後期、6世紀後半頃に比定されるものであろう。よって本土坑の時期も6世紀後半と考えられる。

S K 22（第29図）

調査区南西部K35区に位置する。遺構西半部はSK19と重複する溝SD4（古墳後期）に切られている。平面形は円形を呈するものと考えられ、規模は径1.2m、深さ12cm前後を測る。断面形は皿状を



第28図 SK19出土遺物実測図



第29図 SK 22測量図・出土遺物実測図

呈し、埋土は暗褐色土である。床面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中にて弥生土器・土師器・須恵器小片が数点出土している。図化しうるものを1点抽出した。

出土遺物（第29図、図版21）

72は須恵器壺蓋である。小片のため明確な口径はわからない。形態は断面三角形のシャープな稜をもち、口縁端部は内傾する。口縁端外面は面取りがなされ、工具は不明だが刻み目を施している。

時期：出土遺物が僅少であるため明確な時期判断はしかねる。切り合い関係などから、下限を古墳時代後期後半に求められる。

(2) 溝

SD 4（第29図、図版10）

調査区南西部J 35～K 36区に位置する。造構南側は土坑SK 19と重複し、東側はSK 22を切っている。短く不定形の溝で、規模は検出長1.46m、幅0.84m、深さは10～13cmを測る。わずかに溝底は北から南に向けて緩傾斜をなす（比高差3cm）。断面形はレンズ状を呈し、埋土は暗灰色土である。

溝内からの遺物の出土は見られなかった。

時期：遺物の出土ではなく時期特定は難しいが、土坑SK 19と重複することなどから、概ね、古墳時代後期後半の造構と考えられる。

[3] 弥生時代の造構と遺物

本調査において検出された弥生時代の造構は土坑9基である。すべて第V層上面での検出である。

(1) 土坑

SK 2 (第30図、図版12・13)

調査区北部A32～B32に位置する。北壁中央部は掘立1柱穴に切られている。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.98m、短軸2.02m、深さは約34cmを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。床面はほぼ平坦である。南壁中央部床面にて径15cm前後の小ピットを検出した。埋土が土坑埋土と同様であることから、本土坑に伴うものと思われる。遺物は埋土中より弥生土器の菱形土器・壺形土器などの口縁部片や底部片などが出土している。

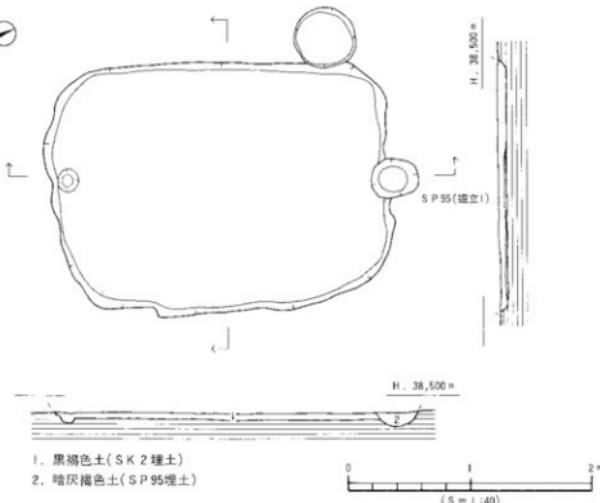
出土遺物 (第31図、図版22)

73・74は菱形土器である。73・74共に口縁部を貼り付けする。73は口縁部端面にヘラ状工具による刻み目を施す。胴部の張りは強く、胴上位にヘラ描き沈線文を7条施す。胴中位外面にはヘラミガキ調整を施す。75は壺形土器。頭部は直立し、口縁部は外反する。頭部外面にヘラ描き沈線文を3条施す。76は菱形土器の底部。わずかに上げ底を呈する。

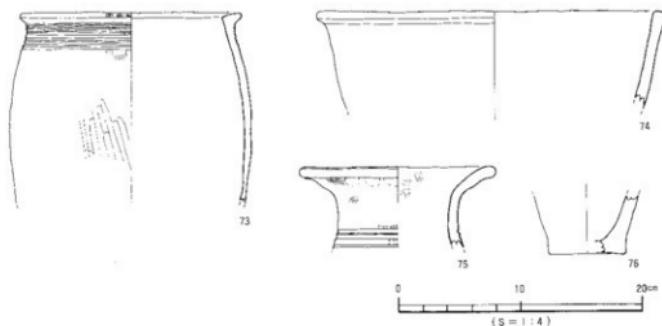
時期：出土遺物の特徴から本土坑の時期は弥生時代前期末から中期初頭と考える。

SK 6 (第32図)

調査区西北部F35・36区に位置する。平面形は不整の長方形を呈し、規模は長軸1.87m、短軸1.41m、深さは50cm前後を測る。埋土は黒褐色土を基調とし、床面付近には一部黄褐色土が混入する層が厚さ10cm程度みられた。断面形は逆台形状を呈する。床面は北から南に向けて緩傾斜をなす(比高差約5cm)。造構床面にて大小4基のピットを検出した。造構南側床面では不整形のピット及び、径50cm前



第30図 SK 2 測量図



第31図 SK 2出土物実測図

後のピットを検出した。両者ともに埋土は茶褐色土である。その他、造構北側床面及び壁体に径15cm前後的小ピットを検出した。埋土は黒褐色土に黄褐色土が混入するものである。造構裏上から考えると、北側検出の小ピットは本土坑に伴う可能性がある。

遺物は埋土中から弥生土器片が数点出土している。図化しうるもの2点掲載した。

出土遺物（第33図、図版22）

77は甕形上器。断面三角形の口縁部を貼り付ける。口縁端面にヘラ描き沈線文と刺突文を施す。胴部外面に6~8条のヘラ描き沈線文と刺突文を施す。78は壺形上器の頸部。長頸で上方に開く口頸部をもつものである。頸部下位に断面三角形状の凸帯を貼り付け、凸帯上に割み目を施す。口頸部内面に凸帯を貼り付けす。

時期：出土した弥生土器の特徴などから本土坑の時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

S K 8（第32図）

調査区北西部G35・36区に位置する。造構中央部はSK 7に切られ、北壁及び南壁中央部はピットに切られている。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.53m、短軸1.53m、深さ約14cmを測る。埋土は暗褐色土である。断面形は浅い逆台形状を呈する。床面はほぼ平坦であるが、造構南側では床面がわずかに高くなっている。床面にて小ピットを1基検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

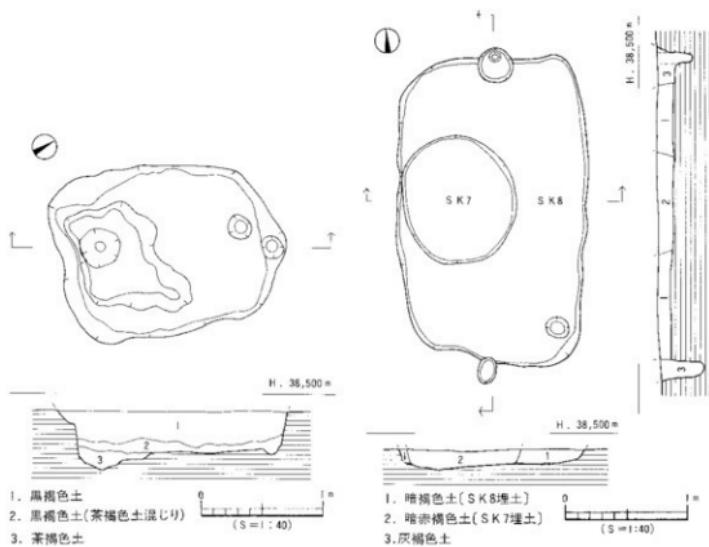
遺物は埋土下位にて弥生土器片が数点出土している。

出土遺物（第33図、図版23）

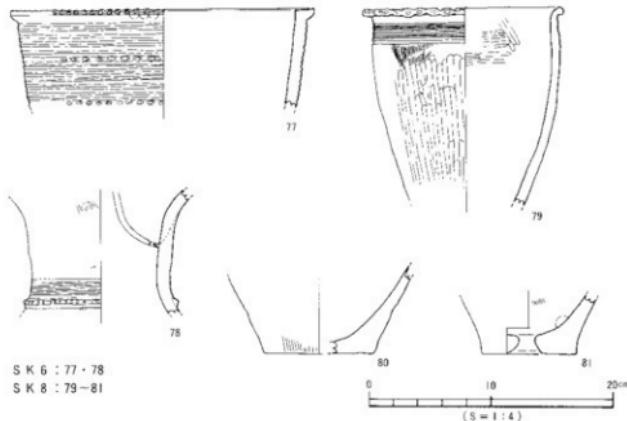
79は甕形上器。口縁部は折り曲げにより形成する。口縁端面に割み目を施す。胴部は張りをもち、ヘラ描き沈線文を6条施す。胴部外面はタテ方向、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。80は壺形土器の底部。平底。81は所謂「コシキ」用の土器の底部である。壺形土器からの転用品である。径0.7~1cm大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。

時期：出土した弥生土器の特徴などから本土坑の時期を弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

遺構と遺物



第32図 SK6(左) SK7・SK8(右)測量図



第33図 SK6・SK8 出土遺物実測図

調査の概要

S K I O (第34図)

調査区西壁中央部G36・H36区に位置する。造構西半部は調査区外に続きた南東部はピットに切られている。平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は南北検出長1.90m、東西検出長0.68m、深さ約13cmを測る。埋土は暗褐色土である。断面形はレンズ状を呈する。

遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土した。

出土遺物 (第36図、図版23)

82は菱形土器。断面三角形状の短く丸い口縁部を貼り付けする。胴部最大径が口縁屈曲部にあり、長胴傾向を示す。胴部外面にタテ方向へのヘラミガキ調整を施す。83は壺形土器の口頸部片。口縁端面にヨコ沈線文を施し、その後、口縁上端部と下端部に刻み目を施す。口縁端部内面には2列に刻み突文を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴から本土坑の時期は弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

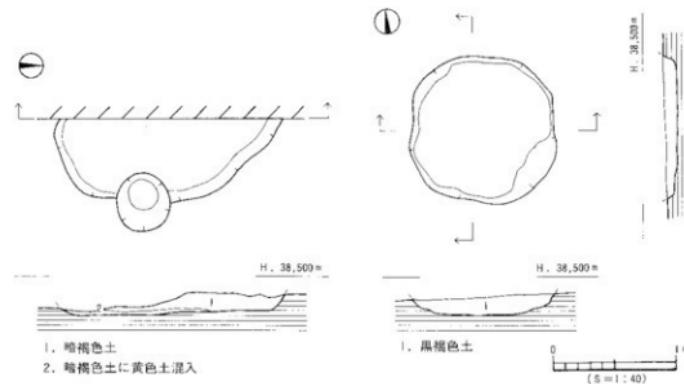
S K I I (第34図)

調査区西寄りH35・36区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径1.18～1.21m、深さ約14cmを測る。埋土は黒褐色土である。断面形はレンズ状を呈する。遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土している。図化しうるもの2点掲載した。

出土遺物 (第36図、図版23)

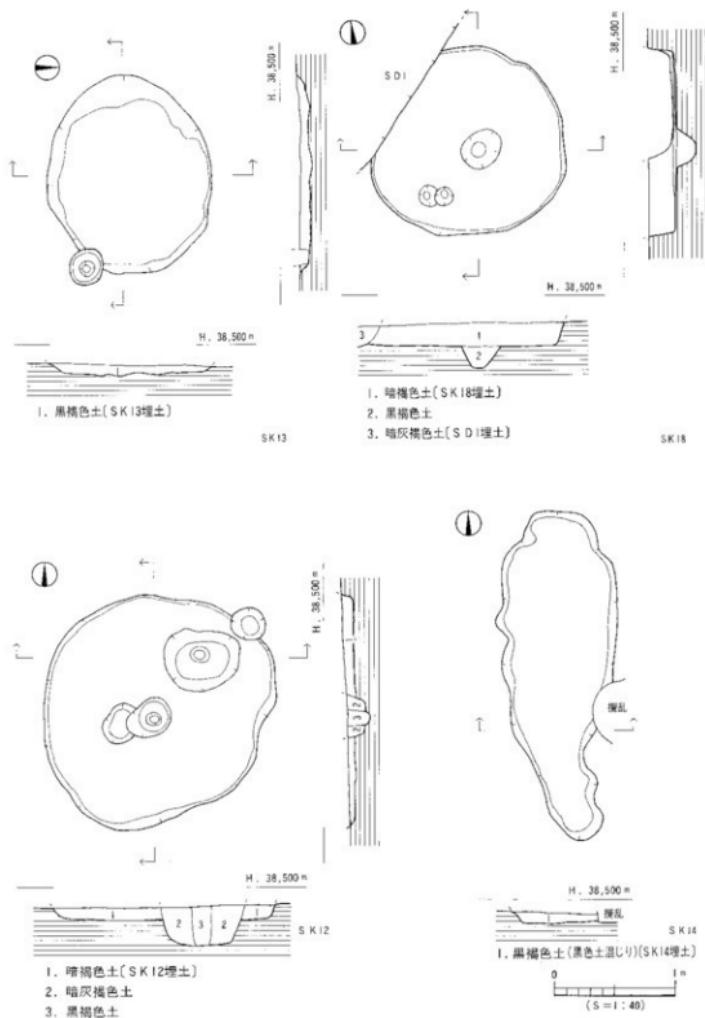
84は菱形土器の口縁部小片。折り曲げにより口縁部を形成する。口縁端面に刻み目を施す。胴部の張りはみられ、胴上位にヘラ描き沈線文を4条以上施す。85は壺形土器の口縁部。口縁端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物が僅少であり時期の特定は難しいが、概ね、本土坑の時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。



第34図 SKIO[左] SKII[右]測量図

遺構と遺物



第35図 SK 12-14 · 18測量図

調査の概要

SK I2 (第35図)

調査区西寄りH35・I35区に位置する。遺構北東部及び中央部はピットに切られている。平面形は円形を呈し、径1.89-1.94m、深さ10cm前後を測る。埋土は暗褐色土である。断面形は黒状を呈する。床面は比較的平坦である。

遺物は埋土中にて弥生土器片が少量出土している。図化しうるもの2点掲載した。

出土遺物 (第36図)

86は圓形土器の口縁部片。短く丸味のある口縁部を貼り付ける。口縁端面に刻み目を施す。87は圓形土器の底部。わずかに上げ底を呈する。外面にタテ方向、内面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：遺物が小片でかつ僅少であるため時期特定は難しいが、概ね本土坑の時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

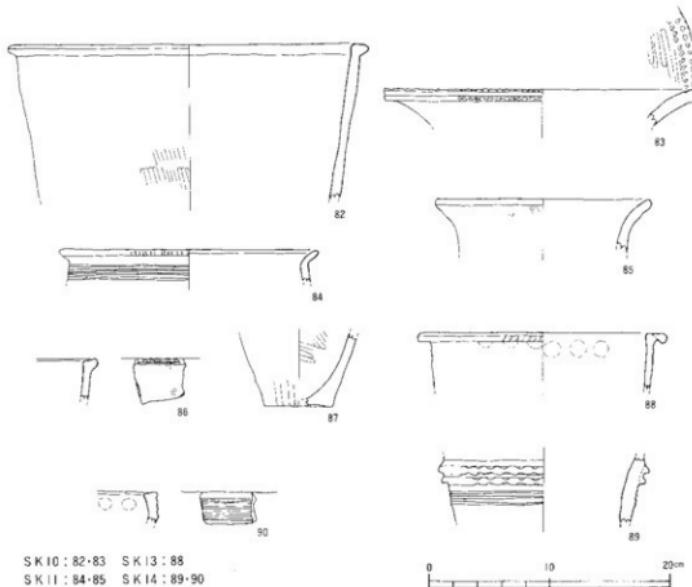
SK I3 (第35図)

調査区西寄りI34区に位置する。遺構東側は小ピットに切られている。平面形は梢円形を呈し、規模は長径1.60m、短径1.34m、深さ10cm前後を測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土である。床面は凹凸が激しく、わずかに北から南に向けて緩傾斜をなす。

遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土している。図化しうるもの1点掲載した。

出土遺物 (第36図、図版23)

88は圓形土器の口縁部。断面方形状の口縁部を貼り付けする。口縁端面に刻み目を施す。



SK I0 : 82-83 SK I3 : 88
SK II : 84-85 SK I4 : 89-90
SK I2 : 86-87

第36図 SK 10-14出土遺物実測図

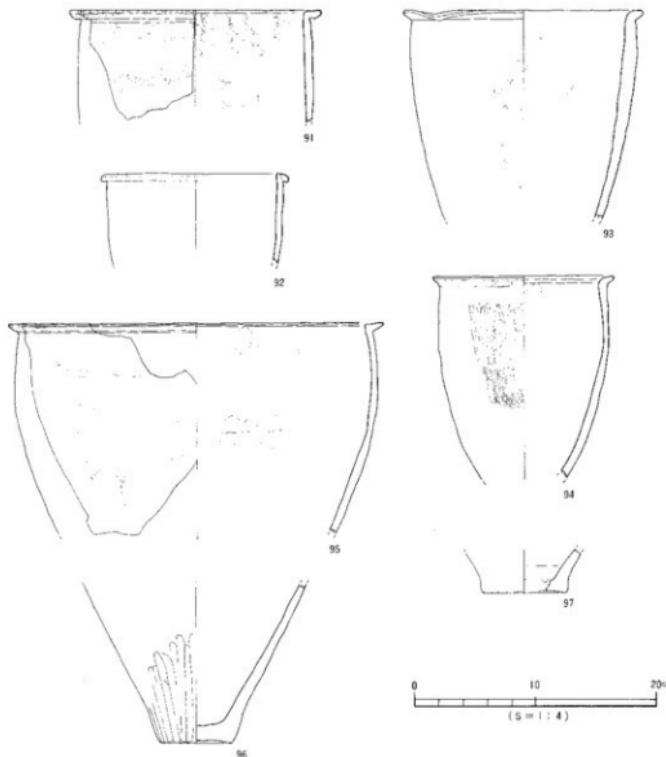
時期：出土した遺物がわずかであり時期特定は難しいが、概ね、弥生時代前期末以降の遺構と考えられる。

SK 14（第35図）

調査区西寄りH33・34区に位置する。東壁中央部は擾乱により削平されている。平面形は不整の梢円形を呈し、規模は長軸2.73m、短軸1.02m、深さ8cm前後を測る。埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。断面形は浅い皿状を呈する。床面は北から南に向けてわずかに傾斜をもつ。遺物は埋土中にて赤土器片が数点出土している。図化しうるものを2点掲載した。

出土遺物（第36図、図版23）

89は壺形土器の頸部片。断面三角形状の凸帯を2条貼り付け、凸带上に押圧痕を残す。凸帶下にへ



第37図 SK 18出土遺物実測図

調査の概要

う描きの沈線文を3条施す。90は円線文期の高环の坏部片。口縁端面はナデにより、わずかに凹む。3条の凹線文を施す。

時期：出土した遺物が数点であり、それぞれにわずかに時期差をもつが、概ね弥生時代前半期以降の遺構であろうと考える。

S K 18 (第35図、図版13)

調査区南西部L36～M36区に位置する。遺構西半部は講S D 1に切られている。平面形は円形を呈し、規模は径1.56～1.60m、深さ約20cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土である。床面はほぼ平坦である。床面にて大小3基のピットを検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

遺物は遺構中央部床面にて菱形土器などが横たわった状態で多数出土している。遺物の出土状況などから貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物 (第37図、図版24)

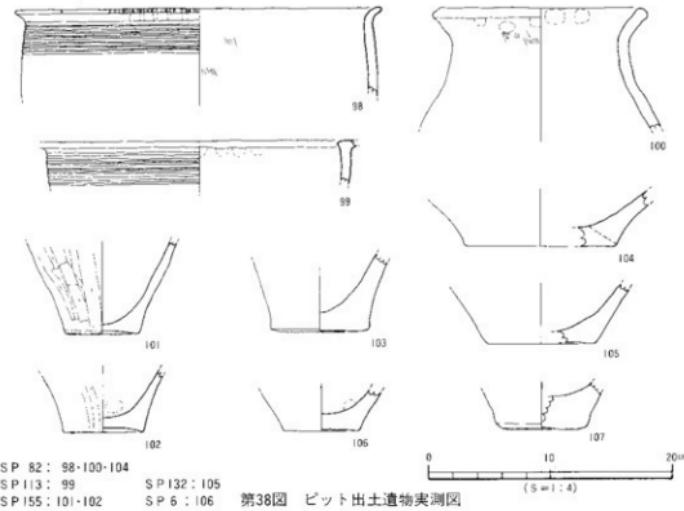
91・92・95は貼り付け、93・94は折り曲げにより口縁部を形成する菱形土器である。91のみ口縁端面に刻み目を施す。92は丸味のある断面方形の粘土紐を貼り付けする。93は器形にヒズミがみられるものである。93・94共に胴部外面に施文を施さない。95は胴部の張りが強く、口縁部が比較的長いものである。96・97は菱形土器の底部。96はわずかに上げ底を呈し、外面にヘラミガキ調整を施す。

時期：出土した遺物は出土状況などから一括りの高いものと考えられる。遺物の特徴などから本土坑の時期は弥生時代中期前半頃と考える。

(2) その他の遺構と遺物

本調査においてピット内及び包含層中から弥生時代の遺物が出土している。

I) ピット出土遺物 (第38図、図版25)

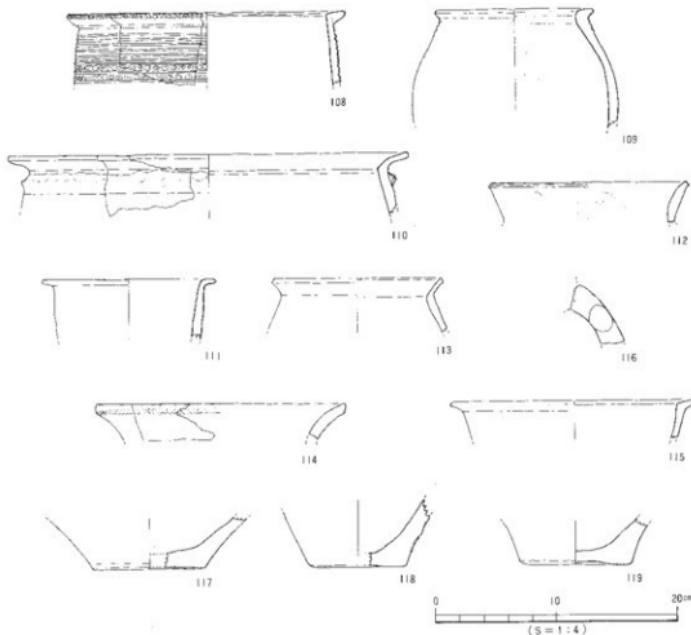


98・100・104はS P 82、99はS P 113、101、102はS P 155、103はS P 16、105はS P 132、106はS P 6、107はS P 206出土の弥生土器である。

98・99は菱形土器の口縁部片である。98は折り曲げにより口縁部を形成するもので、口縁端面に刻み目を施す。胴部に櫛描き沈線文を8条施す。99は貼り付けにより口縁部を形成するもので胴部に櫛描き沈線文を7条以上施す。100は壺形土器。内傾する頸部をもつものである。101～103は菱形土器の底部。平底ないしわずかに上げ底の底部となるものである。104～107は壺形土器の底部。大きくやや厚い平底のものがほとんどである。

2) 包含層出土遺物 (第39図、図版25)

108～113は菱形土器の口縁部である。108は貼り付けによる比較的長い口縁部をもつもので口縁端面に刻み目を施す。胴部外面にヘラ描き沈線文8条と刺突文を施す。109は折り曲げによる短い口縁部をもつもので、胴部の張りは強い。胴上位にヘラ描き沈線文を4条施す。弥生前期末～中期初頭。110は逆「L」字状口縁を呈するもので、口縁下に指頭押圧による凸筋文を貼り付けする。中期中葉。111は折り曲げ口縁をもつものである。中期前半。112・113は外反する口縁部をもつものである。後期初頭。114は壺形土器。口縁下端部に刻み目を施す。前期末～中期初頭。115は鉢形土器。外反する口縁部を



第39図 包含層(弥生時代)出土遺物実測図

もつものである。116はジヨッキ形上器の把手である。117~119は壺形土器の底部。平底ないし、わずかに上げ底の底部となるものである。

[4] 時期不明の遺構と遺物

本調査において時期比定の困難な遺構・遺物がある。遺構は切り合いや、出土遺物がなく、掘り方も不明なものや様々な時期の遺物を含むものなどである。また、遺物は包含層中より石器が3点出土しているが時期特定が難しいため時期不明遺物として掲載する。

遺構：本調査において土坑を45基検出した。そのうち時期不明なものは24基ある。遺構埋土は、黒褐色土・暗褐色土・暗灰褐色土・暗灰色土などである。SK32は不整の長方形状プランを呈する土坑で土坑内からは弥生土器・土師器・須恵器・陶器などが出土している。遺物にはかなりの時期幅があるため時期の特定は難しく時期不明遺構として扱った。出土遺物を第40図に掲載した。

SK32出土遺物（第40図、図版25）

120は須恵器環蓋片である。121は須恵器高环の脚部で脚中位に1条の沈線が巡る。古墳後期。122は土師器の环である。口縁部はやや外反し、底部はわずかに上げ底状となる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。13~14世紀。123は近世の肥前系陶器碗である。半透明のごく薄い青緑色の釉が全体を覆う。たたみ付けには、薄く目砂が付着する。124は弥生土器の壺の底部である。わずかに上げ底を呈する。

本調査検出の土坑の詳細は一覧表に記す（表11）。

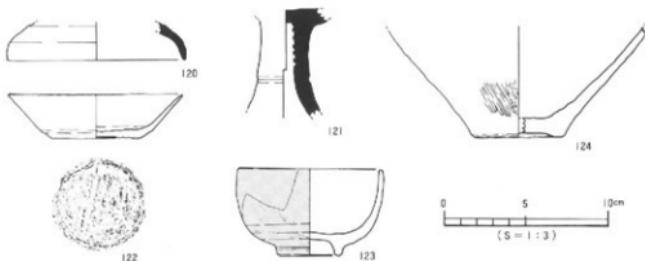
溝は7条を検出した。そのうち時期の不明のものは2条ある。SD5・6はその形状から同一の溝の可能性もある。溝内から遺物の出土はなく、明確な時期はわからない。

本調査検出の溝に関する詳細は一覧表に記す（表12）。

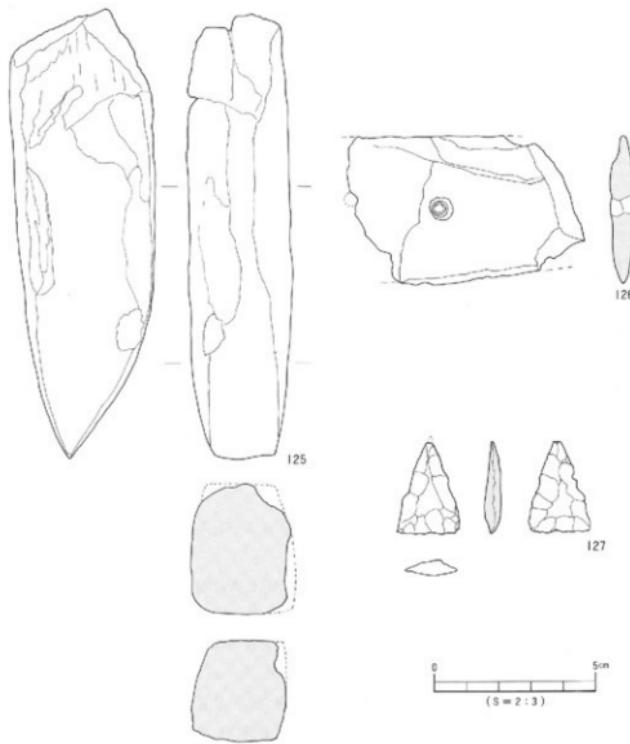
遺物：本調査において包含層中より石器3点が出土した。

包含層出土遺物（第41図、図版26）

125は、ほぼ完形品の柱状片刃石斧である。重さ304.9gを測る。結晶片岩製。126は石庖丁である。孔を2個穿つ。結晶片岩製。127は、ほぼ完形品の石鏃である。重さ2.05gを測る。サヌカイト製。



第40図 SK32出土遺物実測図



第41図 包含層出土遺物実測図

4. 結　び

本調査において、弥生時代から近世に至る造構・遺物を検出した。とりわけ、古代においては回廊状造構の南面とそれに付随する門を確認することができた。回廊状造構の南東及び南西コーナーは過去の調査で確認済みではあるが、今回、これに続く柱列を新たに確認したことになる。

(I) 古代

前述のとおり、回廊については外側柱列、内側柱列共に13間分を検出した。両柱列は柱列を構成する柱穴の平面形や規模、柱穴間隔などにおいてやや異なる様相を呈している。

まず、柱穴の平面形であるが、外側柱列が方形～長方形であるのに対し、内側柱列は円～橢円形である。規模は、外側柱列に比べ内側柱列がやや小さくなっている。深さについても第V層上面下の数

値ではあるが、内側柱列がやや浅い掘り方となっている。各柱穴間隔は、外側柱列がほぼ等間隔であるのに対し、内側柱列は一定ではない。各柱穴の並びについても、外側柱列がほぼ一直線上になるのに対し、内側柱列は一直線上からはずれるものが多くみられる。

これらのことは、先に調査が行われている北、東、西回廊とはほぼ同じ状況を示している。その他、外側柱列と内側柱列の位置関係では、外側柱列の並びに対して内側柱列は直交せず、やや東方向に柱穴の位置が振っている点は興味深い事象である。

次に、回廊に付随する門を検出した。3×2間の建物址で、東西に棟持柱が付く構造となっている。建物を構成する柱穴は方形～長方形プランを呈するが、柱掘り方や柱痕とともに回廊の柱穴にくらべ、一回り大きくなっている。各柱穴は、ほぼ等間隔に並び、建物中央部、棟持柱に続く東西に並ぶ柱穴が他の柱穴にくらべ掘り方は深くなっている。

回廊・門を構成する柱穴は、埋土は黒褐色土を基調とし、黄色土がブロック状に混入する柱穴もいくつかある。方向性についても、回廊・門ともに真北より約4°東に振った方位をとっている。柱穴内からは、須恵器片が数点出土している。小片ではあるが、遺物の特徴が概ね7世紀第3四半期、7世紀後半では下がらないものと考えられる。よって、回廊が7世紀後半、すなわち米住庵寺創建以前のものとするこれまでの調査研究成果を補充する資料である。また、調査区の南西壁沿いに回廊を取り囲む区画溝と思われる溝を検出した。回廊外側柱列の柱筋とは約4mの幅で空間が残されている。溝内から遺物の出土はみられなかったが、過去の調査結果などをふまえたうえで、区画溝に相当する溝であると判断した。

このほか、久米官衙や寺院に絡む遺構として、棚列SA1やSA2、掘立柱建物址、性格不明遺構SX1を検出した。

棚列SA1は回廊の内側に検出されたもので「L」字状に折れ曲がる形状をなす。おそらく方形状に巡るものと考えられる。回廊とはほぼ同じ方位をとっている。棚列を構成する柱穴は方形～長方形プランを呈し、回廊の柱穴より一回り大きくなっている。埋土は回廊が黒褐色土を基調とするのに対し、SA1は、やや灰色が強い暗灰褐色土である。

SA1の南北柱列の一部は性格不明遺構SX1と重複する。SX1は7次調査において、すでに確認されており、今回は遺構の西半部の一部を検出した。遺構内からは米住庵寺創建期と考えられる瓦の他、須恵器・土師器片が出土している。特に瓦類は出土状況などから投棄されたものと考えられる。SA1はその性格や構造など今後の課題を残す遺構である。

SA1とSX1が重複する部分は7次調査の際に何度も切り合いを確認したがSX1上面ではSA1は検出されなかった。遺構埋土が酷似しているため、断定はできないが、現時点ではSA1がSX1に先行するものと考えている。

一方、米住庵寺の寺域に関する遺構については検出されなかつたが、関連する遺構として掘立柱建物址や棚列SA2を検出した。掘立柱建物址は規模の異なる3棟を検出した。掘立1は4×2間以上の大型建物址で掘立2・3は、やや小型の建物址である。遺物は、掘立1より網縄叩きを施した平瓦片が2点、掘立2より格子叩きを施した平瓦が1点出土している。いずれの建物址も回廊や棚列SA1とは異なり、柱穴埋土は暗灰色土であり、建物方位は、ほぼ真北に等しい方位をとっている。

掘立1と2は建物が重複しており、多少の時期差が考えられる。米住庵寺周辺から出土する瓦の特徴から格子叩きのものが網縄叩きのものに先行する傾向がある(丸山美和 1993)。これを踏襲すると

掘立2が掘立1に先行することになる。掘立3は出土遺物がなく時期決定は難しいが、建物方位や規模・柱穴埋上などから、掘立2とほぼ同時期の建物址と考えておく。

今回検出した3棟の掘立柱建物址は出土遺物の特徴などから、いずれも米住庵寺存続期の建物址と考えられる。このほかに、櫛列S A 2があげられる。全容は不明であるが、遺物方位や柱穴埋上がS A 1とは異なっている。建物は真北に等しい方位をとり、埋土は灰褐色を呈する。柱穴内からの遺物の出土はなく明確な時期判断は難しいが、掘立柱建物址とはほぼ同様の方位をとることなどから、米住庵寺存続期の建物址と考えられる。そのほか、包含層中から古代に比定される遺物が出土している。

(2) 古墳時代

古墳時代に時期比定される遺構は土坑S K19があげられる。不定形状の土坑で回廊に先行する。土坑内からは弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土したが¹。特に須恵器は縦や环身など形状をとどめるものが部分的に集中して出土している。炉や周壁構などの施設は未検出であるが、規模や平面形、遺物の出土状況などから住居址の可能性も考えられる。

全体的にみて、古墳時代の遺構・遺物の検出が少ないことが目を引く。特に、古墳時代前・中期の資料はほとんどなく、後期の資料が大半を占めている。各遺構の遺存状況は決して良好なものではなく古墳期のものが削平された可能性もあるが、本調査地が古墳時代には集落が経営されなかつた可能性も考えている。

来住台地上での官衙遺構を考えるうえでは、古墳時代における集落の広がりや構造を解明し、古代官衙成立以前の状況をも把握する必要性があるだろう。それとともに、松山平野における古墳時代から古代の須恵器編年を確立し、検出遺構の時期特定がスムーズに行われることを期待するものである。

(3) 弥生時代

弥生時代に時期比定される遺構は土坑9基があげられる。平面形態で円形と長方形の2つに分類される。円形の土坑は径1.5~2m前後、長方形の土坑は長軸2.5~3m前後、短軸1.5~2m前後の規模のものである。土坑内からは弥生時代前期末から中期前半に比定される遺物が出土している。特に長方形の土坑については、短軸の壁体中央部に小ピットが検出されるものが3基みられた。この種の土坑は来住台地上でのこれまでの発掘調査において比較的多く検出されており、土坑内から前期末から中期前半の遺物が出土している。しかしながら、その性格はいまだ不明な点が多い。規範的にみると、やや小さいが住居址の可能性も考えられる。松山平野における前期~中期前半の住居址は検出例が少ない。当該期の住居址を考えるうえでもこれら長方形土坑はその性格と共に研究課題のひとつとなるであろう。

また、来住台地上では、これまでの調査において、弥生時代の遺構や遺物は多数検出されているが、とりわけ前期末から中期にかけての遺構・遺物が比較的多く検出されている。今回の調査においても土坑のほか、ピットや包含層中より弥生時代前期末から中期にかけての遺物が多数検出しており、来住台地における当該期の集落の広がりを考えるうえでは、好資料となるものである。

(4) S X I 出土瓦の概要

回廊の内側部分にて検出されたS X 1から軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・熨斗瓦など来住庵寺創建期と考えられる瓦類が出土している。

軒丸瓦は小片ではあるが単弁の10弁蓮華文軒丸瓦と推測される。軒平瓦は重弧文を3重に施すもので粘土板橋書き作りで製作されている。凹面側に糸切り痕を残し、凸面側には叩きを施した痕跡はなく、ヨコ方向にナティタで平滑にされている。丸瓦は2点出土しているが、凸面側には叩きの痕跡は

調査の概要

ない。平瓦は凹面に格子・斜格子を施すものがそれぞれ1点ずつ、叩き目をナデ消したもののが1点である。

また、平瓦を転用した平蓋式の瓦が2点出土している。ともに釘穴は穿たれておらず、凸面側にはそれぞれ別の格子叩きを施している。製斗瓦は1点出土している。凸面側に斜格子叩きを施すもので、桶巻き作りで製作した平瓦を半裁したものである。以上のように、SX1出土瓦は凸面側には格子及び斜格子叩きを施すものが大半を占めている。

過去の調査では、寺院に関する造構周辺から出土している平瓦は、ほとんどが繩目叩きを施している。逆に回廊と同一軸方向をなす造構周辺からは、斜格子・格子叩きが大半を占めている。SX1出土の平瓦には繩目叩きを施したものではなく、ほとんどが格子叩きであることなどから、寺院建立後、寺院に先行して存在していた施設に使用された瓦と考えられる。

〔参考文献〕

- 西尾 幸則 1993 「来住庵寺遺跡第15次調査報告書」松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
1989 「来住庵寺跡寺城調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』松山市教育委員会
樋口 隆康 1982 「丹波周山窯跡」京都大学文学部考古学研究室
佐原 真 1972 「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻 2号
橋本 雄一 1994 「来住庵寺22次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報VI』松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
小笠原好彦
森 光晴 1979 「来住庵寺」松山市教育委員会
丸山 美和 1993 「来住庵寺出土瓦について」『来住庵寺遺跡第15次調査報告書』松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

遺構・遺物観察表

一凡 例一

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄は略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の各記載について

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 上器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、环上→環部上部、环下、环部下部、

脚柱→脚部柱部、脚縫→脚部縫部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~3) → 「1~3mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄では焼成具合を略記した。

例) ○→良好、○→良、△→不良

遺構・監表

表2 回廊状遺構 柱穴(外側)一覧

柱穴 (S P)	地 区	平面形	柱頭	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱頭規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
1	L36	方形	○	黒褐色土	0.74×0.74×0.24	0.18×0.18×0.32	角石・房生	
2	L36	長方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.80×0.71×0.24	0.18×0.18×0.22		S D 1を切る
3	L35	方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.88×0.79×0.26	0.20×0.19×0.37		
4	L35	方形	○	黒褐色土	0.84×0.74×0.16	0.18×0.18×0.14		
5	L34	長方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.80×0.64×0.25	0.17×0.17×0.26		
6	L33	方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.56×0.48×0.30	0.17×0.12×0.32		
7	L33	不整長方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.96×0.66×0.30	0.18×0.18×0.29		
8	L32	方形	○	黒褐色土	0.56×0.55×0.20	0.19×0.18×0.19		
9	L32	長方形	○	黒褐色土(黄色土混入)	0.80×0.60×0.18	0.19×0.18×0.32		
10	L31+M31	方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.96×0.72×0.24	0.20×0.19×0.28		
11	L30+M31	不整方形	○	黒褐色土	0.80×0.68×0.22	0.24×0.22×0.29		
12	M30	長方形	○	黒褐色土	0.90×0.54×0.32	0.20×0.18×0.31		
13	M29	方形	○	黒褐色土	0.83×0.51×0.16	0.17×0.17×0.17		
14	M29	不整方形	○	黒褐色土	0.72×0.57×0.14	0.17×0.17×0.17		
15	M24	円形	○	黒褐色土	0.56×0.35×0.22	0.18×0.17×0.24		

表3 回廊状遺構 柱穴(内側)一覧

(1)

柱穴 (S P)	地 区	平面形	柱頭	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱頭規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
1	K26	円形	○	黒褐色土	0.66×0.64×0.16	0.22×0.22×0.14		S K19を切る
2	K26	円形	○	黒褐色土	0.54×0.50×0.17	0.21×0.21×0.24		S K19を切る
3	K25	円形		黒褐色土	0.48×0.42×0.17			
4	K34+L35	方形	○	①黒褐色土 ②黒褐色土(黄色土混入)	0.57×0.56×0.17	0.17×0.16×0.27		
5	K34+L34	円形	○	黒褐色土	0.72×0.62×0.16	0.16×0.16×0.16		
6	L33	円形		黒褐色土	0.40×0.32×0.14			
7	L33	不整圓形	○	黒褐色土(黄色土混入)	1.00×0.64×0.19	0.18×0.17×0.24		
8	L32	方形	○	黒褐色土(黄色土混入)	0.80×0.70×0.16	0.18×0.18×0.19		
9	L32	円形		黒褐色土	0.37×0.49×0.13			

調査の概要

回廊状遺構 柱穴（内側）一覧

(2)

柱穴 (S P.)	地 区	平面形	柱直	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱底規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
10	L.31	円形	○	黒褐色土(褐色ブロック含む)	0.57×0.42×0.16			
11	L.30・31	不規方形	○	①黒褐色土 ②浅褐色土(褐色ブロック含む)	0.64×0.64×0.24	0.16×0.16×0.21		
12	L.30	円形	○	黒褐色土(褐色土混入)	0.49×0.43×0.16	0.19×0.17×0.15		S.K31を切る
13	L.29	円形	○	黒褐色土	0.40×0.40×0.19	0.16×0.16×0.20		
14	L.28・29	円形	○	黒褐色土(褐色土混入)	0.52×0.51×0.17	0.16×0.16×0.16		S.K35を切る
15	L.23	不規方形		黒褐色土(褐色ブロック含む)	0.56×0.52×0.13			

表4 回廊状遺構 柱穴間隔一覧

柱穴間	外側柱穴間隔(m)	内側柱穴間隔(m)	柱穴間	外側柱穴間隔(m)	内側柱穴間隔(m)
1—2	1.90	1.62	10—11	1.96	1.82
2—3	1.62	1.82	11—12	1.54	1.81
3—4	1.92	1.98	12—13	2.06	1.88
4—5	1.76	1.98	13—14	1.86	1.98
5—6	1.74	1.76			
6—7	1.84	1.92			
7—8	1.90	1.80			
8—9	1.89	1.74			
9—10	1.66	1.98			

表5 回廊状遺構 外側柱穴－内側柱穴間隔一覧

柱穴番号	外側－内側柱穴間隔(m)	柱穴番号	外側－内側柱穴間隔(m)	柱穴間	外側－内側柱穴間隔(m)
1	2.46	8	1.90	最大値	2.46
2	2.40	9	1.80	最小値	1.80
3	2.16	10	1.90	平均値	2.09
4	1.82	11	1.88		
5	1.80	12	1.96		
6	1.80	13	1.99		
7	2.08	14	2.22		

遺構一覧表

表6 門柱穴一覧

柱穴 (S P)	地 区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規格 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規格 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
1	L28	椭円形	○	粘灰褐色土	1.16×0.89×0.12	0.36×0.28×0.12		
2	L26・27	椭円形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	1.26×0.87×0.16	0.36×0.28×0.16	骨生	
3	L25・26	方形	○	粘灰褐色土	0.84×0.78×0.10	0.29×0.28×0.10		
4	L24・25	不整円形	○	粘灰褐色土	1.00×0.92×0.17	0.38×0.35×0.19		
5	N25	方形	○	粘灰褐色土	1.20×0.90+α×0.14	0.24×0.36+α×0.16		調査区外に続く
6	N26	不整方形	○	粘灰褐色土	1.56×0.82+α×0.12	0.37×0.38×0.16		調査区外に続く
7	N27	不整円形	○	粘灰褐色土	1.00×0.72+α×0.08	0.32×0.26+α×0.15		発乱に削りされた
8	N28	円形	○	粘灰褐色土	1.00×0.88×0.08	0.35×0.35×0.15		
9	M28	不整方形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	0.84×0.82×0.16	0.24×0.22×0.15		
10	M27・28	長方形	○	①粘灰褐色土(黄色ブロック混入) ②粘灰褐色土	1.18×0.80×0.36	0.22×0.21×0.33		
11	M27	円形	○	①粘灰褐色土(黄色土混入) ②粘灰褐色土	1.00×1.00×0.38	0.24×0.22×0.37		
12	M26	方形	○	粘灰褐色土	0.94×0.90×0.32	0.26×0.22×0.36		網敷
13	M25	円形	○	粘灰褐色土	0.80×0.66×0.30	0.28×0.24×0.28		
14	M24	円形	○	粘灰褐色土	0.62×0.60-α×0.11	0.28×0.20×0.11		発乱に削りされた

表7 S A 1 柱穴一覧

(1)

柱穴 (S P)	地 区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規格 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規格 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
1	SAKA-G Y31	方形	○	粘灰褐色土	0.68×0.30+α×0.25	0.20×0.20×0.25		
2	A38	方形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	0.70×0.60×0.22	0.20×0.18×0.22		
3	B31・32	方形	○	①粘灰褐色土 ②粘灰褐色土(黄色土混入)	0.85×0.72×0.28	0.28×0.26×0.25		
4	C31・32	円形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	1.02×0.90×0.36	0.22×0.22×0.25		
5	C31・32	椭円形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	1.11×0.85×0.35	0.23×0.22×0.22		
6	D32	方形		粘灰褐色土	0.60×0.60×0.11			S X 1 と系譜
7	E32	円形		粘灰褐色土	0.83×0.80×0.20			S X 1 と系譜
8	G32	方形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	1.00×0.82×0.15	0.25×0.22×0.17		
9	H32	方形		①粘灰褐色土(黄色土混入) ②粘灰褐色土	0.95×0.90×0.18			
10	H31	方形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	0.82×0.80×0.20	0.22×0.22×0.20		
11	H30	長方形	○	①粘灰褐色土(黄色土混入) ②粘灰褐色土	1.11×0.75×0.20	0.28×0.28×0.18		

調査の概要

SA 1 柱穴一覧

(2)

柱穴 (S.P.)	地 区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
12	H29・30	長方形	○	①粘灰褐色土(黄色土混入) ②灰褐色土	0.82×0.62×0.16	0.22×0.22×0.15		
13	H29	円形	○	粘灰褐色土	0.52×φ0.52×0.25	0.25×φ0.21×0.28		複数に切られる
14	H28	円形	○	①粘灰褐色土(黄色土混入) ②粘灰褐色土	0.88×0.70×0.15	0.20×φ0.20×0.14		
15	H28・128	円形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	0.90×0.89×0.20	0.25×φ0.21×0.25		
16	H26・127	円形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	0.90×0.85×0.18	0.20×φ0.20×0.18		
17	H26・126	楕円形	○	粘灰褐色土(黄色土混入)	0.80×0.62×0.13	0.28×φ0.26×0.20		S K25を認める
18	I25	椭円形	○	粘灰褐色土(灰色ブロック含む)	0.90×0.70×0.16	0.30×φ0.28×0.18		
19	I24	円形	○	粘灰褐色土(灰色ブロック含む)	0.75×0.65×0.12	0.28×φ0.28×0.12		
20	I23・24	椭円形	○	粘灰褐色土(灰色ブロック含む)	0.78×0.58×0.12	0.27×φ0.25×0.12		

表 8 SA 1 柱穴間隔一覧

柱穴間	柱穴間隔(m)	柱穴間	柱穴間隔(m)	柱穴間	柱穴間隔(m)	柱穴間	柱穴間隔(m)
1-2	2.40			9-10	2.30	17-18	2.20
2-3	2.14	最大値	2.48	10-11	2.25	18-19	2.35
3-4	2.48	最小値	2.14	11-12	2.30	19-20	2.20
4-5	2.20	平均値	2.27	12-13	1.80		
5-6	2.20	◆柱穴間6-7-7-8-9については、A 1号坑不燃造場S X 1と並んで2番目の柱穴が並んである。そのため柱穴間隔は他のものより大きくなる。柱穴が並ぶ場合、これは2箇所の数値は並べている。					
6-7	4.43	13-14	2.80	柱穴間	柱穴間隔(m)		
7-8	4.85	14-15	2.28	最大値	2.80		
8-9	2.30	15-16	2.38	最小値	1.80		
		16-17	2.25	平均値	2.27		

表 9 SA 2 柱穴一覧

柱穴 (S.P.)	地 区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
1	A36	円形	○	灰褐色土	0.74×0.73×0.12	0.21×0.20×0.24		
2	A35	方形	○	①灰褐色土 ②茶褐色土	0.75×0.75×0.12	0.18×0.18×0.23		
3	A35	円形	○	灰褐色土	0.90×0.82×0.12	0.25×φ0.23×0.14		
4	A34	方形	○	灰褐色土	0.67×0.61×0.12	0.26×0.24×0.16		
5	A33	方形	○	灰褐色土(黄色土混入)	0.62×0.59×0.20	0.28×0.24×0.26		
6	A33 (円形)	○	灰褐色土			0.28×0.26×0.20		柱板のみ
7	A32	方形	○	灰褐色土	0.91×0.12×0.14	0.20×0.12×0.18		

造構一覧表

表10 据立柱建物址一覧

掘立	方位	規 模 (間)	横 行		梁 行		床面積 (m ²)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	4×2+α	8.80	2.3×2.0×2.3×2.2	7.3	2.8×2.8×(1.7)	64.24		古代
2	東西	2×2+α	5.80	2.2×2.2×(1.4)	3.99	2.0×1.9	22.62	SK 1 を切る	古代
3	東西	5×1	8.30	1.6×1.6×1.7×1.7×1.7	3.20	3.70	30.71	SK 2 を切る	古代

表11 土坑一覧

(1)

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A35～B35	円形	直状	2.50×1.82×0.09	暗褐色土	魚生・土加	古式以前	掘立1に切られる 1区
2	A32～B32	扇形	直状	2.98×2.92×0.34	墨褐色土	魚生	魚生前中期 ～中期初期	掘立1に切られる 1区
3	G31	方形	直状	0.90×0.62×0.12	暗褐色土		古式以前	S X 1 に切られる 2区
4	E34～F34	方形	レンズ状	1.96×1.74×0.12	墨褐色土		古式以前	S X 1 に切られる 2区
5	E35～F36	円形	直状	1.36×1.22×0.11	墨褐色土		不明	2区
6	F35～36	不整長方形	透台形狀	1.87×1.41×0.50	墨褐色土	魚生	魚生前中期 ～中期初期	2区
7	G35～36	円形	直状	1.03×0.90×0.10	暗赤褐色土		魚生以降	S K 8 を切る 2区
8	G35～36	扇方形	透台形狀	2.53×1.36×0.14	暗褐色土	魚生	魚生前中期 ～中期初期	S K 7 に切られる 2区
9	G34～H34	不整長方形	レンズ状	3.22×1.78×0.11	墨褐色土		不明	2区
10	G36～H36	円形	レンズ状	1.90×0.98×0.13	暗褐色土	魚生	魚生中期	2区
11	H35～36	円形	レンズ状	1.21×1.18×0.14	墨褐色土	魚生	魚生前中期 ～中期初期	2区
12	H35～I35	円形	直状	1.94×1.89×0.10	暗褐色土	魚生	魚生前中期 ～中期初期	2区
13	I34	椭円形	レンズ状	1.60×1.34×0.10	墨褐色土	魚生	魚生前中期 ～中期初期	2区
14	H33～34	不整橢円形	直状	2.73×1.02×0.08	墨褐色土 (褐色土混じり)	魚生	魚生中期後半以降	2区
15	M32	扇形	直状	1.79×0.90×0.06	暗褐色土		不明	3区
16	M32～33	扇方形	透台形狀	1.62×0.90×0.12	暗褐色土	魚生		3区
17	K35	方形	直状	1.65×1.85×0.11	暗赤褐色土		不明	2区
18	L36～M36	円形	透台形狀	1.60×1.56×0.20	暗褐色土	魚生	魚生中期後半	S.D 1 に切られる 3区
19	K36～37	不整方形	透台形狀	3.99×3.88×0.15	暗褐色土	魚生・土加・須磨	古式後期～古代	同様に切られる 3区

調査の概要

土坑一覧

(2)

土坑 (S.K.)	地 区	平 延 形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
20	J36-L37	不定形	瓶状	1.81×1.74×0.06	暗灰色土		古墳後期～古代	S.K19床面後出 3区
21	K32	長方形	レンズ状	1.80×1.50×0.12	暗褐色土		不明	3区
22	K35	円 形	瓶状	1.20×0.80×0.12	暗褐色土	圓鏡	古墳後期以前	S.D.4に切られる 3区
23	M35	長方形	瓶状	1.58×0.76×0.12	暗褐色土		不明	3区
24	I36-H37	円 形	レンズ状	2.00×2.00×0.12	暗灰色土		不明	2～3区
25	I36-J26	不整長方形	瓶状	3.22×2.16×0.10	①暗灰色土 ②暗灰褐色土		古代以前	S.A.1に切られる 4区
26	J31-K32	不定形	レンズ状	4.30×1.80×0.12	暗褐色土		不明	3区
27	G26-H27	不整長方形	瓶状	1.00×0.90×0.12	暗灰色土		不明	S.K26を切る 4区
28	H27	方 形	レンズ状	1.42×1.34×0.07	暗灰褐色土		不明	S.K27に切られる 4区
29	I29-J30	不整方 形	レンズ状	3.50×2.68×0.37	暗灰褐色土		不明	S.K30に切られる 4区
30	I30	不整四 形	瓶状	1.24×1.13×0.24	暗褐色土		不明	S.K29を切る 4区
31	K29-L30	不整椭圆 形	瓶状	2.64×1.88×0.11	①暗褐色土 ②暗灰褐色土 (褐色土蓋付)		古代以前	圓鏡に切られる 4区
32	J30-K30	不整椭圆 形	瓶状	2.87×1.95×0.04	暗褐色土		不明	4区
33	M29-N30	不整方 形	レンズ状	2.55×1.97×0.16	暗灰褐色土		不明	4区
34	J27-K28	不定形	瓶状	4.22×2.59×0.10	暗灰色土		不明	S.K44を切る 4区
35	K28-L29	不定形	レンズ状	3.42×3.40×0.11	暗褐色土		古代以前	同上に切られる 4区
36	L28-M28	不整方 形	适合瓶状	1.93×1.65×0.18	①暗褐色土 ②暗灰褐色土		古代以前	圓鏡に切られる 4区
37	J26	不整椭圆 形	レンズ状	2.08×1.95×0.04	暗灰褐色土		不明	4区
38	I29-J29	円 形	瓶状	1.40×1.35×0.15	暗灰褐色土		不明	4区
39	I,24	円 形	适合瓶状	1.57×1.36×0.56	①暗灰褐色土 ②暗灰褐色土		古代以降	S.D.7を切る 4区
40	G25-H25	円 形	瓶状	1.71×0.48×0.14	暗灰褐色土		不明	4区
41	K25	不定形	瓶状	2.60×1.40×0.12	暗灰色土		不明	S.D.5・6に切られる 4区
42	K35	方 形	瓶状	1.99×1.05×0.06	暗褐色土		不明	4区

造構一覧表

土坑一覧

(3)

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
43	K25・26	不整楕円形	圓状	1.54×0.24×0.10	暗灰色土		不明	S K5に切られる 4区
44	K27	方形	圓状	0.93×0.84×0.10	暗灰褐色土		不明	S K34に切られる 4区
45	H26	椭円形	圓状	0.92×0.89×0.11	暗灰褐色土		不明	4区

表12 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	I-35～M36	圓状	5.50×0.04×0.21	暗灰色土	弥生・土師	古代以前	S K18を切る SD 3に切られる 3区
2	L37～M37	レンズ状	2.17×0.70×0.14	暗灰色土		古代以前	S D 1と重複 3区
3	M34～N36	レンズ状	6.25×0.59×0.12	灰褐色土	L58	古代	140m溝 SD 1を切る 3区
4	J35～K36	レンズ状	1.46×0.84×0.13	暗灰褐色土		古墳後期～古代	S K19と重複 S K22を切る 3区
5	J25～K26	圓状	6.36×0.80×0.13	灰褐色土		不明	S K41・43を切る 4区
6	K24～L24	圓状	2.56×0.46×0.04	灰褐色土		不明	S K41を切る 4区
7	L24～M23	圓状	8.16×1.62×0.10	灰褐色土	土師	古代以前	圓溝を切る 4区

表13 回廊式造構・門出土遺物觀察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 素・施 文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	16管	口径 (11.0) 底高 2.5	天井部と口縁部を分ける縫は消失し口縫部は内面側に向う。口縫部は丸く仕上げる。%の現存。	円板ナゲ	斜板ナゲ	灰色 灰色	泥 ○	同部 外例1	14
2	环身	底高 2.0	たあがりは欠損。受部は上外方にび、端部は火炎味に丸く仕上げる。%の現存。	円板ナゲ	斜板ナゲ	灰色 灰色	泥 ○	同部 外例1	14
3	环身	底高 2.9	たあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は上外方にび、端部は丸る。%の現存。	円板ナゲ	斜板ナゲ	灰色 灰褐色	泥 ○	門2	14
4	妻	底径 (7.22) 底高 7.2	上げ底を有する妻の底部。底部付近外側に縫が付着する。%の現存。	⑩～ハラミヨキ ⑪ナゲ	ナゲ	赤褐色 赤褐色	石・貝(1～3) ○	同部 外例2	14
5	妻	底径 (6.8) 底高 4.1	平底の妻の裏部。%の現存。	ナゲ	ナゲ	赤褐色 赤褐色	砂粒 ○	同部 外例1	14
6	妻	底径 (6.0) 底高 3.0	わずかに外方に突出する平底の妻の底部。%の現存。	着溝の為不明	割減の為不明	乳白色 乳白色	石・貝(1～6) ○	門2	14
7	妻	底径 5.6 底高 4.2	わずかに上げ底を有する妻の底部。底部外側に粘土合板を残す。内外面に粘土合板あり。	⑩～ハラミヨキ 4/1cm→ナゲ	ナゲ(粘土合板) ⑪ナゲ	赤褐色 赤褐色	石・貝(1～3) 全 ○	門2	14

調査の概要

表14 挖立1出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	环	口径(16.2) 底高 3.6	口縁部は内凹し、底部は丸い。口縁部に凹みあり。器壁は薄い、火の残存。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	乳白色 乳白色	米 ○	SP55	14
9	环	口径(11.3) 底高 2.7	内凹する口縁部。口縁部は丸く仕上げる。口縁部にやや膨らむ。火の残存。	ヨコナゲ	窓の為不明	赤褐色 赤褐色	黄(1) ○	SP76	14
10	环	口径(12.9) 底高 2.1	内凹する口縁部。口縁部は丸く仕上げる。小片。	窓の為不明	窓の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1) ○	SP7	
11	环	口径(14.6) 底高 2.0	口縁部位でわずかに弧曲し、口縁部はやや外反する。口縁部は丸く仕上げる。小片。	窓の為不明	窓の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1) ○	SP73	14
12	环	底径(10.2) 底高 1.6	平底の底部。側面は内凹気味にさり上がる。口縁部は粗い。火の残存。	窓の為不明	窓の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1) ○	SP55	
13	环	直径(8.4) 底高 0.6	平底の底部。器壁は薄い。小片。	⑨ヨコナゲ ⑩吹出の為不明	ヨコナゲ	乳白色 乳白色	米 ○	SP73	
14	环	口径(13.6) 底高 3.6	横手の大背筋からだらかに口縁部に下がり、口縁部は丸く仕上げる。口縁部外方に面筋が痕あり。	⑪回転ヘラタケ ズラ治 ⑫回転ナゲ	回転ナゲ	吉田色 灰色	米 ○	SK95	14
15	环	口径(12.0) 底高 1.6	内凹する口縁部。口縁部はわずかに内傾する。小片。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	米 ○	SP60	
16	环	底径(7.1) 底高 2.2	円錐高台の付く环。側面はやや内凹気味にさり上がる。底部の切り邊は回転ヘラ切り技方に14。	⑬回転ナゲ ⑭軸ヘラタケ リーナゲ	回転ナゲ (一部ナゲ)	灰色 灰色	米 ○	SP43	14

表15 挖立1出土遺物觀察表 瓦製品

番号	種類	法量				調整		色調	胎土	焼成	備考	図版
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸面	凹面					
17	平瓦	7.0	13.1	2.7	425	粗織押	布目底 赤切り痕	暗灰色	ち黒	硬	SP67	15
18	平瓦	12.0	9.6	2.9	464	粗織押	布目底	乳白色	やや灰	軟	SP7	15

表16 挖立2出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	环	口径(13.3) 底高 2.9	口縁部下位で、内方に崩れし、口縁部は丸く仕上げる。口縁部はやや外反する。口縁部は丸く仕上げる。小片。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰白色 灰白色	米 ○	SP99	15
20	高环	口径(16.8) 底高 2.6	無蓋環の耳部分。中位で縁をなし、口縁部はやや外反する。口縁部は丸く仕上げる。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	米 ○	SP99	15

表17 挖立2出土遺物觀察表 瓦製品

番号	種類	法量				調整		色調	胎土	焼成	備考	図版
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸面	凹面					
21	平瓦	13.0	12.0	2.5	609	斜格子押	布目底 赤切り痕	灰色	ち黒	硬	SP99	15

遺物観察表

表18 SX1出土遺物観察表 瓦製品

番号	種類	法 量			調 整		色 調	胎土	焼成	備考	図版
		長さ(m)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸 面	凹 面				
22	軒丸瓦	7.4	6.4	4.8	465	ヨコナガ	ヨコナガ	淡青褐色	青	やや軟	17
23	軒平瓦	44.3	36.7	2.2	7,150	ヨコナガ	布目板 系切り痕	淡灰褐色	青	良	16
24	軒平瓦	31.8	28.8	2.7	5,150	ヨコナガ	布目板 系切り痕	淡青褐色	青	軟	17
25	平瓦	46.7	29.2	2.4	4,800	斜板子叩き	布目板 系切り痕	淡青褐色	青	やや軟	18
26	平瓦	30.0	24.4	2.6	3,400	斜板子叩き	布目板 系切り痕	淡灰褐色	青	やや軟	18
27	平瓦	31.2	23.2	2.0	2,850	板子叩き	布目板 系切り痕	灰褐色	青	良	19
28	平瓦	28.8	26.5	2.1	2,900	ヨコナガ	布目板	淡灰色	青	やや軟	
29	隅木蓋瓦	39.2	33.6	2.5	5,000	格子叩き	布目板 系切り痕	淡青褐色	青	良	19
30	隅木蓋瓦	32.2	29.9	2.1	3,250	斜板子叩き	布目板 系切り痕	灰褐色	青	良	19
31	丸瓦	35.9	22.4	2.8	2,200	ヨコナガ	布目板 系切り痕	淡青褐色	青	良	20
32	丸瓦	28.6	21.9	2.5	2,300	ヨコナガ	布目板 系切り痕	淡青褐色	青	やや軟	
33	腰斗瓦	41.8	19.5	1.8	2,150	斜板子叩き	布目板 系切り痕	淡青褐色	青	良	20

表19 SX1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土	焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面					
34	环基	口径(12.1) 底高 3.3	笠形の天井形からならだかに下がり様を なして構成し、口部は内傾する。口部 端部は丸い。(X)残存。	回転ナガ	回転ナガ	青色 灰色	青 ○			21
35	环身	口径(12.4) 底高 3.7	たあがりは内傾し、端部は内傾する円 筒をなす。底部は上向外方にのび、端 部は丸い。(X)残存。	回転ナガ	回転ナガ	青灰色 青灰色	青 ○			21
36	环身	口径(12.7) 底高 3.8	たあがりは内傾した後、直し、底部 は丸く仕上がる。受部は上外方にひねり 出される。(X)の残存。	回転ナガ リフ	回転ナガ リフ	青灰色 青灰色	青 ○			21
37	环身	口径(14.6) 底高 3.2	たあがりは内傾し、端部はわずかに内 傾する段をなす。受部は上外方にひ ねる。(X)の残存。	回転ナガ	回転ナガ	灰色 灰色	青 ○			21
38	甕	口径(22.8) 底高 4.5	外反する口部と、口縁に断面二角形が のぞむ。口縁に2本による山形を施す。底部 は丸くされり。	回転ナガ	回転ナガ	灰色 灰色	青 ○	自然釉		21
39	甕	口径(19.0) 底高 3.6	断面△角形の胴体と口縁に2 本1組のL型による山形を施す。底部 外縁に横方向のくぼみを有致。	(1)ヨコナガ (2)ハケマカガ キ	ヨコナガ	黄褐色 青褐色	石・灰(1~3) ○			21
40	甕	口径(17.3) 底高 3.0	外をする口縁と、底部は「コ」字に仕 上げる。(X)の残存。	(1)ヨコナガ (2)ハケマカガ キ	ハケマカガ キ	乳白色 青褐色	石・灰(1~2) 金 ○			
41	甕	口径(20.3) 底高 3.3	底面は鉛垂、2本1対の帶縫沈支を4 本(左4本、右2本)方向に施す。口縁部 は横取りする。小片。	ヨコナガ	ヨコナガ	乳白色 乳白色	石・灰(1~3) ○			
42	高甕	底高 9.2	円筒状の底盤、内面にしばり紙を剥落し 残す。4本乳突は楕円合せ押抜法による。	ヨコナガ	ナガ	乳白色 乳白色	石・灰(1~3) 金 ○			

調査の概要

S X 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
43	高杯	直径 (15.7) 高さ 2.3	高台の脚部断片。わずかに外反し脚部断 片は「丁」字形に仕上げる。外面に細かな ミガキ調整を施す。	脚部へラミガキ 脚部ロコナゲ	ヨコナゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) 金 ◎		
44	高杯	直径 (10.9) 高さ 3.9	高台の脚部。断面に3条、脚端面に1 条の施文を有す。脚上部に「等落二重形 状」の施文を2条ずつ施す。	脚底の為不明	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~2) 金 ◎	21	
45	甕	底径 7.0 高さ 8.5	わずかに上部を有する甕の底部。脚部 は斜め上方に直角的に立ち上がる。底部 内面に稍彫削を施す。	④ヘラミガキ ⑤ナゲ	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~2) 金 ◎	笠研	
46	甕	底径 (7.1) 高さ 6.3	わずかに上部を有する甕の底部。脚部 は斜め上方に直角的に立ち上がる。底部 内面に稍彫削を施す。	ナゲ (一部ガキ)	磨滅の為不明	赤褐色 暗褐色	石・長(1~5) 金 ◎		
47	甕	底径 (5.9) 高さ 5.9	上部底を有する甕の底部。脚部は外反し 棘に立ち上がる。当の残存。	ナゲ (一部ケツリ)	磨滅の為不明	赤褐色 赤褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
48	甕	底径 (9.0) 高さ 4.2	平底の底部。少くの残存。	ハケ	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ◎		
49	甕	底径 (9.0) 高さ 4.9	平底の底部。少くの残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	砂多し ◎		

表20 包含層(古代)出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
50	环	口径 (20.4) 高さ 1.7	扁平な大骨部から縦をなして底座と口縁 部は下内方にへがる。口縁端部は丸く仕 上げる。小片。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	青 ◎		
51	环	口径 (18.7) 高さ 3.4	体部内側し、口縁部はわずかに外反す る。口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	青 ◎		
52	环	口径 (17.0) 高さ 2.7	内側する口縁部。端部は丸く仕上げる。 小片。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	青 ◎		
53	环	口径 (18.0) 高さ 3.9	高台の付ける口縁部。口縁部は外反 し、口縁端部内面は凹む。口縁下位で縫 をもつ。	①回転ナゲ ②回転ヘラケ ③回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	青 ◎		
54	环	口径 (15.0) 高さ 3.3	高台の付ける。高台は外方に凸出し端部 は丸く仕上げる。底部の器型は薄い。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 青灰色	青 ◎		
55	环	口径 (12.0) 高さ 1.8	高台。高台は低く、底部の邊縁部より 内側に付く。高台端部は丸く仕上げる。少 くの残存。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	青 ◎		
56	环	口径 (10.0) 高さ 3.1	高台は低く、底部の邊縁部に付く。 端部は「コ」字形に仕上げる。(約)の後 ろ。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	青 ◎	自然釉	
57	甕	底径 (17.0) 高さ 4.5	脚付甕の脚部か。外反する断面。脚上部 に径0.9cmの円孔を3方向に穿つ。(約)の 残存。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 灰色	青 ◎		

表21 SK19出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
58	环身	口径 (14.6) 高さ 2.0	たちあがきは内側し、端部は丸く仕上げ る。受部はは水平にびらんの後行。	④回転ヘラケ アクリ ⑤回転ナゲ	回転ナゲ (一部ナゲ)	灰青色 乳白色	青 ◎	床面出土品	21

遺物観察表

SK19出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面)色調(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
59	环身	11径(12.4) 残高 3.2	たちあがりは内傾した後、直立し、端部は突き出る。受部は短く上方にのみある。弓の残存。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 灰色	素	○	
60	砂	残高 12.5	口縁墨欠損。底部1枚と下間に2条の沈線を施す。底部内面に横1枚と2人目の丸孔を残す。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	素	○	21
61	足	残高 7.0	口縁墨欠損。底部1枚と下間に2条の沈線を施す。底部内面に横1枚と2人目の丸孔を残す。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	素	○	21
62	脚	口径(25.9) 残高 6.0	内側する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。口縁端部に内外両面に被毛をなす。弓の残存。	(1)回転ナゲ (2)磨滅の為不明	(1)回転ナゲ (2)磨滅の為不明	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) 金 ○		
63	脚	11径(24.8) 残高 4.2	外反する口縁部。口縁端部はわずかに「ヨ」字状に仕上げる。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	砂粒多し 金 ○		
64	脚	口径(17.4) 残高 4.9	わざかに外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。口縁端部内面に弱い棱をもつ。	ハケ	ヨコナゲ	赤褐色 赤褐色	砂粒多し ○		
65	脚	口径(19.2) 残高 4.4	直立状跡に立ち上がる口縁部。口縁端部は上方に仕上げる。口縁端部はわずかに凹む。弓の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~7) ○		
66	脚	口径(16.4) 残高 4.2	外反する口縁部。口縁端部は「ヨ」字状に仕上げる。器壁は厚い。弓の残存。	ハサエヨコナゲ	ヨコナゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ○	黒斑	
67	宍	口径(20.4) 残高 4.6	外反する口縁部。口縁端部は「ヨ」字状に仕上げる。弓の残存。	ハサエ-76(7cm) ヨコナゲ	ヨコナゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
68	脚	底径 4.8 残高 2.2	上口底を有する脚の底部。	ヨコナゲ	ナゲ	乳白色 黑色	石・長(1~3) 金 ○		
69	脚	底径 6.4 残高 3.8	外方に突出するわざかに下口底を有する底部。弓の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤褐色 褐色	石・長(1~4) 金 ○		
70	宍	底径 3.8	やや上口底を有する底部。底端部は削離している。弓の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色 褐色	石・長(1~3) ○		
71	宍	底径 5.9 残高 3.9	やや外方に突出する下口底の底部。底端部はヘラ工具による擦剥があり。	ナゲ	ナゲ	乳色 乳色	石・長(1~5) 金 ○		

表22 SK22出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面)色調(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
72	环蓋	残高 2.6	断面三角形の棱をもち、口縁部は傾下する。口縁端部は内傾する。口唇部に斜め1枚を有する。小片。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	素	○	21

表23 SK2出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面)色調(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
73	脚	口径(17.7) 残高 15.6	丸みのある四面三角形の柱上様の最初1口縁部に斜め1枚を有する。斜め1枚にヘラで引き抜いて底面を削離している。弓の残存。	(1)ハサエヨコナゲ (2)ヘタニギキ	ナゲ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ○		22
74	脚	口径(29.0) 残高 8.0	断面方形状の貼付け縁を見る脚。口縁端部は、ナゲ削む。弓の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ○		22

調査の概要

SK 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外側	内面				
75	壺	口径(15.8) 底高 6.7	頸部は丸く、口縁部は外反する。口縁部は丸い。腹部にヘラ彫き沈漫文を3点以上施す。肩の残存。	⑪ココナデ ⑯ハケ→ナガ	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~2) 金 ○		22
76	壺	底径(8.2) 底高 4.8	わずかに上げ延をとする底部。肩の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤褐色 赤褐色	石・長(1~5) ○		

表24 SK 6・SK 8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外側	内面				
77	壺	口径(25.0) 底高 8.2	断面三角形の貼付口縁を有する壺。口縁部に凹み口を施す。胴部にヘラ彫き沈漫文6点と刻文を施す。	ココナデ	ココナデ	黄白色 黄白色	石・長(1~3) 金 ○	SK 6	22
78	壺	底径 9.3	長径で、口縁部は外方に開く。底部に凹み口を施す。胴部にヘラ彫き沈漫文6点と刻文を施す。ヘラ彫き沈漫文5点。口縁部内側に貼り付け凸凹をもつ。	ハケ→ヘラミガキ	ナゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金 ○	SK 6	22
79	壺	口径(16.0) 底高 16.2	折り曲げ口縁の壺。胴部に張り出しが多い。口縁部に凹み口。胴部にヘラ彫き沈漫文を6条施す。	⑪シケ ⑯ヘラミガキ	⑪ナゲ ⑯ヘラミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金 ○	SK 8	23
80	壺	底径(9.0) 底高 6.2	平底の弧底。底部は直立筒体に立ち上がり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ○	SK 8	
81	瓶	底径 7.6 底高 4.5	蝶の軸用品か。径0.7~1.0cmの孔を穿つ(地吹抜孔)。	ナゲ	ハケ(一部)	乳白色 褐色	石・長(1~3) 金 ○	SK 8	23

表25 SK 10~14出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外側	内面				
82	壺	口径(28.7) 底高 12.6	丸みのある断面三角形の貼付口縁を有する壺。胴部は無文。肩の残存。	⑪ココナデ ⑯ヘラミガキ	⑪ヨコナデ ⑯ヘラミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ○	SK 10	23
83	壺	口径(26.0) 底高 3.0	外反する口縁。口縁表面に凹み口を施す。口縁上部に刻文を有する例。△%の残存。	ココナデ	ヘラミガキ	乳白色 黑色	石・長(1~2) 金 ○	SK 10	23
84	壺	口径(21.0) 底高 2.6	折り曲げ口縁。口縁部に浅い凹み口を施す。胴部にヘラ彫き沈漫文を2条以上施す。小片。	ココナデ	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	SK 11	23
85	壺	口径(17.0) 底高 4.4	外反する口縁。口縁表面は「ヨコ」字状に立ち上がる。肩の残存。	ハケ	磨滅の為不明	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	SK 11	
86	壺	底径 3.5	丸みのある断面三角形の貼付口縁を有する壺。口縁部に凹み口を施す。小片。	ココナデ	ココナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金 ○	SK 12	
87	壺	底径(3.6) 底高 5.7	わずかに上げ延を有する底部。内外両面にヘラミガキ調整を施す。肩の残存。	磨滅の為不明	ヘラミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	SK 12	
88	壺	口径(19.0) 底高 4.7	新潟西方型の貼付口縁を有する壺。口縁部に凹み口を施す。口縁下にヘラ彫き沈漫文を3条施す。	ココナデ	ヘラミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	SK 13	23
89	壺	底径 5.4	断面に断面三角形の凸部を貼り付け、凸部上に押し目を残す。凸部下にヘラ彫き沈漫文を3条施す。	ココナデ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	SK 14	23
90	高杯	底高 2.6	高脚の口縁。小片。口縁部に3条以上の刻文を施す。口縁部七面はわずかにナギ回む。	ココナデ	ココナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○	SK 14	

遺物観察表

表26 SK18出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	施土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	甕	口径(20.40) 底高 9.2	丸みのある直筒三角形の瓶付口縁をもつ 甕。口縁部に焼け目を残す。胴部は タコ方向、内面はヨコ方向の擦かい、 タガキを残す。口の残存。	⑪ヨコナゲ ⑫ヘラミガキ	⑪ヨコナゲ ⑫ヘラミガキ	赤褐色 乳白色	石・長(1~3) 全 ○		24
92	甕	口径(14.3) 底高 7.5	断面三角形の貼付口縁をもつ甕。胴部 の擦かいは削り、口の残存。	⑪ヨコナゲ ⑫ヨケヘル ⑬タガキ(一部)	削減の為不明	乳黃褐色 乳白色	石・長(1~4) ○		24
93	甕	口径(19.30) 底高 17.2	削り曲げ口縁の甕。胴部の張りは弱い。 口の残存。	⑪ヨコナゲ ⑫ヘラミガキ	⑪ナデ ⑫ヘラミガキ	赤褐色 乳白色	石・長(1~5) 全 ○	黒斑	24
94	甕	口径(14.4) 底高 16.7	削り曲げ口縁の甕。口縁と胴部は人型を 等しくする。口の残存。	⑪ヨコナゲ ⑫ヘラミガキ	⑪ナデ ⑫削減の為不 可利用	灰褐色 乳白色	石・長(1~3) 全 ○	黒斑	24
95	甕	口径(31.0) 底高 17.4	断面三角形の貼付口縁をもつ甕。胴部 の張りは強く、口の残存。	⑪ヨコナゲ ⑫ヨケヘル ⑬タガキ	ナダ(貼面) ナダ(貼面)	赤褐色 乳白色	石・長(1~3) 全 ○	黒斑	24
96	甕	直径(5.8) 底高 13.0	わずかに上げ底を残す甕部。 胴部は表面的にさじ上がる 95と同一軸性。	ヘラミガキ	ナダ	乳黃褐色 乳白色	石・長(1~3) 全 ○		24
97	甕	底径(6.8) 底高 3.6	わずかに上げ底を残す甕部。口の残存。	ナダ	ナダ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) 全 ○		24

表27 ピット出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	施土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
98	甕	口径(30.0) 底高 7.3	折り曲げ口縁の甕。口縁周辺に焼け目を 残す。胴部の張りは強く、口縁部は凹状。 8条以上。	ヨコナゲ	ヨコナゲ (一部ハケ)	黄灰色 黄褐色	石・長(1~5) 全 ○	S P82	25
99	甕	口径(25.3) 底高 3.7	貼付口縁の甕。口縁部は凹状。胴部に 焼け目を複数見つけた。少し歪。	ナダ	ヨコナゲ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3) 全 ○	S P113	
100	甕	口径(16.5) 底高 9.8	底部には内側し、口縁部は外反する。口縁 部は「二字」字状に上げる。口の残存。	ヨコナゲ (一部ハケ)	⑪ヨコナゲ ⑫ヘラミガキ	黃白色 黃白色	石・長(1~5) 全 ○	S P82	25
101	甕	底径 6.1 底高 7.7	わずかに上げ底を残す甕部。	ナダ	ナダ	系褐色 暗褐色	石・長(1~7) 全 ○	S P135	25
102	甕	底径 6.3 底高 5.1	や上げ底を残す甕部。	ヘラミガキ	ナダ	乳黃色 乳褐色	石・長(1~5) 全 ○	S P166	25
103	甕	底径 6.0 底高 6.4	平底の底部。	摩擦の為不明	ナダ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) 全 ○	S P16	黒斑
104	甕	底径(12.2) 底高 3.5	大きな平底の底部。	摩擦の為不明	摩擦の為不明	赤褐色 乳黃色	石・長(1~5) 全 ○	S P82	
105	甕	底径(6.6) 底高 4.4	わずかに上げ底を残す甕部。口の残存。	磨滅の為不明	ナダ	乳白色 乳白色	石・長(1~7) 全 ○	S P132	
106	甕	底径 6.2 底高 3.2	わずかに上げ底を残す甕部。	磨滅の為不明	ナダ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) 全 ○	S P6	
107	甕	底径(6.7) 底高 3.8	中央部がわずかに削り底部。器壁は厚い。 口の残存。	磨滅の為不明	ナダ	乳黃褐色 乳白色	石・長(1~3) 全 ○	S P276	

調査の概要

表28 包含層(弥生)出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
108	甕	口径(22.8) 底高 6.4	断面二角形の貼付口縁の甕。口縁部に傾み旨を施す。別部にはラ描き比叡文と刻文を施す。%の残存。	ナゲ	ナゲ	乳白色 乳黃褐色	G・長(1~5) ○		25
109	甕	口径(12.8) 底高 9.8	折り重り口縁。瓶詰の彫りは強くラ描きの比叡文を施す。%の現存。	⑪ヨコナゲ ⑬窓溝の為不 規	⑪ヨコナゲ ⑭窓溝の為不 規	乳白色 黃白色	石・長(1~7) ○		25
110	甕	口径(32.8) 底高 5.3	通「し」字型口縁の甕。口縁部は「ヨ」字状に仕上げる。断面二角形の凸唇を施す。凸唇上に押毛痕を施す。	窓溝の為不明	ヨコナゲ	乳白色 乳黃褐色	石・長(1~5) ○		25
111	甕	口径(14.0) 底高 5.0	折り重り口縁の甕。器身は薄い。小片。	窓溝の為不明	ヨコナゲ	乳白色 乳黃褐色	G・長(1~5) ○		
112	甕	口径(16.0) 底高 3.4	外反する口縁部。口縁部はナゲ凹U字片。	ハケ・ヨコナゲ	ハケ・ヨコナゲ	乳白色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○		
113	甕	口径(13.0) 底高 4.5	「く」の字状口縁を見る甕。口縁部ははむかに上方につまみ上げられる。小片。	窓溝の為不明	窓溝の為不明	赤褐色 暗褐色	石・長(1~3) ○		
114	甕	口径(20.4) 底高 3.6	外反する口縁部。口縁部は「ヨ」字状に仕上げる。口縁部下間に剪み目を施す。	窓溝の為不明	窓溝の為不明	乳白色 黃白色	石・長(1~5) 全 ○		25
115	鉢	口径(20.0) 底高 3.2	外反口縁を有する鉢。小片。	窓溝の為不明	窓溝の為不明	乳白色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○		
116	ショウキ 形土器	底高 4.2	ショウキ形土器の把手	ナゲ	ナゲ	茶褐色	石・長(1~5) ○		
117	甕	底径(9.0) 底高 4.2	むずかに上げ式を有する底部。%の残存。	窓溝の為不明	窓溝の為不明	暗褐色 褐色	石・長(1~3) ○		25
118	甕	底径(8.0) 底高 3.5	中高部がむずかに上げ式を有する底部。<%の残存。	窓溝の為不明	窓溝の為不明	黃白色 黃白色	石・長(1~5) ○		
119	甕	底径(8.6) 底高 3.9	上げ式を有する底部。<%の残存。	ナゲ	ナゲ	乳白色 暗褐色	石・長(1~3) ○		

表29 SK32出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
120	环	口径(10.0) 底高 2.3	小片。口縁部は夷り引味に丸く仕上げる。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	青 ○		
121	高环	底高 6.5	高环の柱部。1条の沈線が認まる。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	青 ○		
122	环	口径(14.0) 底径 7.3 底高 3.6	口縁部はやや外反し、縁部は先細りする。底部の切り離しは回転系切り仕込みによる。瓦の残存。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	乳白色 乳黃褐色	青 ○		25
123	甕	口径(11.8) 底径 4.9 底高 7.2	肥厚系の脚部陶瓶。下邊明のくすんだ青緑色の粘土全体を覆す。又縁部高い段階を呈する。たびたび付けには薄く目跡が付着する。<%の残存。	不明	不明	灰褐色 灰褐色	青 ○		25
124	甕	底径(7.2) 底高 9.1	上げ式を有する底部	ヘラモガキ	ナゲ	茶褐色 暗褐色	G・長(1~3) ○		

遺物観察表

表38 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	種類	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
125	柱状片岩石斧	ほぼ完形	結晶片岩	(14.2)	3.1	4.5	394.9		26
126	石椎1	%	結晶片岩	(7.3)	(4.7)	0.8	27.9		26
127	石鏃	ほぼ完形	チスカイト	(2.9)	(1.9)	0.45	2.05		26

第IV章 調査の成果と課題

来住庵寺19次調査は国指定史跡「来住庵寺」に関する寺域確認と南面回廊状遺構の検出を目的的として実施した。調査・研究の結果、回廊状遺構を含む官衙関連遺構と寺域関連遺構の様相を追求するものとなった。

まず、回廊状遺構は米住庵寺2次調査で東面回廊が検出された当時、来住庵寺の主要伽藍であるとされていた。その後、5次、7次調査で、それぞれ北面、西面回廊の存在が確認され、寺院の西側部分の一部を取り囲む遺構であることが判明した。それと同時に7世紀後葉の造立と考えられる来住庵寺に先行するものであることが明らかとなつた。現在では回廊状遺構は寺院建立以前の齊明天皇の「石湯行宮」の一部にあたるものと推定されている（松原弘宣 1990）。

今回の調査では、過去の調査と同様に回廊の外側及び内側柱列をそれぞれ検出した。加えて外側柱列に接続した門と回廊を取り囲む区画構の一部を検出した。回廊の構造は外側柱列と内側柱列とで掘り方の形状や規模等が異なる点など、これまでの調査成果を追加する結果となった。

注目すべき点は回廊を構成する柱穴の配置である。外側柱列の柱穴の並びに対し、内側柱列の柱穴は直交せず、やや東方向に寄っているのである。これは何に起因するものなのであろうか。回廊自身の構造なのか、それとも、外側柱列と内側柱列が別の要素をもつ遺構であるのか、今後、回廊の全容を解明するとともに、研究課題のひとつになるであろう。

このほか、回廊の内側部分で柵列SA1を検出した。本稿では来住庵寺に先行する遺構であると考えている。形状はおそらく方形形状になるものと思われ、回廊とほぼ同じ方位をとっている。建物方位や柱穴埋土等から判断すると、回廊とSA1とは時期をあまり隔てることなく存在していた可能性を考えられる〔ただし、SA1と重複するSX1（来住庵寺創建瓦が出土）との前後関係は不明な点があり、今後、周辺の調査の結果次第では、SA1の時期が来住庵寺創建以降に下る可能性もある〕。

回廊、門及び柵列については、時期を特定できるような遺物の出土はあまりみられなかつたが、今後、回廊と柵列との関係や、それぞれの年代などを正確に把握し、寺院創建以前の来住寺地の状況などを的確につかむ必要があろう。

次に、来住庵寺に関してであるが、今までの調査成果を簡単に説明する。来住庵寺は7世紀後葉に前述の回廊を取り壊した後に造営された白鳳期の寺院と考えられている。昭和42年の調査によって現在の長隆寺境内の上塙が塔基壇であることが確認され、その後の調査で、基壇の北方約50mの地点に僧房が確認された。しかしながら、寺院の正確な建物配置や寺域の広がりなどは不明な点が多い。

今回の調査では、来住庵寺に直接関連する資料は残念ながら得られなかつたが、寺院存続期に建てられたと考えられる掘立柱建物址及び柵列SA2を検出した。掘立柱建物柱穴内には繩縄叩きを施した平瓦が置かれており、出土した須恵器などとともに、当該期の建物址と判断した。

寺域に関しては調査地内において、その西限を示すような資料は得られなかつた。塔基壇の位置や、これまでの調査成果及び今回の調査結果などから判断すると、調査区のやや東方に寺域の西限がある可能性が高いと考えられる。

松山平野には白鳳時代の寺院が8ヶ所知られている。来住庵寺のはか、湯ノ町庵寺・内代庵寺・中村庵寺・朝生田庵寺・中ノ子庵寺・千軒庵寺・上野庵寺である。

成 果 と 課 題

白鳳期、日本の政治の中核である近畿地方は別として、これだけの寺院が地方の限られた一地域に存在するところはごく稀である。来住庵寺の調査成果は古代の松山平野、とりわけ来住・久米地区を考えるうえでは貴重な資料となるものである。

今後、寺域の範囲や建物配置などを明確にし、来住庵寺の全貌を明らかにするとともに、それに関連する遺構・遺物に関して詳細な調査成果を上げなければならない。そして、過去の調査成果をふまえて、古代の来住・久米地域の復元、とりわけ、久米官衙及び来住庵寺周辺の遺跡群の全容把握を行うことが急務であろう。

〔参考文献〕

- 松原 弘宣 「伊予国久米評の成立と回廊状遺構」『日本歴史 第504号』
『愛媛県史－原始・古代I－』愛媛県史編纂委員会 1982
『松山市史料集 第2巻－考古編II－』松山市史料集編纂委員会 1988

写真図版

図版例言

1. 造構の撮影は調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67 レンズ ペンタックス67 55mm F4 他
ニコンニューFM2 他 ズームニッコール28~85mm 他
フィルム ネオパンSS

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ピュ-45G レンズ ジンマーS240mm F5.6 他
ストロボ コメット/CA-32 2灯・CB2400 2灯(パンク使用)
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム 白黒 プラスXパン 4×5
カラー エクタクロームEPP 4×5

3. 造構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

引伸機 ラッキー-450MD レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A
ラッキー-90MS レンズ エル・ニッコール50mm F2.8N
印画紙 インフォードマルチグレードIII RC

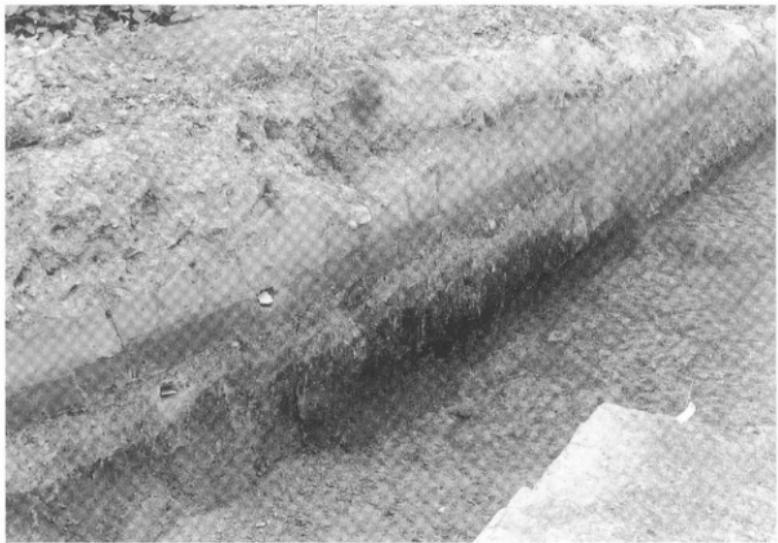
【参考】『埋文写真研究』 Vol.1 1990 Vol.2 1991 Vol.3 1992

Vol.4 1993 Vol.5 1994

〔大西朋子〕



1. 調査前全景（南西より）



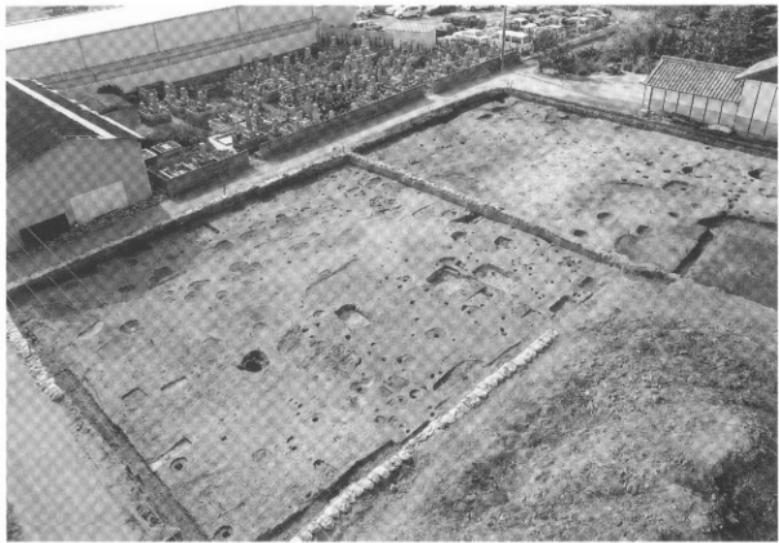
2. 西壁上層（南東より）



1. 造構検出状況①（南東より）



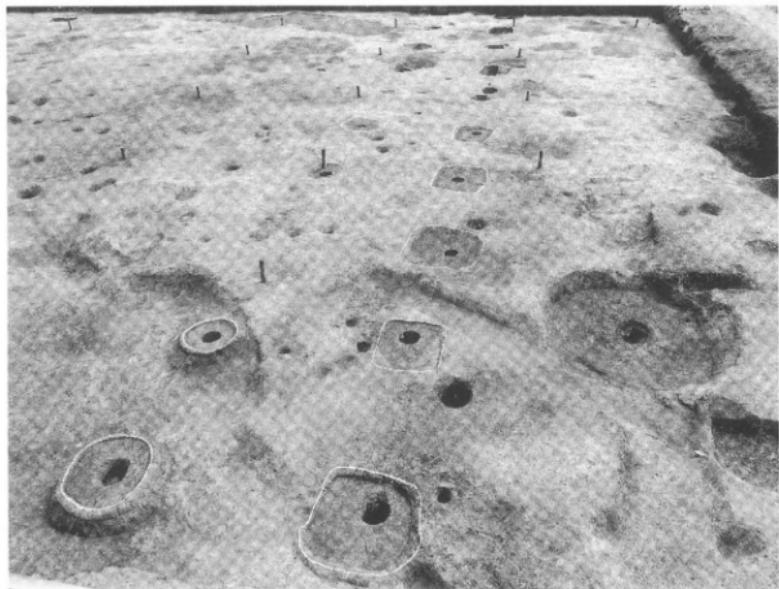
2. 造構検出状況②（東より）



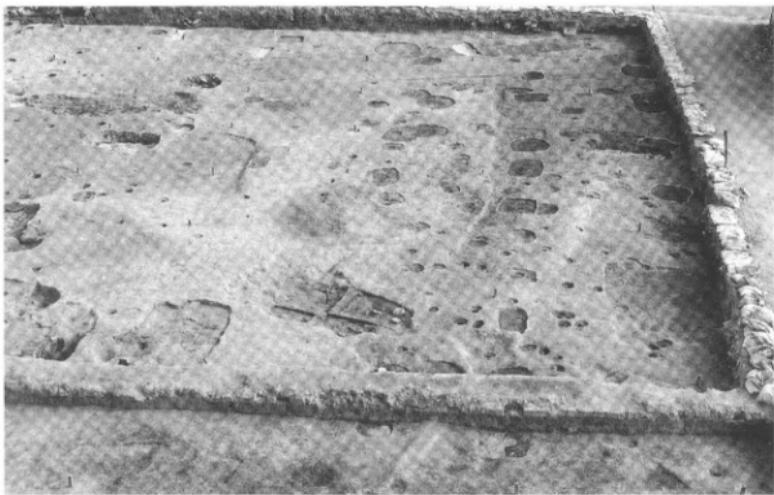
1. 造構検出状況③（北東より）



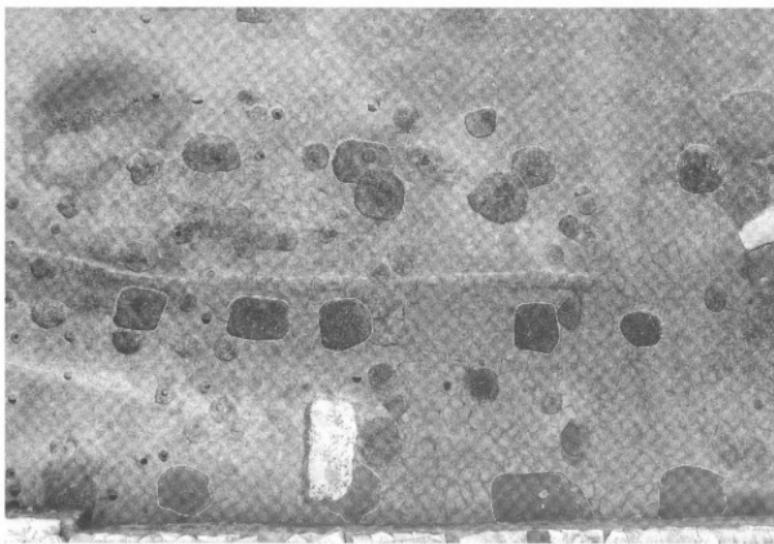
2. 回廊状造構検出状況①（南より）



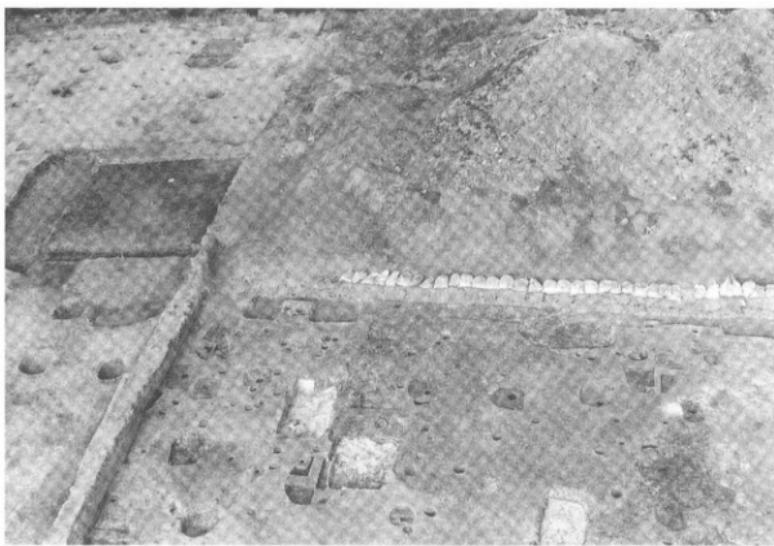
1. 回廊状遺構検出状況② (西より)



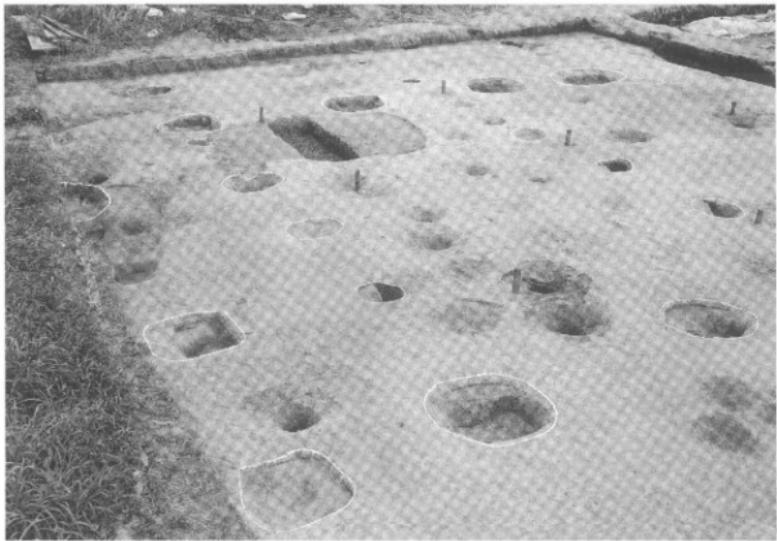
2. 回廊状遺構検出状況③ (西より)



1. 門検出状況（南より）



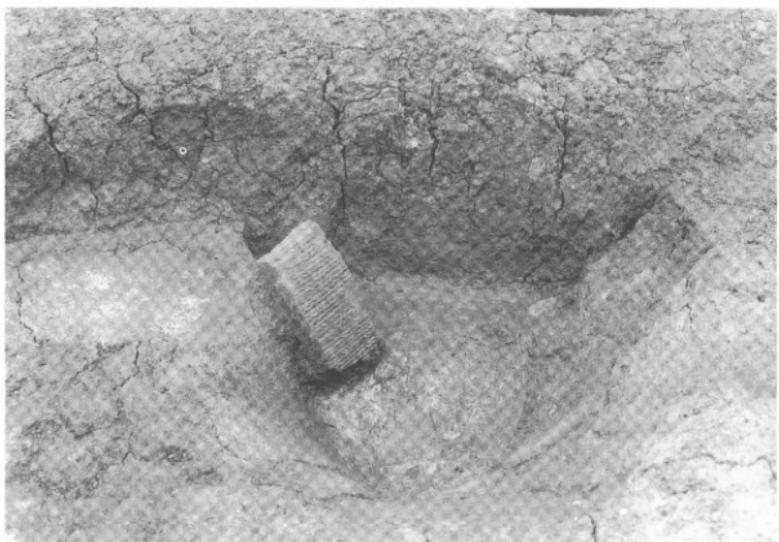
2. 檻列SA1検出状況（南より）



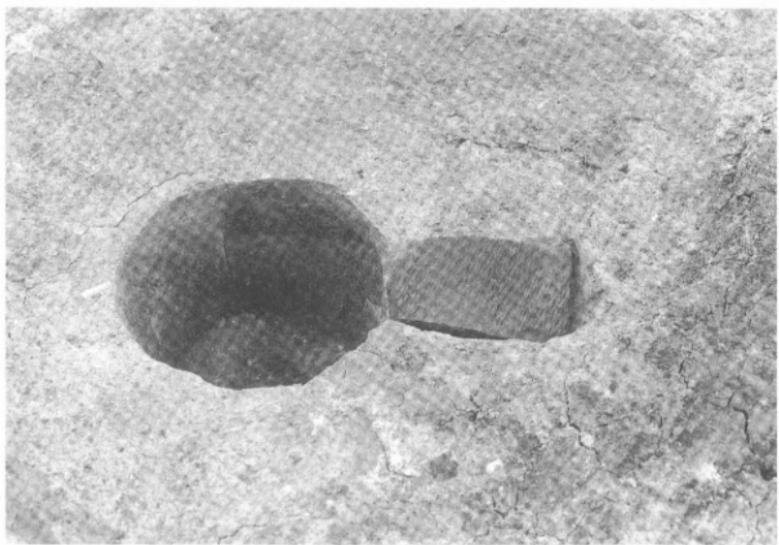
1. 檻列 SA 2・掘立 3 検出状況（北西より）



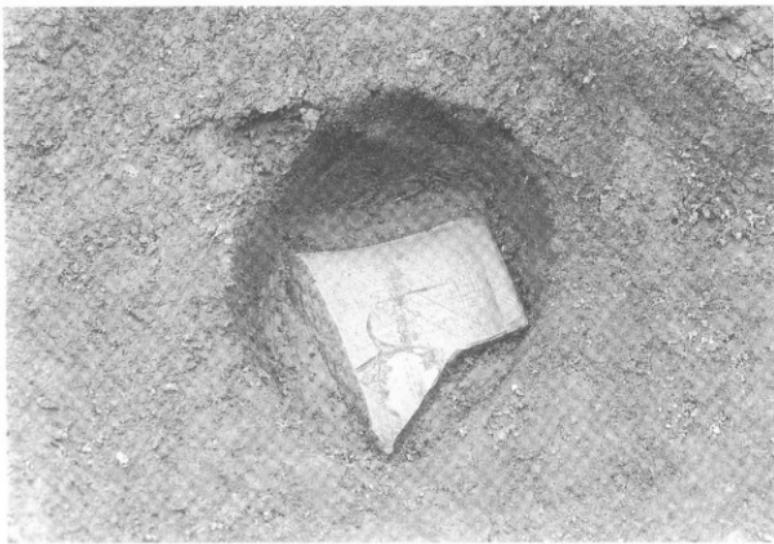
2. 掘立 1・掘立 2 検出状況（北東より）



1. 挖立1 (SP 67) 遺物出土状況 (西より)



2. 挖立1 (SP 7) 遺物出土状況 (南より)



1. 挖立2 (S P99) 遺物出土状況 (南西より)



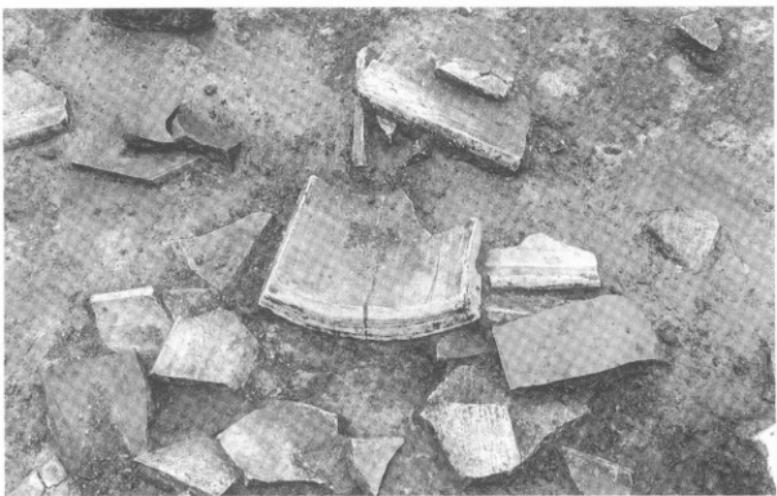
2. SX1 検出状況 (北東より)



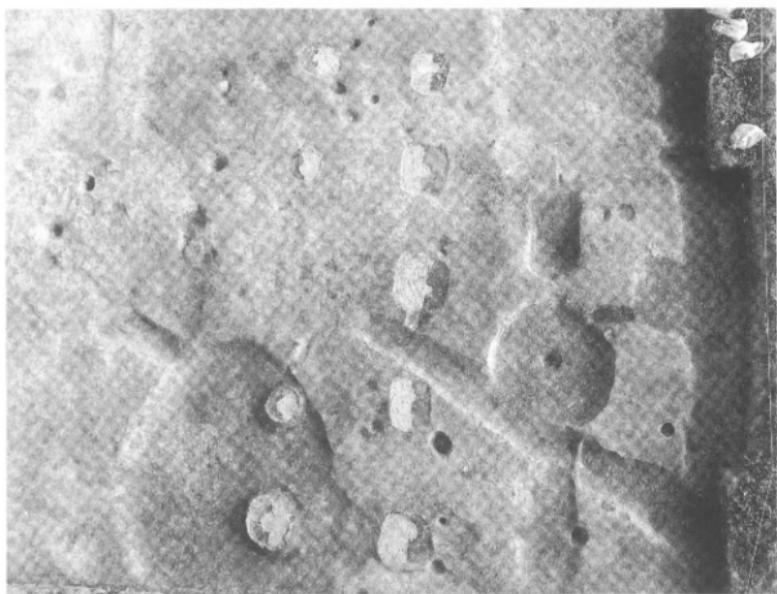
1. SX 1 遺物出土状況①（南西より）



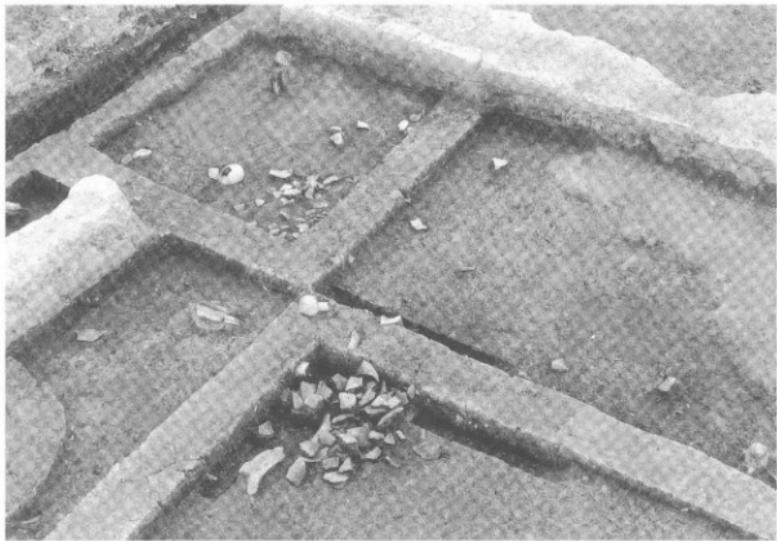
2. SX 1 遺物出土状況②（北より）



1. SX1 遺物出土状況③（東より）



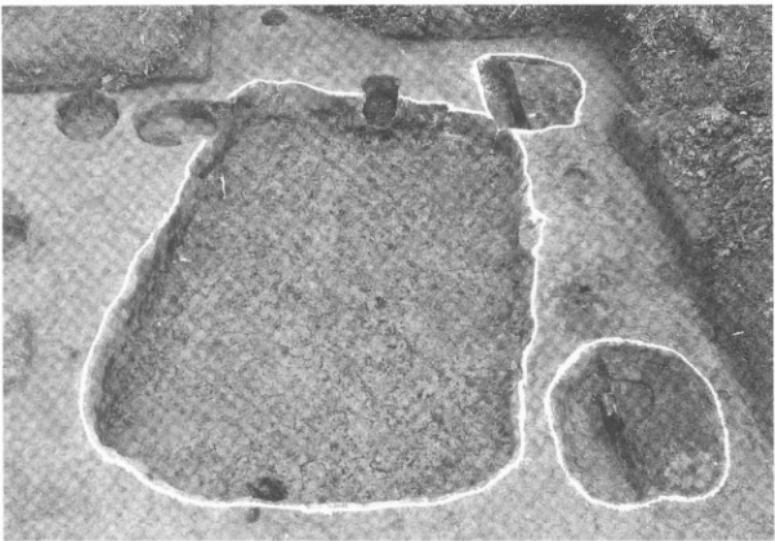
2. SD1~4・SK18・SK19検出状況（西より）



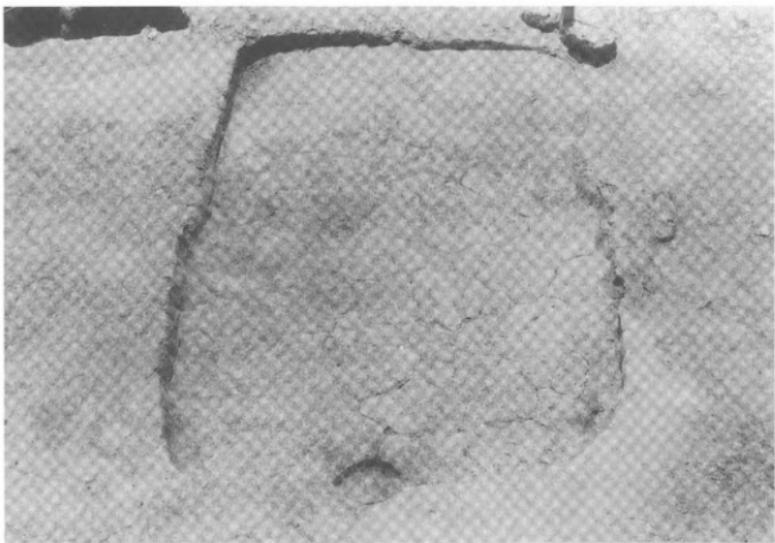
1. SK19遺物出土状況①（南東より）



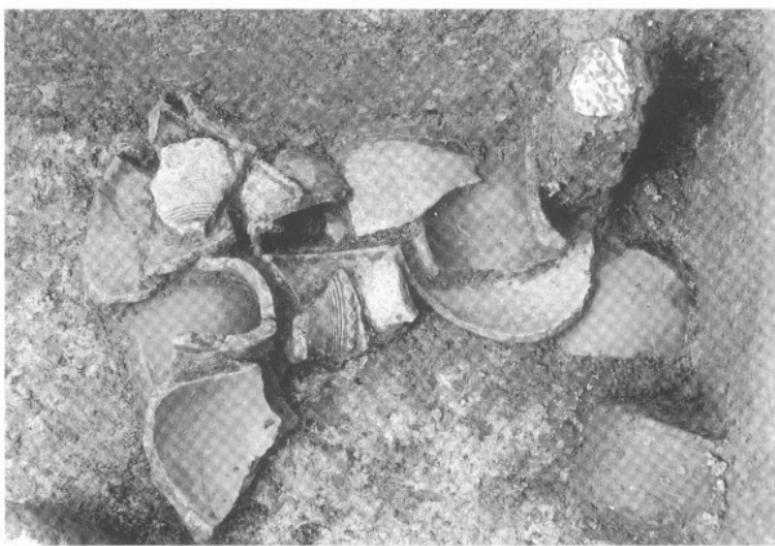
2. SK19遺物出土状況②（南東より）



1. SK 2 検出状況（南より）



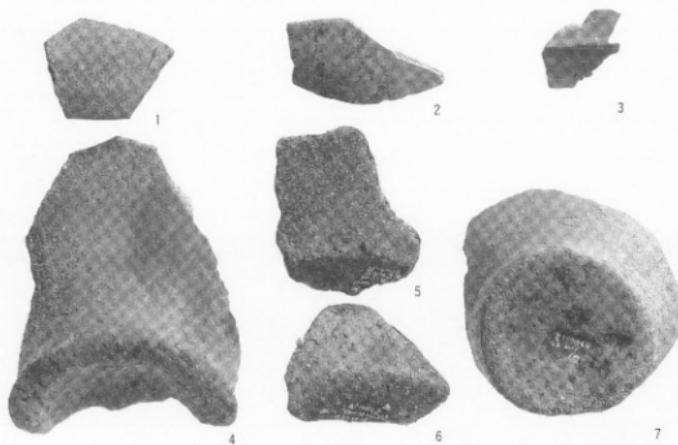
2. SK 8 検出状況（北より）



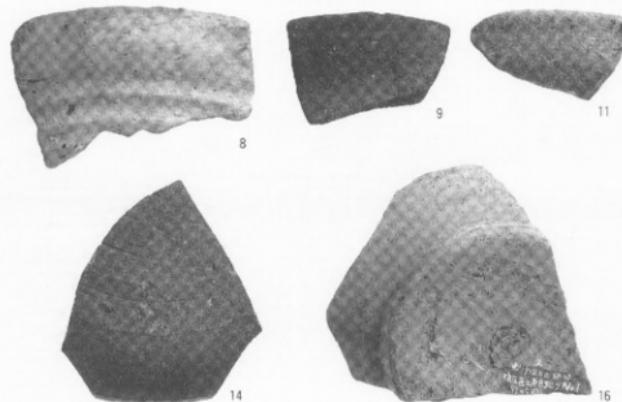
1. SK 2 遺物出土状況（南より）



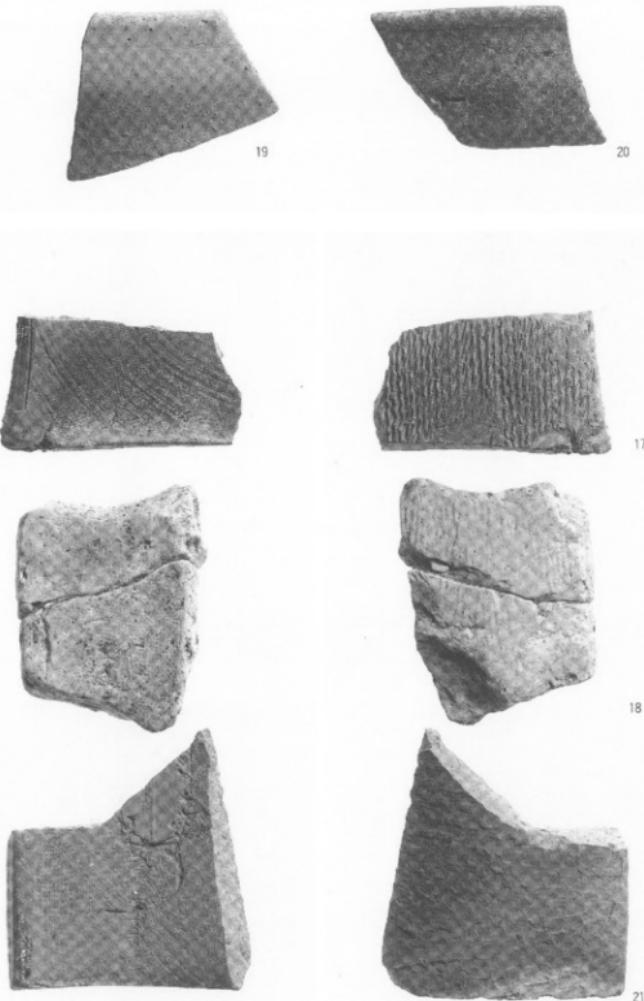
2. SK 18 遺物出土状況（南より）



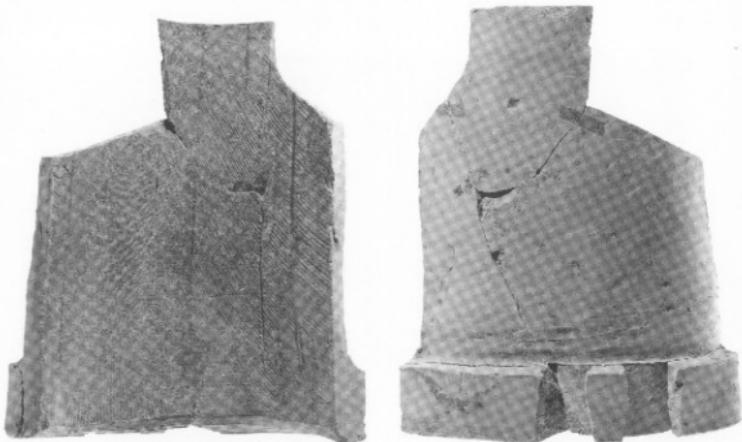
1. 圓廊狀遺構出土遺物 (1·2·4·5) 門出土遺物 (3·6·7)



2. 捉立 1 出土遺物①



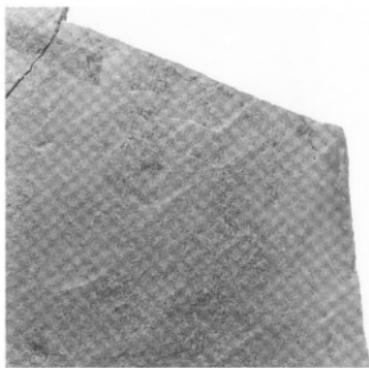
1. 挖立1出土遺物② (17・18) 挖立2出土遺物 (19~21)



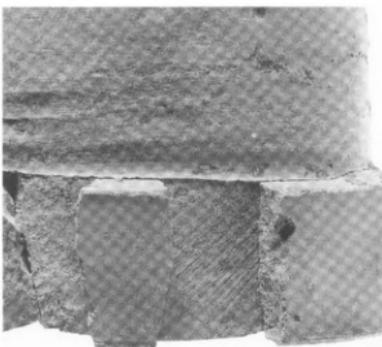
23



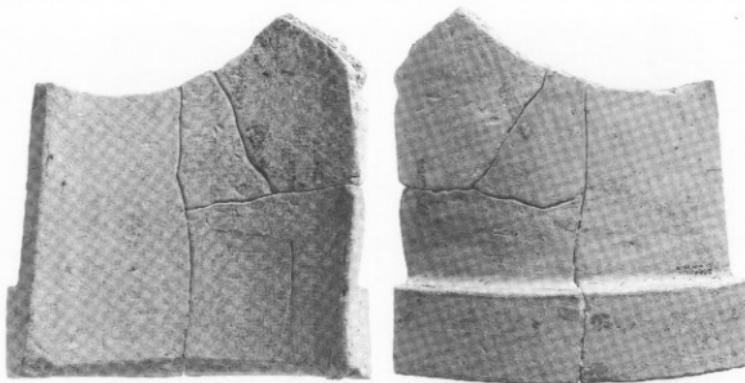
23



1. SX1 出土遗物①



23



24

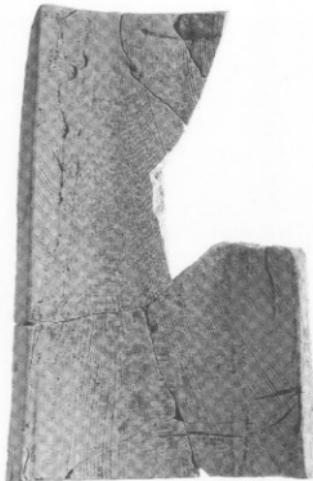


24

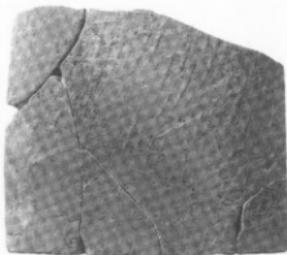


22

1. SX 1 出土遺物②

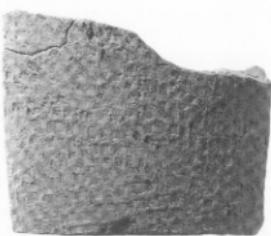
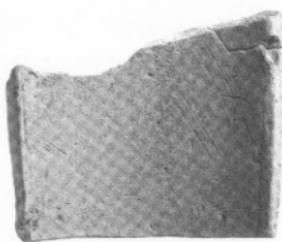


25

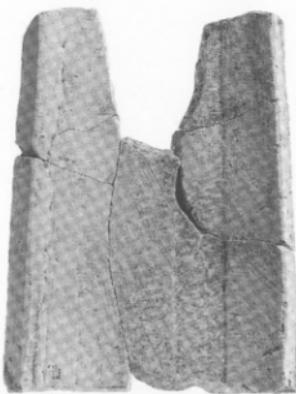


26

1. SX 1 出土遺物③



27

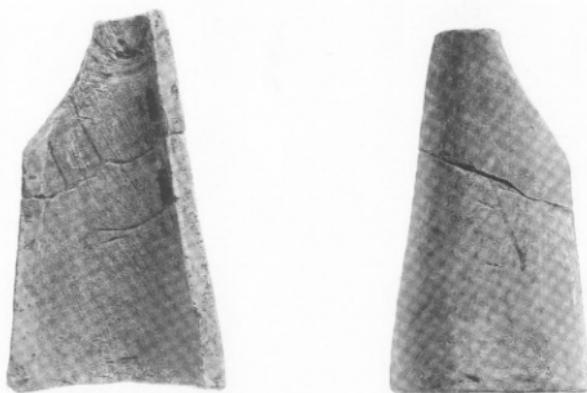


29

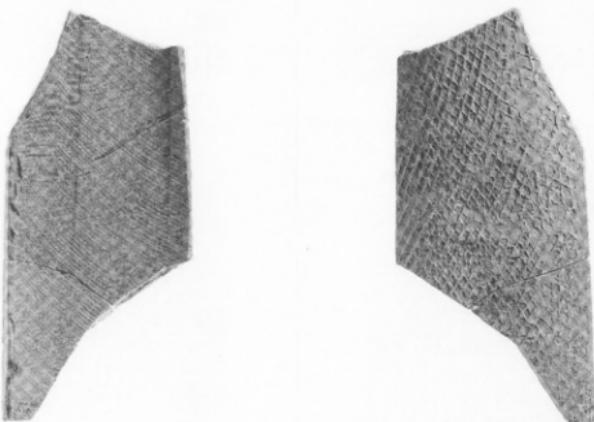


30

1. SX1 出土遺物④

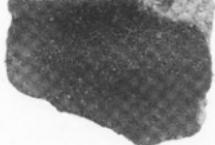


31



33

1. SX1 出土遺物⑤



39

44

58

60



72



61

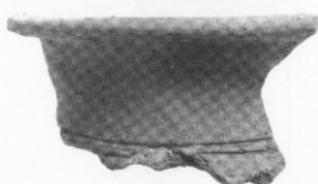
1. SX1出土遺物⑥(34~39・44) SK19出土遺物(58・60・61) SK22出土遺物(72)



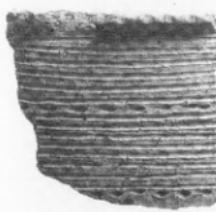
73



74



75



77



78

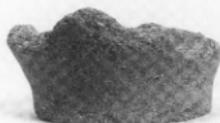
1. SK 2 出土遺物 (73~75) SK 6 出土遺物 (77·78)



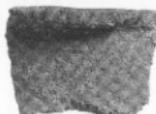
79



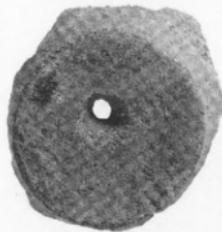
82



84



88



81



89



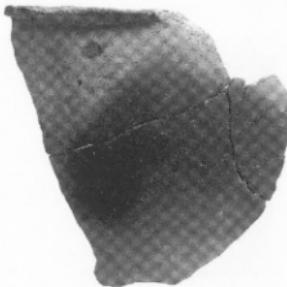
83



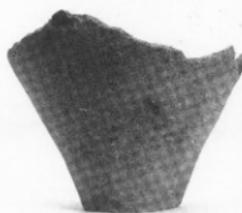
1. SK 8 出土遺物 (79·81) SK 10出土遺物 (82·83) SK 11出土遺物 (84)
SK 13出土遺物 (88) SK 14出土遺物 (89)



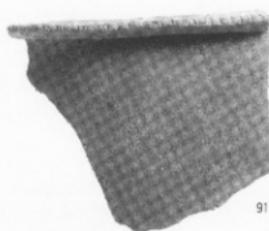
93



95



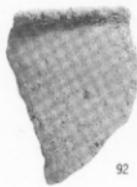
96



91



94

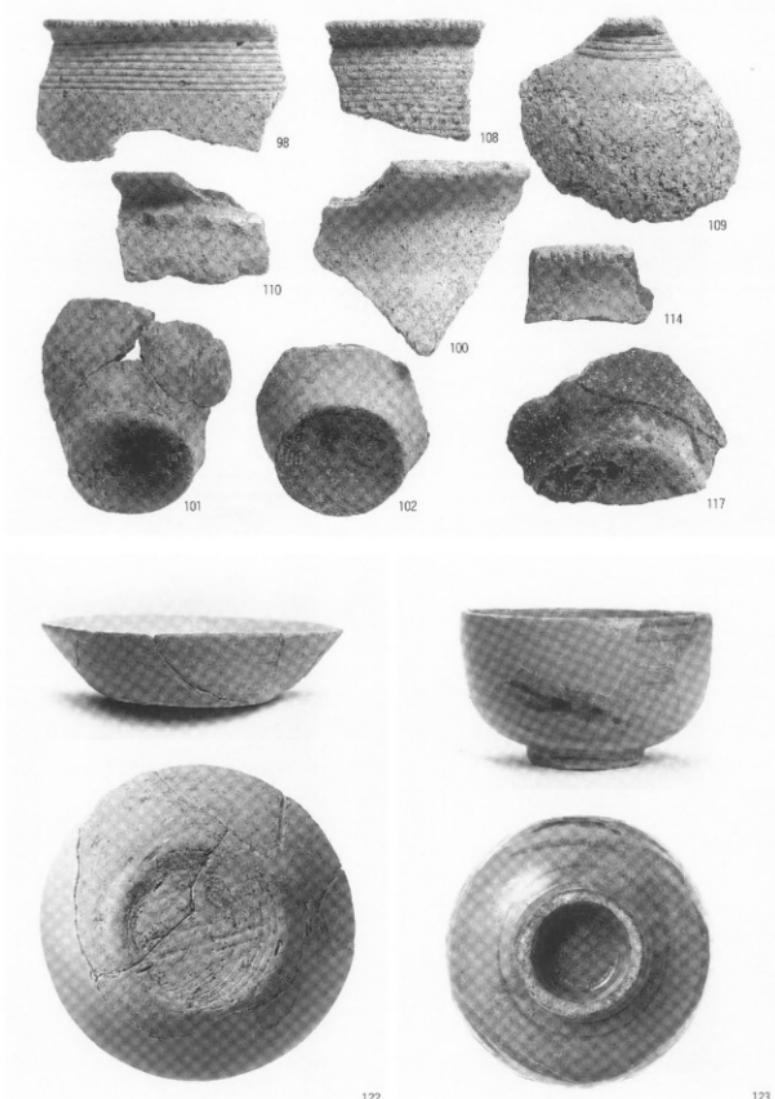


92



97

1. SK18出土遺物



1. S P82出土遺物 (98・100) S P155出土遺物 (101・102) 包含層出土遺物① (108~110・114・117)
SK32出土遺物 (122・123)



125



126



127

1. 包含層出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	きしはいじ だいじゅうくじょうさ						
書名	米住庵寺 第19次調査						
副書名							
巻次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第56集						
編著者名	宮内慎一・水本完児						
編集機関	財團法人 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター						
所在地	〒791 松山市南斎院町乙67番地6 Tel 089-923-6363						
発行年月日	西暦1996年6月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
愛媛県松山市 米住町833・844・ 845	米住庵寺19次	38201	33° 51° 59"	132° 48° 26"	19920407～ 19930131	1,863.95	専用住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
米住庵寺19次	官衙 集落	弥生 古墳 古代 中世	回廊状遺構 門 櫛列 掘立柱建物址 土坑、溝	弥生土器、上師器 須恵器、瓦、石器	古代の官衙関連遺構 の検出		

松山市文化財調査報告書 第56集

来住廃寺 一第19次調査一

平成8年6月20日 発行

編集 松山市教育委員会

発行 〒790 松山市二番町4丁目7-2
TEL (089) 948-6605

財團法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地
TEL (089) 923-6363

印刷 明星印刷工業株式会社
〒790 松山市十居田町500番地
TEL (089) 971-7111